サマセット・モームの戯曲

（注）「初演」欄が（　　）のものは上演されておらず、数字は執筆の年を表している。
丸数字は"The Collected Plays"（全 3 巻, Heinemann, 1952）所収の volume number。

№.	タ　イ　ト　ル	原　　題	幕	初 演
1	男女の仲は神のみぞ知る	Marriages Are Made in Heaven （上演名：Schiffbrüchig）	1	1902 独
2	名誉を重んじる人	A Man of Honour	4	1903 英
3	リハーサル	A Rehearsal （上演名：Mademoiselle Zampa）	1	1904 英
4 ①	フレデリック夫人	Lady Frederick	3	1907 英
5 ①	ジャック・ストロー	Jack Straw	3	1908 英
6 ①	ドット夫人	Mrs. Dot （初期名：Worthley's Estate）	3	1908 英
7	探検家	The Explorer	4	1908 英
8 ①	ペネロペ	Penelope （初期名：Man and Wife）	3	1909 英
9	高貴なスペイン人	The Noble Spaniard （E.G-Dancourt "Les Gaietés de veuvage" の翻案）	3	1909 英
10 ①	スミス	Smith	4	1909 英
11	十人目の男	The Tenth Man	3	1910 英
12	地主階級	Landed Gentry （上演名：Grace）	4	1910 英
13	パンと魚	Loaves and Fishes	4	1911 英
14	ブライトンへの旅	A Trip to Brighton （Abel Tarride の翻案）		1911 英
15	完璧な紳士	The Perfect Gentleman （モリエール『町人貴族』の翻案）	2	1913 英
16 ①	約束の地	The Land of Promise	4	1913 米

№.	タ　イ　ト　ル	原　　題	幕	初 演
17 ②	手の届かぬもの	The Unattainable （上演名：Caroline）	3	1916 英
18 ②	おえら方	Our Betters	3	1917 米
19	ビーミッシュ夫人	Mrs. Beamish	3	(1917)
20	こんな事情で	Under the Circumstances	3	(1917?)
21	片田舎での恋	Love in a Cottage	4	1918 英
22 ③	シーザーの妻	Caesar's Wife （初期名：The Keys to Heaven、米上演名：Infatuation）	3	1919 英
23 ②	家庭と美人	Home and Beauty （米上演名：Too Many Husbands）	3	1919 米
24	今夜はよそう、ジョセフィーヌ！	Not To-Night, Josephine!		(1919)
25 ③	知られざるもの	The Unknown	3	1920 英
26	上り坂の道	The Road Uphill	3	(1920)
27 ②	ひとめぐり	The Circle	3	1921 英
28 ③	スエズの東	East of Suez	7 場	1922 英
29	雨	Rain（J.Colton と C.Randolph による同名短編小説の翻案）	3	1922 米
30	ラクダの背中	The Camel's Back	3	1923 米
31	月と六ペンス	The Moon and Sixpence（Edith Ellis による同名長編小説の翻案）	6 場	1925 英
32 ②	コンスタント・ワイフ	The Constant Wife	3	1926 米
33	手紙	The Letter（モームによる同名短編小説の戯曲化）	3	1927 英
34 ③	聖火	The Sacred Flame	3	1928 米

№.	タ　イ　ト　ル	原　　題	幕	初 演
35	自然界の力	The Force of Nature	3	(1928)
36 ②	働き手	The Breadwinner	3 場	1930 英
37	五彩のヴェール	The Painted Veil（B. Cormack による同名長編小説の翻案）	3	1931 英
38 ③	報いられたもの	For Services Rendered	3	1932 英
39	仮面と素顔	The Mask and the Face （ルイージ・キアレッリ『仮面と素顔』の翻訳）	3	1933 米
40 ③	シェピー	Sheppey	3	1933 英
41	アシェンデン	Ashenden（Gerge Cambell Dixon による同名短編集の翻案）		(1933)
42	劇場	Theatre（英上演名：Larger than Life）（同名長編小説の翻案）	3	1941 米
43	ジェイン	Jane（S. N. Behrman による同名短編小説の翻案）	3	1946 英
44	パーティーの前に	Before the Party（Rodney Ackland による同名短編小説の翻案）	2	1949 英
45	モームの想い出	Remembering Mr. Maugham（G. Kanin による同名回想録の舞台化）	1	1969 米
46	ランベスのライザ	Liza of Lambeth（梅野郁夫による同名長編小説の独自翻案）		1972 日
47	人間の絆	Of Human Bondage （Vern Thiessen による同名長編小説の翻案）	4	2014 加
48	ラガブラブ	Lagablab （Dan Hollanda による短編小説 "The Unconquered"の翻案）		2016 比
49	パリでのランチ	A Lunch in Paris （短編小説"The Luncheon"の翻案）		2017 印

モームの戯曲の翻訳書

（丸数字は初演順）

1．『モーム初訳 6 選 埋めてしまった才能』
（短編 4 編を含む全 6 編、2002 年、創造書房）
①『男女の仲は神のみぞ知る』野口知美ほか訳
（1902 年独初演“Marriages Are Made in Heaven”、上演名“Schiffbrüchig”）
②『リハーサル』安西利香ほか訳
（1904 年英初演“A Rehearsal”、上演名“Mademoiselle Zampa”）

2．『舞臺』昭和 10 年 11 月号～昭和 11 年 1 月号（1935 年、舞臺社）
③『ジャック・スツロウ』大村三保子訳（1908 年英初演“Jack Straw”）

3．『スミス・生計をいとなむもの』（1985 年、英宝社）
④『スミス』井出良三訳（1909 年英初演“Smith”）

4．『サマセット・モーム全集 21　戯曲集Ⅰ　ひとめぐり・おえら方』
（1956 年、新潮社）
⑤『おえら方』木下順二訳（1917 年米初演“Our Betters”）
⑦『ひとめぐり』木下順二訳（1921 年英初演“The Circle”）

5．⑥『夫が多すぎて』（2001 年、岩波文庫、海保眞夫訳）
（1919 年英初演“Home and Beauty”、米上演名“Too Many Husbands”）

6．⑧『聖火』（2017 年、講談社文芸文庫、行方昭夫訳）
（1928 年米初演"The Sacred Flame"）

7．『報いられたもの／働き手』（2018 年、講談社文芸文庫、行方昭夫訳）
⑩『報いられたもの』（1932 年英初演、“For Services Rendered”）
⑨『働き手』（1930 年英初演“The Breadwinner”）

8．『サマセット・モーム全集 22　戯曲集Ⅱ　シェピー』（1955 年、新潮社）
⑪『シェピー』瀬口城一郎訳（1933 年英初演“Sheppey”）

№1	男女の仲は神のみぞ知る （1 幕）
原　題	Marriages Are Made in Heaven （上演名：Schiffbrüchig）
梗　概	（ヴィヴィアン夫人（ロッティー）の邸宅の客間） 　ジャックとロッティーの結婚式の前日。二人がいるロッティーの邸宅に、ジャックから花婿の付添人を頼まれたハーバートがやって来る。ハーバートはジャックと一緒にオックスフォード大を出た親友で、医者の娘と婚約して絵に描いたような優等生的な生活を送っている。挨拶が済んで、ジャックが用事で席を外すと、ハーバートはロッティーに、ジャックを貴族の愛人だったような女と結婚させる訳にはいかないと言い出す。ところが、ロッティーが頑として受け付けないので、結局ハーバートはジャックにも同じことを言うことになる。それを聞いたジャックは、ロッティーが今は亡きある貴族の愛人であったお陰で年 1,200 ポンドの収入があることを知っており、自分はオックスフォード大を出ながらも、自信過剰から苦難の人生を歩み、辛酸を舐めてきて、金にも不自由しているが、結婚を申し込んだのは自分からではなくロッティーからだと言う。ハーバートはそんな結婚は不名誉なことだと憤って帰ってしまう。残された二人は、自分たちは今熱烈に愛し合っている訳ではないが、これから愛を深めていこうと誓い合う。
執　筆	1896-1897 年（22-23 歳）（*Theatrical Companion to Maugham*, 1955） 1898 年（24 歳）（*The Secret Lives of Somerset Maugham*, 2009）
上演歴	1902 年 1 月 3 日～（Schall-und-Rauch, Berlin）（a tiny cabaret theatre）（8 回）
初　版	“The Venture”（1903 年）所収
翻訳書	『モーム初訳 6 選 埋めてしまった才能』所収『男女の仲は神のみぞ知る』（2002 年、創造書房、西谷顕・野口知美・田原創・安西利香訳）

№2	名 誉 を 重 ん じ る 人 （4 幕）
原　題	A Man of Honour
梗　概	［第 1 幕］（ブルームズベリにあるバジルの下宿の居間） ［第 2 幕］（1 年後、パットニーのバジルの家の客間） ［第 3 幕］（同じ日の午後、メイフェア、ヒルダの邸宅の客間） ［第 4 幕］（翌朝、パットニーのバジルの家の客間） 　弁護士で小説も書いているバジルは、親しく付き合っているバーの女給ジェニーが妊娠したので、彼女を愛してはいないけれども、そしてまた、友人のジョンがその問題を金銭で片づけるようにと強く忠告するのだが、道義的責任をとってジェニーと結婚する。 　しかし、胎児は流産し、かすがいとなる子供を失った二人の生活は、考え方や生き方の相違が表面化して、崩壊寸前の状態になる。バジルは以前から互いに愛情を抱いていた同じ階級の富裕な未亡人ヒルダをしばしば訪問するようになる。ジェニーはそれを嫉妬し、尾行する。そして、ついにバジルとヒルダが抱き合っている現場に押し入って、バジルの背信を責める。しかし、かえってバジルから「お前を愛していない」と突き放されてしまう。ジェニーは夫から見放されたことを苦にして入水する。 　ジェニーに自殺されて、バジルも死のうとするが、死にきれないでいるところへ、ジョンがやって来て、ジェニーの家族の非難や不満をすべて金銭で解決してしまう。そして、検死官やヒルダが訪れて来るのを待つ。
執　筆	1898 年（24 歳）、1902 年（28 歳）Revived
上演歴	1903 年 2 月 22 日（evening）、23 日（matinée）（Imperial Theatre, London）（by Stage Society）（2 回） 1904 年 2 月 18 日～（Avenue Theatre, London）（in Public）（28 回）
初　版	Dramatic Publishing Company（1903 年）
翻訳書	『名誉を重んじる人』 （2017 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№3	**リ　ハ　ー　サ　ル** **（1 幕・笑劇）**
原　題	A Rehearsal （上演名：Mademoiselle Zampa）
梗　概	（ミュージックホールのステージ） 　バレエのリハーサルをやることになっている劇場のステージ。支配人ジェンキンソンと世間をあっと言わせるような革新的なバレエの作曲家ルシアンは、ルシアンの婚約者でもあるプリマ・バレリーナ、マドモアゼル・ザンパの到着が遅いので、いらいらしながら待っている。やっとザンパが父親と一緒に到着し、バレエ・スカートとタイツにバレエ・シューズを履いてリハーサルにのぞもうとする。すると、ジェンキンソンが台本に「公爵夫人が王室の園遊会で踊る」とあるのだから、ハイヒールを履いて踊れと言う。ザンパは自分の流儀に反すると言って拒絶し、父親も抗議する。ルシアンが、今観客が求めているのはリアリズムだと諭し、愛してくれている自分のためにもやってくれるよう懇願するが、それでもザンパは拒否して言い争いになり、婚約を破棄すると言い出す。そこで、ジェンキンソンが、ザンパがやらないのなら、ザンパの不倶戴天の敵で育ちの悪いラ・フェラーリに頼むと言うと、ザンパ親子はそんな女と一緒にされてたまるかと怒って出て行こうとする。ルシアンも、ザンパが断るのはできないからだと言うと、プライドを傷つけられたザンパは、そんなことはないと言って、スカートにハイヒールを履いて見事に踊って見せる。踊り終わったザンパは、それでもスカートとハイヒールで観客に身をさらす訳にはいかないと言って断る。そこで、ジェンキンソンがラ・フェラーリに出演を依頼する電報をちらつかせながら、ラ・フェラーリは自分がいなければこのバレエは絶対にできっこないと言っていたと話す。ザンパは電報を奪い取って床に投げつけ、もうルシアンのことは愛していないが、ルシアンの作品がラ・フェラーリの手で汚されるのが許せないから役を引き受けると言う。ルシアンは喜んでザンパを抱こうとするが、ザンパはもうルシアンとは何の関係もないと言って拒否する。絶望に打ちひしがれたルシアンが、ザンパがスカートとハイヒールで踊れることは分かっていたが、侮辱でもしないと踊ってくれないと思ったから侮辱したのだと告げると、ザンパは納得し、二人は抱き合う。
執　筆	1896-1897 年（22-23 歳）
上演歴	1904 年 2 月 18 日～（Avenue Theatre, London）（20 回） （curtain-raiser to “A Man of Honour”）
初　版	Never published and no known manuscript exists. “The Sketch”（1905 年 12 月 6 日）所収（小説形式）
翻訳書	『モーム初訳 6 選 埋めてしまった才能』所収『リハーサル』（小説形式） （2002 年、創造書房、安西利香・西谷顕・田原創訳）

№4 ①	フレデリック夫人 （3 幕・喜劇）
原　題	Lady Frederick
梗　概	［第 1 幕］（モンテカルロの「ホテル・スプレンディド」の部屋） 　フレデリック夫人は、時々アイルランド訛りが出るが、相手に「ノー」と言わせない不思議な魅力を持った美しい妙齢の未亡人である。夫人は浪費癖のため、弟のジェラルドはギャンブルのため、借金で首が回らない状態である。夫人は、夫人に恋する 15 歳年下の若い侯爵ミアズトンと結婚するのが期日の迫った借金返済への近道なのだが、侯爵の母親ミアズトン夫人は当然結婚に反対で、かつてフレデリック夫人の恋人だった兄フォールズ（侯爵の伯父）に結婚阻止の工作を頼む。一方、ジェラルドは、カーライル提督の娘ローズと結婚したいのだが、借金があることは知られていないものの、ギャンブラーだという理由で提督に反対されている。しかし、フレデリック夫人がその魅力とウイットで提督を攻略し、二人は婚約に漕ぎ着ける。そういう状況の中、フォールズはフレデリック夫人に、手切れ金を出すと言ったり、過去の不倫スキャンダルをばらすぞと脅したりしてミアズトン侯爵と別れさせようとするが、夫人は反対にミアズトン夫人の亡夫（侯爵の父）の不倫の証拠の手紙をフォールズに見せて対抗する。 ［第 2 幕］（モンテカルロの「ホテル・スプレンディド」の部屋） 　ジェラルドに 900 ポンドを貸しているモンゴメリー大佐が、フレデリック夫人に 3,500 ポンドを貸している金貸しから証文を入手し、すべての借金を帳消しにすることを条件にして夫人に結婚を迫るが、夫人は借金を必ず返すと言って拒絶する。ミアズトン夫人がフレデリック夫人の過去の不倫スキャンダルの証拠の手紙を持ち出して説明を求めると、フレデリック夫人は義理の姉を救うために身代りになったのだと言って釈明するが、当事者がみんな死んでしまっているので信じてもらえない。フレデリック夫人は、ミアズトン夫人の亡夫の不倫の証拠の手紙を取り出すが、見せるのを思い留まって、焼いてしまう。フレデリック夫人の無実を信じるミアズトン侯爵は、母親の無礼なやり方に腹を立てて反抗し、夫人に結婚を申し込むが、夫人は即答せず、翌朝会いに来てほしいと言う。 ［第 3 幕］（フレデリック夫人の化粧部屋） 　翌朝、ミアズトン侯爵がフレデリック夫人を訪ねると、夫人はスッピンで登場し、メイクができ上がるまでの様子を見せつけることで歳の差を実感させ、侯爵に結婚を断念させる。そこへ、ジェラルドに借金があり、それを返さないと夫人がモンゴメリー大佐と結婚しなければならないことを知ったカーライル提督が、ジェラルドの借金を肩代わりして夫人に結婚を申し込む。夫人は近親相姦的関係（夫人は弟の義理の母、夫人の義理の娘は義理の妹、提督の娘は提督の義理の妹、ジェラルドは提督の義理の息子で義理の弟）に

	なるからと言って断る。そこへ、モンゴメリー大佐が登場し、貸金の返済を求めるが、ジェラルドの借金はすでに片が付いており、残るのはフレデリック夫人の借金だけである。すると、一連のやり取りの中で夫人への愛を再認識したフォールズが、その借金を返して大佐を追い返してしまう。そして、夫人からミアズトン侯爵を救い出すには自分が夫人と結婚するしかなかったことにしようと言って夫人に結婚を申し込む。フォールズと同じ気持ちの夫人はそれを受け入れる。
執　筆	1903 年（29 歳）
上演歴	1907 年 10 月 26 日～（Royal Court Theatre, London） 1908 年 3 月 10 日～（Garrick Theatre, London） 1908 年 4 月 27 日～（Criterion Theatre, London） 1908 年 6 月 8 日～（New Theatre, London） 1908 年 8 月 1 日～（Haymarket Theatre, London）（累計 422 回） 1908 年 11 月 9 日～1909 年 2 月（Hudson Theatre, New York）（96 回） 1913 年 4 月 26 日～（revived by Gilbert Porteous） （Globe Theatre, London）（57 回） 1946 年 11 月 21 日～（revived by Firth Shepherd） （Savoy Theatre, London）（144 回）
初　版	Heinemann, London（1912 年）
翻訳書	『フレデリック夫人』（2015 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳） 『フレデリック夫人』（2016 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、野口知美・田原創・安西利香訳）

№5 ①	ジャック・ストロー （3 幕・笑劇）
原　題	Jack Straw
梗　概	［第 1 幕］（「グランド・バビロク・ホテル」のラウンジ） ［第 2 幕］（チェシャー州、パーカー＝ジェニングズ夫妻の田舎屋敷「タバナー」の午前用の居間） ［第 3 幕］（チェシャー州、パーカー＝ジェニングズ夫妻の田舎屋敷「タバナー」の午前用の居間） 5 年前までは無名で平凡な庶民生活を送っていたパーカー＝ジェニングズ夫妻が、伯父の莫大な遺産を相続してから非常に派手な生活をするようになり、それまでの友人や知人を袖にしたり、面と向かって侮辱したりするようになる。また社交界へ出られるように手引きをしてくれた貴族に対しても、貧乏貴族であれば、これを無視する態度をとるようになったことから、袖にされたり無視された者たちが仕返しをしようとして、ホテルのウエイターで、謎めいた経歴だという噂のある人物ジャックを、最近 4 年間ほど行方がわからなくなっているポメラニア王国のセバスチャン大公に仕立て上げ、これを高貴な王侯貴族の知遇を得ようと躍起になっているパーカー＝ジェニングズ夫妻に紹介する。 夫妻はそれを真に受けて、ジャックに対し下にも置かぬもてなしをする。ジャックは夫妻の娘で、両親とは人柄も性格もまったく違って、しとやかで優しく、賢くて美しいエセルに一目惚れしてしまい、この計画にのったのだ。 しかし、仕返しを謀った人々は、夫妻の金に糸目をつけぬ盛大な歓待と、またそれをよいことに、長居を決めこんでいるジャックの態度に、かえって恐ろしくなり、ジャックはセバスチャン大公ではなくてホテルのウエイターだと打ち明ける。夫妻は怒ってジャックを追い出そうとするが、ジャックは自分を追い出して悶着を起こせば、夫妻は今後社交界に一切顔出しができなくなるだろうと言う。ジャックの指摘も道理なので、夫妻は仕方なくこれまで通りの接待を続けることにする。 そこへポメラニアの大使が、セバスチャンとエセルの結婚について、国王に許可が下りたと知らせに来る。居合わせた者たちがジャックは大公ではないと言うが、大使は、最近 4 年間は会っていないが、子供の時からよく知っているので、間違いないと断言する。一同は大いに驚くが、ジャックは正真正銘のセバスチャン大公だったのである。実は、ジャックは 4 年前ある女性に恋し、結婚を望んだが、祖父である国王の許しが得られず、それで、その女性のあとを追って国外に出奔し、名前もジャック・ストローと変えたのだ。しかし、その女性には自分が夫だと主張している男が、すでに 3 人ほどいることがわかって別れ、それからのちは、さまざまな仕事をしながら、自分の腕と才覚を頼りに生き、世界を放浪してきたのである。

	かくしてジャックは、エセルの心をつかみ、自分の望み通りに、彼女と結婚することになる。
執　筆	1905 年（31 歳）
上演歴	1908 年 3 月 26 日～（Vaudeville Theatre, London）（321 回） 1908 年 9 月 14 日～12 月（Empire Theatre, New York）（112 回） 1923 年 4 月 28 日～（revived by Thomas C. Dagnall） （Criterion Theatre, London）（90 回） 2014 年 10 月 24 日～11 月 2 日 （Linden House Theatre Company, Ottawa, Ontario, Canada）
初　版	Heinemann, London（1911 年）
翻訳書	『ジャック・スツロウ』 （『舞臺』1935 年 11 月号～1936 年 1 月号所収、舞臺社、大村三保子訳） 『ジャック・ストロー』 （2014 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№6 ①	ド　ッ　ト　夫　人 （3 幕・笑劇）
原　題	Mrs. Dot （初期名：Worthley's Estate）
梗　概	［第 1 幕］（ロンドン、ジェラルド・ハルステインのフラット） ［第 2 幕］（数週間後、テムズ河畔のワースリー夫人（ドット夫人）の邸宅、庭） ［第 3 幕］（1 週間後、テムズ河畔のワースリー夫人（ドット夫人）の邸宅、午前用の居間） 　ドット夫人は夫の死後引き継いだビール会社の経営を積極的に展開し、大いに業績を上げ、資産も二倍に増やすほどの活躍をしているが、まだ色香の衰えを見せぬ 30 代半ばの魅力的な女性である。彼女はかねてからある貴族の次男のジェラルドに恋していて、彼との結婚を望んでいる。 　ジェラルドもまた彼女に対して愛情を抱いているのであるが、彼にはすでに 3 年前ふとしたきっかけで婚約してしまったネリーという婚約者がいる。その上ジェラルドは株売買の失敗と友人の借金に連帯保証をしたため、現在経済的に非常に苦しい状態にあり、それでネリーの母親は娘と彼との結婚に反対している。ドット夫人は自分と結婚すれば経済的な苦境から救われるとジェラルドに言うが、彼は金のために結婚はしたくないと断る。そこへジェラルドの従兄が戦死したので、ジェラルドがホリングトン家の莫大な遺産と爵位を相続することになったとの知らせが届く。ネリーの母親は大喜びで娘の結婚に賛成する。ジェラルドを取り巻く状況が百八十度変わってしまったけれども、ドット夫人は少しも落胆せず、女は自分のほしいものを必ず手に入れるのだと言う。 　ドット夫人は自分の甥のフレディーとネリーが互いに好意を持っているのを知って、それぞれに対して、相手が表面上の言動とは裏腹に、本心では激しく恋焦がれているので、それを諦めさせるため、つれなくするようにと忠告し、かえって両者の関心を掻き立てるという手段を用いて、フレディーとネリーの恋心を掻き立てると共に、フレディーに対して、ネリーと結婚すれば十分な経済的保証を与えてやると約束する。そうすると、若い二人は早速駆け落ちしてしまう。また、ドット夫人は、ジェラルドに対してもさまざまな手段を用いて、ついに彼を射止め、その思いを遂げる。
執　筆	1904 年（30 歳）
上演歴	1908 年 4 月 27 日～（Comedy Theatre, London）（272 回） 1910 年 1 月 24 日～3 月（Lyceum Theatre, New York）（72 回） 1951 年 10 月 2 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors） （Arts Theatre, London）

初　版	Heinemann, London（1912 年）
翻訳書	『ドット夫人』（2014 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№7	探　　検　　家 （4 幕・通俗劇）
原　題	The Explorer
梗　概	［第 1 幕］（パーク・レーン、ケルシー夫人の家） ［第 2 幕］（砂漠のキャンプ） ［第 3 幕］（パーク・レーン、ケルシー夫人の家） ［第 4 幕］（ポートマン・スクエア、リチャード・ローマスの書斎） 　文書偽造罪で裁判にかけられていた父親の有罪が確定し、嘆き悲しむルーシーに、かねてから思いを寄せていた探検家のアレックが、彼女の嘆きを少しでも和らげようとして、求婚する。だが、ルーシーは服役中の父親を精神的に支えてやらねばならないからと断る。しかし同時に、意志薄弱な弟ジョージをアフリカ探検に伴い、鍛えてほしいと頼む。そして、結婚については、アレックがアフリカから帰国した時に改めて返事をすると言う。 　ジョージをアフリカへ伴ったアレックは、探検隊の中で足手まといと非難されているジョージをかばっている。探検隊は現在アラブ人奴隷商人の武装集団に包囲されていて、非常に緊迫した状況に置かれている。そのような時に、ジョージが自分の欲情を満たそうとして、原住民の女性を殺したため、これまで探検隊に協力していた原住民の部族が離反し始める。そのため、探検隊は次第に窮地に追い込まれ、ついに撤退を余儀なくされる。アレックは陽動作戦を立て、ジョージの名誉回復のため、彼を一方の隊長にする。しかし、撤退の際の戦闘でジョージは戦死する。 　それより以前に、不行跡のため現地アフリカで探検隊から追放されていた男が、アレックに対する反感から、アレックが故意にジョージを死地に追いやったのだとイギリスの新聞に投書する。帰国したアレックは、ジョージの名誉とルーシーの嘆きをおもんばかって、そのことには何の反論も説明もしない。そのため、アレックを信じ、身内や友人の反対を押し切ってアレックと婚約したルーシーも、ついに婚約を解消する。 　失意のアレックは再び帰らぬ覚悟で、極めて危険なアフリカ奥地の探検に出掛けることにする。その出発の前日、友人の計らいでアレックと対面したルーシーは、彼に「たとえどんなことがあったとしても、わたしはあなたを愛し、信じています」と告げる。その言葉を聞いて、アレックも、今回は死地を求めての探検行と考えていたが、今は生きて帰れるよう努力するとルーシーに約束し、出発する。
執　筆	1899 年（25 歳）
上演歴	1908 年 6 月 13 日～（Lyric Theatre, London）（48 回） 1909 年 5 月 19 日～ （revived by Lewis Waller）（Lyric Theatre, London）（7 回）

	1912 年 5 月 7 日～26 日（Daly's Teatre, New York）（23 回）
初　版	Heinemann, London（1912 年）
翻訳書	『探検家』（2017 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№8 ①	ペ　ネ　ロ　ペ （3 幕・喜劇）
原　題	Penelope （初期名：Man and Wife）
梗　概	［第 1 幕］（メイフェア、ジョン・ストリートにあるオファレル医師の家の客間） ［第 2 幕］（1 か月後、診察室） ［第 3 幕］（翌日、ペネロペの居室） 　ペネロペは、愛する夫、医師のディッキーと連れ添って 5 年余り。夫が近頃キャサリン･マックというありもしない患者を治療するという触れ込みで、実は海軍士官の夫人エイダ･ファーガソンと密会しているという事実を知り、離婚しようと決心して、数学者である父のゴーライトリー並びに母のゴーライトリー夫人、伯父のダベンポート・バーロー、弁護士のビーズワースらを呼ぶ。父は数学者にも似合わず、案外世事に通じた男で、ペネロペに夫を愛しすぎるからいけないと忠告する。そこでペネロペも反省して離婚することを思いとどまり、折から来訪して来たエイダを、夫と共にミュージックホールへ送り出したあと、ワッとむせび泣く。 　ディッキーは近頃患者が減り、その上エイダと競馬に出掛けお金の要る一方であるが､ペネロペは素知らぬ顔で済まし高い服を買って自ら慰めている。ディッキーは例のありもしない患者マック夫人をパリまで送って行くのだと言っているが、実はエイダと遊山旅行に出掛ける積りらしい。しかし、愛しすぎる事をやめたペネロペは、見て見ぬ振りで済ましている。一方エイダはディッキーの懐具合の苦しいにもかかわらず、いろいろ贅沢を尽くし、株式で損をして、その穴埋めまでもディッキーに頼むので、ディッキーの心は冷めてくる。彼は妻に、自分がマック夫人とパリに行くのを本当だと思ってるのかと尋ねると、ペネロペは大声で笑い出し、何もかも知っていたと明かす。はなはだしく自尊心を傷つけられた夫は、ペネロペに向かって憤慨するが、思い直して、エイダとのパリ行きを中止する。エイダが来訪してくると、夫の言い付け通りに、ペネロペはエイダにマック夫人は死んだと告げ、夫はもはや、エイダに愛情を持っていない事を暗示し、夫もエイダに絶交を言い渡す。さて、万事めでたく収まって、ペネロペがちょっと外出したいと言うと、ディッキーは一応これを禁止するが、ペネロペが今まであなたにはちょっとした享楽を許してあげたのだから、これくらいの事は自分にも許してほしいと言う。ディッキーは愛する者が自分のそばにいない寂しさを、初めてしみじみと悟り、今までの妻の犠牲がどんなに大きかったかを思い、快く妻を出してやる。
執　筆	1908 年（34 歳）

上演歴	1909 年 1 月 9 日～（Comedy Theatre, London）（246 回） 1909 年 12 月 13 日～1910 年 1 月（Lyceum Theatre, New York）（48 回） 1953 年 9 月 10 日～（revived by Arts Theatre Group of Actors） （Arts Theatre, London）（30 回）
初　版	Heinemann, London（1912 年）
翻訳書	『ペネロペ』（2015 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№9	高貴なスペイン人 （3 幕・喜劇）
原　題	The Noble Spaniard （Ernest Grenet-Dancourt “Les Gaietés de veuvage” の翻案）
梗　概	［第 1 幕］（ジャスティス・プラウドフット氏の家、午前用の居間） プラウドフット家に客として来ている魅力的な若い未亡人マリオンは、周りから再婚を勧められている。見知らぬスペイン人が、遠巻きに 3 週間もマリオンの跡をつけていて、みんなが留守の時にマリオンの前に現れる。スペイン人は公爵だと名乗ってマリオンに求婚するが、突然のことだったので、マリオンは夫がいると言って追い払う。その後、プラウドフットがマリオンの亭主だと思った公爵はプラウドフットに決闘を申し込むが、プラウドフットは拒絶する。妻が公爵をその気にさせていると思ったプラウドフットが妻を叱責すると、妻はわっと泣き出してプラウドフットの腕に崩れ落ちる。その場面を目撃した公爵は、プラウドフットの妻を愛人だと勘違いする。 ［第 2 幕］（ジャスティス・プラウドフット氏の家、客間） 公爵はマリオンに亭主（実はプラウドフット）がほかの女性と浮気していると告げ、マリオンに駆け落ちしようと誘って、ブーケを送るから用意ができたら窓から投げて合図するように言って出て行く。ブーケがプラウドフット夫人に届くと、プラウドフットは怒って窓から投げてしまう。公爵はこのブーケを持ってすぐに戻り、それを置いて出て行く。怖くなったプラウドフット夫人がマリオンの妹ルーシーにブーケを渡すと、婚約者のチャルフォードが怒りだし、今度はルーシーがブーケを外へ投げ捨てる。チャルフォードがマリオンの愛人だと思った公爵は、再びブーケを持って現れ、チャルフォードに決闘を申し込む。 ［第 3 幕］（ジャスティス・プラウドフット氏の家、客間） いざ決闘という段になり、公爵が愛しているのはプラウドフットの愛人だと思っているプラウドフット夫人ではなくマリオンだということが判明するが、ライバルだと思っているチャルフォードと決着をつける決意は変わらないまま出て行く。チャルフォードが到着し、公爵が再びやって来ると、マリオンは、チャルフォードは妹の婚約者であり、プラウドフットは自分の夫ではないことを説明する。この時入って来たモレ伯爵をマリオンの夫だと思った伯爵は決闘を申し込む。二人が決闘をしかかった時、とうとうマリオンは夫が亡くなったことを認める。マリオンはブーケを窓から投げ出し、一同はすっきりして夕食へと向かう。
執　筆	1908 年（34 歳）
上演歴	1909 年 3 月 20 日～（New Royalty Theatre, London）（55 回） 1909 年 9 月 20 日～10 月（Criterion Theatre, New York）（40 回） 2013 年 12 月 7～14 日（Shaw Playhouse 2, Oldham, UK）

初　版	Evans Brothers, London（1953 年）
翻訳書	『高貴なスペイン人』 （2018 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№10 ①	ス　　ミ　　ス （4 幕・喜劇）
原　題	Smith
梗　概	［第 1 幕］（午後、ケンジントン、クレディトン・コート、ダラス＝ベーカー夫人のフラット、客間） ［第 2 幕］（2 週間後、朝、ダラス＝ベーカー夫人のフラット、食事室） ［第 3 幕］（翌日、午後遅く、ダラス＝ベーカー夫人のフラット、居間） ［第 4 幕］（1 週間後、朝、ダラス＝ベーカー夫人のフラット、居間） 　トムは株で失敗し、婚約者のエミリーからは婚約解消を言い渡され、発奮してローデシアに渡り、農場を経営していたが、結婚相手を探すために、8 年ぶりにイギリスへ帰って来る。トムは昔、ウイットに富んだ会話とユーモアのセンスによって社交界でもてはやされていたが、心機一転してからは、単純素朴なものを好み、自分の妻になる女の条件として、醜くないこと、性格が良いこと、健康であることの 3 つを望んでいる。しかし、イギリスに帰ってみると、見るもの聞くもののすべてに失望を禁じ得なかった。例えば、姉のローズは、夫のある身でありながら、アルジーという美青年を愛し、享楽のために子供を欲しがらず、彼女の友人オットー夫人も、病気の子供を乳母に任せ、その死に目にも会わないで、ブリッジに興じている。昔の婚約者エミリーも、その後不幸な結婚をして、今は独身となり、やはりこの家に出入りして、享楽の相手をしている。ただ一人トムの妻としての条件を備えているのは、この家で陰日向なく働いているスミスというメイドだけだ。トムがスミスに求婚すると、彼女は、身分の釣り合わない結婚だし、自分は腕っぷしの強い労働者が好きだから、トムのような紳士はダメだと言う。実は、スミスにはフレッチャーという力の強い玄関番が求婚していて、彼に気持ちが動いているのだ。ところが、スミスが来客に出すためのワインの栓が抜けなかったのでフレッチャーに頼んだがダメだったと聞いて、トムは満身の力を込めて見事にその栓を抜き、スミスと結婚することになる。
執　筆	1909 年（35 歳）
上演歴	1909 年 9 月 30 日～（Comedy Theatre, London）（168 回） 1910 年 9 月 5 日～12 月（Empire Theatre, New York）（112 回） 1947 年 10 月 30 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors）（Arts Theatre, London）（30 回）
初　版	Heinemann, London（1913 年）
翻訳書	『スミス』 （1985 年、英宝社、井出良三訳、『スミス／生計をいとなむもの』所収）

№11	十　人　目　の　男 （3 幕・悲喜劇）
原　題	The Tenth Man
梗　概	［第 1 幕］（パークレーン、ノーフォーク・ストリートにあるフランシス・エッチンガム卿邸の客間） ［第 2 幕］（パークレーン、ノーフォーク・ストリートにあるフランシス・エッチンガム卿邸の客間） ［第 3 幕］（ミドルプールの「パレス・ホテル」の居室、途中 12 時間の経過を暗示するため 2 分間幕が下りる。） 　実業家ジョージ・ウインターは、「10 人の人間のうち 9 人までは悪党か愚か者だ」という信念のもと、誠実とは言えないやり方でのし上がってきた。エッチンガム卿の娘キャサリンと結婚し、実質的にエッチンガム家の生活を支えている。今や、総選挙に出馬し、中米の金鉱を買収したところだ。 　妻キャサリンは、かねがねジョージのやり方に不信感を募らせおり、政治家ロバート・コールビーと恋に落ちて離婚したいと言っている。しかし、ジョージは、選挙に悪影響があるため離婚に応じないだけでなく、離婚裁判になれば、愛するロバートの政治生命が絶たれるぞと言って脅す。キャサリンの決心がつかないまま選挙の日を迎え、ジョージは当選する。 　一方、買収した中米の金鉱に金が存在しないことが判明し、選挙に当選した夜、投資信託会社の役員ジェイムズ・フォードから、投資した資金が不正に流用したものであることを指摘され、ジョージが即刻弁済しなければ警察に通報すると言われる。ジェイムズが「悪党でも愚か者でもない 10 人目の人間」であったため、ジョージはそれまでのように相手を言いくるめることができず、列車に身を投げて自殺する。 　するとそこへ、金鉱に金が見つかったとの知らせが届く。
執　筆	1909 年（35 歳）
上演歴	1910 年 2 月 24 日（Globe Theatre, London）（65 回）
初　版	Heinemann, London（1913 年）
翻訳書	『十人目の男』（2018 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№12	**地　主　階　級** **（4 幕・喜劇）**
原　題	Landed Gentry （上演名：Grace）
梗　概	芝居はサマセット州、クロード・インソーリーの田舎屋敷「ケニヨン・フルトン」で進行する。 ［第 1 幕］（客間） ［第 2 幕］（客間） ［第 3 幕］（食事室） ［第 4 幕］（客間） 地方地主の狩猟番ガンの娘ペギーが男に騙されて子供を産んでロンドンから戻って来る。地主のクロードはガンに、娘が出て行くか、さもなければガンを首にすると通告する。クロードの妻グレースには秘密にしている愛人がいて、自分を愛しているクロードにも田舎暮らしにもうんざりしている。グレースは夫に、ペギーを留まらせてやるよう懇願するが拒絶される。ペギーは父親のガンを救いたい一心で自殺し、グレースは責任を感じる。ガンがやって来て装填していない銃をクロードに突き付けると、クロードは銃を装填して返し、自分を撃つチャンスを与える。ガンは撃つことなく出て行く。クロードの勇気ある態度に対する称賛の気持ちからグレースに夫に対する愛情が芽生え、愛人と別れる。クロードはグレースを愛していると繰り返すが、グレースは自分はその愛にふさわしくないと感じる。グレースは、クロードの愛に報いるためには愛人がいたことを告白するべきかどうか迷うが、夫を苦しめてまで正直であるよりも夫を大切にすることで償おうと決心する。
執　筆	1910 年（36 歳）
上演歴	1910 年 10 月 15 日～（Duke of York's Theatre, London）（72 回） 1911 年 2 月 6 日～（Duke of York's Theatre, London）（8 回）
初　版	Heinemann, London（1913 年）
翻訳書	『地主階級』（2018 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№13	パ　ン　と　魚 （4 幕・喜劇）
原　題	Loaves and Fishes
梗　概	（芝居は一貫して聖グレゴリー牧師館の客間で進行する。） 　サウスケンジントンの教区牧師で大聖堂参事会会員でもあるセオドア・スプラットは、すでに婚約している娘ウィニフレッドに対して、表面的にはその婚約に同意しているように振る舞いながら、娘が婚約者とその家族に幻滅を感じるように工夫して、娘に自発的に婚約を解消させ、その上で自分の眼鏡にかなった名門貴族の若い当主と結婚するように仕向け、これに成功する。ついで、金持ちで美しい未亡人フィツジェラルド夫人に対して自分の後妻にと求婚するが、財産目当ての求婚だと知っている夫人に断られる。すると今度は、自分の教会の牧師補をしている息子のライオネルが親しく付き合っている、莫大な資産を持つビール醸造業者の一人娘グウェンドリンに接近し、自分との結婚を承諾させる。さらにまた、彼は首相に取り入り、念願のコルチェスターの主教にもなる。
執　筆	1903 年（29 歳）
上演歴	1911 年 2 月 24 日～（Duke of York's Theatre, London）（48 回） 1951 年 3 月 27 日～（revived by Peter Cotes） （New Boltons Theatre, London）（24 回）
初　版	Heinemann, London（1924 年）
翻訳書	『パンと魚』（2018 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№14	ブライトンへの旅
原　題	A Trip to Brighton （Abel Tarride の劇の翻案）
上演歴	1911 年（London）
初　版	Unpublished

№15	完　璧　な　紳　士 （2 幕・喜劇）
原　題	The Perfect Gentleman （モリエール『町人貴族』“Le Bougeois Gentilhomme”の翻案）
梗　概	［第 1 幕］（ジュールダン氏の家の応接間） 幕が開くと、舞台上に音楽の先生、その弟子、音楽の先生。ジュールダンのために、音楽の先生が弟子にセレナーデを作らせている。音楽の先生とダンスの先生の会話から、ジュールダンは芸術をちっとも分かっていないが、金払いはいいことが分かる。ジュールダンが仕立屋に貴族が着るものだと言われた服を着て登場する。ジュールダンが音楽の先生とダンスの先生に服の感想を聞くと、二人とも「大変結構です」とお追従を言う。セレナーデが歌手たちによって歌詞つきで披露されるが、ジュールダンは気に入らず、自ら低俗な歌を歌ってみせる。二人の先生は揃って褒める。音楽の先生とダンスの先生は、それぞれ音楽とダンスの有用性を説く。歌手たちによって音楽の先生が作ったオペラの一部が披露される。貴族はオペラの会を開くものだと聞いたジュールダンは、自分もそうしようと言う。ジュールダンお抱えの作曲家が「ナクソス島のアリアドネ」を薦め、未亡人の悲しいストーリーを説明する。ジュールダンは「金は惜しまない」、「わしの好きなトロンボーンを入れろ」、「万事、未亡人（後出のドリメーヌ伯爵夫人のことを思って）にふさわしくなるように」などと言う。ダンスの先生がレッスンを始めると、ジュールダンはついていけず、目を回してしまうと、今度は伯爵夫人にするようなお辞儀の仕方を習う。フェンシングの先生が登場してレッスンが始まり、フェンシングの優越性を説く。音楽の先生とダンスの先生が異議を唱え、3 人の言い争いになる。哲学者が登場して「悪口に対する反応として、寛容と忍耐以上のものはない」と説くが、言い争いは収まらない。4 人は言い争いながら出て行く。 哲学者が戻って来てレッスンを始めるが、ジュールダンはさっぱり分からず、文字の発音の仕方を習う。哲学者に話し言葉が散文だと教わったジュールダンは、習ってもいないのに最初から散文を知っていたと自画自賛する。仕立屋が新しく作った服を持参する。新しい服は奇妙なものであったが、仕立屋に「宮廷で最も立派できちんとした服です」と言われ、ジュールダンは従僕たちを従えて見せびらかしに出掛ける。 ［第 2 幕］（同じ） ジュールダンと従僕たちが帰って来る。ジュールダンに呼ばれた小間使いのニコルは、ジュールダンの恰好がおかしくて大笑いし続ける。ジュールダンがニコルに、来客があるから部屋を掃除するよう言いつけると、ニコルは旦那様のお客は部屋を汚す人ばかりだと不平を言う。続いて登場したジュールダン夫人もジュールダンの格好を笑い、いい加減に人から笑われるような馬鹿げた行動をやめるよう諭す。ジュールダンは賢くなって上品な人たちと

	話しができるようになりたいんだと応じる。ジュールダンが習ったことをひけらかすと、夫人は、ジュールダンが付き合っている貴族（後出のドラント伯爵のこと）は親切だけど、金を借りるためにジュールダンを利用しているだけだと忠告する。ドラント伯爵が来訪して、ジュールダンの格好を褒め、宮廷でジュールダンのことを話題にしたと言って持ち上げる。何回にもわたって借りた借金の総額はいくらかとドラントに確認されたジュールダンが、正確に 1,400 ルイですと答えると、ドラントはずうずうしくもさらに 200 ルイ貸りるとちょうど 1,600 ルイになると言って借り増しを要求する。この間、夫人はドラントのやり口を見て、傍白で「それ見たことか」とささやくが、ジュールダンは貴族にお金を貸すのは光栄なことだと言って喜んで貸す。ドラントは、ジュールダンから託されていたダイヤモンドをこれから来るドリメーヌ伯爵夫人にプレゼントしておいたので安心するよう話す。ジュールダンは、夫人が邪魔にならないよう、妹の家に行かせることにしてあるのだった。ジュールダンとドラントが出て行くと、夫人はニコルに、夫が浮気をしているみたいだから、何としても正体見つけ出すつもりだと言う。また、娘をクレオントと結婚させてやりたいとも話し、クレオントを呼びにニコルを行かせる。そこへジュールダンが戻って来て、クレオントは名門の出ではないから駄目だ、持参金は十分にあるから娘は伯爵夫人にすると言う。夫人は反対するが、妹の家に行く時間がきて出て行く。ジュールダンも立ち去る。 　ドラントがドリメーヌ伯爵夫人を連れてやって来る。ドラントはジュールダンから託されたダイヤモンドやもてなしによって自ら執拗にドリメーヌを口説いていたのだ。ドリメーヌはこのままだと結婚に持ち込まれそうな気がしているが、ドラントが自分のために金を使うことをよしとしない。ジュールダンが登場してドリメーヌにダンスの先生に教わった念の入った挨拶をするが、思い通りにいかない。ドラントはドリメーヌにジュールダンのことを大親友で完璧な紳士だと紹介する。ジュールダンはドリメーヌに自分が贈ったダイヤモンドをどう思うか聞きたいところだが、ドラントはそんなことをするのは紳士らしくないからと言って止める。宴会が始まると、ドラントがコックに指示して作らせた素晴らしい食事や音楽にドリメーヌが感動する。ジュールダンは紳士らしく間接的な言い方でドリメーヌを口説こうと四苦八苦する。そこへジュールダン夫人が戻って来て、ジュールダンが女のために食事や音楽に金を使っていることをなじる。ドラントはジュールダンにこの家を借りただけで、食事や音楽に金を使っているのは自分なんだから失礼だと言う。夫人は真実を知っているので、ドラントには立派な紳士が夫の浮気に手を貸すなんて恥ずべきだ、ドリメーヌには高貴な婦人が夫を惑わすなんて不誠実だと言う。真実を知らないドリメーヌは怒って出て行き、ドラントもドリメーヌを追いかけて出て行く。ジュールダンは夫人に、自分に恥をかかせた上に爵位のある人たちを追い出したと言って怒る。夫人は、爵位なんか知るもんですか、自分は権利を守っただけだし、女はみんな自分の味方だ

	と言って出て行く。残されたジュールダンは、夫人が入って来た間の悪さを嘆くが、ご馳走がいっぱいだったことを思い出し、食事を終わらせることにする。
執　筆	1912 年（38 歳）
上演歴	1913 年 5 月 27 日～（His Majesty's Theatre, London）（8 回）
初　版	"Theatre Arts" 1955 年 11 月号所収
翻訳書	『完璧な紳士』（2021 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№16 ①	約　束　の　地 （4 幕・喜劇）
原　題	The Land of Promise
梗　概	［第 1 幕］（タンブリッジ・ウェルズの亡きミス・ウィッカムの家の客間） ［第 2 幕］（マニトバ、ダイアーのエドワード・マーシュの農場の台所） ［第 3 幕］（マニトバ、プレンティスのフランク・テイラーの小屋） ［第 4 幕］（マニトバ、プレンティスのフランク・テイラーの小屋） ノーラ・マーシュは、病身で気難し屋の老嬢ルイーザのコンパニオン兼看護師として、彼女に尽くすこと 10 年、ある青年の切なる求婚をも拒み、青春の大半を費やしてしまっている。ところが、ルイーザが死んで、遺言書が公開されてみると、彼女に対しては何の遺贈もなく、遺産の全部が甥のジェイムズに渡ってしまう。やむなく彼女は、コンパニオンの就職口を探すが見つからず、意を決して兄エドワードが農場を開いているカナダへ行く。 エドワードの妻ガートルードは、もともと女給をしていてエドワードと恋に落ち結婚した女で、教養あるノーラとはことごとく意見が合わない。一方、エドワードの小作人フランクは、妻になる女に多くを求めず、炊事、洗濯、掃除をしてくれれば十分だという男だ。フランクは結婚を取引だと考え、口入屋へ探しに行くのが面倒だからと言ってノーラに結婚を申し込むが、あまりの女性蔑視に憤慨したノーラは、即座に拒絶してしまう。ちょうどその時、ノーラが茶碗を割ったのを、ガートルードが口汚く罵るので、ノーラも負けずに、みんなの前でガートルードに行儀を教えてやると言い放つ。エドワードは妻をいろいろとなだめるが、ノーラがみんなの前で謝らなければ許さないと言って、どうしても承知しない。二人の間に挟まった兄の苦境を見るに忍びず、ノーラは女を軽蔑しているフランクさえいなければみんなの前で謝ろうと言い出すが、ガートルードはどうあっても譲らない。やむを得ずみんなの前で謝り、プライドを傷つけられたノーラは、いささか逆上気味で、ガートルードの許を離れたい一心で、自分の嫌っているフランクに自分から求婚して、奥地のマニトバへと土地開墾のために去って行く。 さて、マニトバへ来てみると、文化的な生活に慣れていたノーラにはとうてい耐えられない不自由な生活であり、もともと肌の合わないフランクが夫だから、ノーラは自分の軽率さを恥じ青白い顔をしてフランクに反抗するが、もの言わぬ大平原では力の法則が支配するだけで、結局フランクの意志に従わなければならない。 ところが、フランクの田園にカラシナという悪性の雑草がはびこり、その辺りの法律ではこれがはびこれば田園を焼かねばならず、そうなるとフランクの苦労も泡となって、自分は腕一本で暮らせても妻を養うことができない。ちょうどその時、ノーラのところへジェイムズから送られた 500 ポンドが届き、コンパニオンの口もあるということなので、ノーラは帰国の決心をする。

	しかし、いよいよ別れる時に、ノーラは初めてフランクに愛着を感じ、土地を開拓することにも誇りを感じて、フランクと共に留まる決心をする。
執　筆	1913 年（39 歳）
上演歴	1913 年 11 月 26 日～（Heyperion Theatre, New Haven, Connecticut） 1913 年 12 月 25 日～1914 年 3 月 1 日（Lyceum Theatre, New York）（76 回） 1914 年 2 月 26 日～（Duke of York's Theatre, London）（185 回） 1917 年 2 月 8 日～（revived by Dion Boucicault）（New Theatre, London）（60 回） 2015 年 5 月 1 日～9 日（Red Sandcastle Theatre, Toronto, Canada）
初　版	Bickers & Son, London（1913 年）
翻訳書	『約束の地』（2015 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№17 ②	**手 の 届 か ぬ も の** **（3 幕・笑劇）**
原　題	The Unattainable （上演名：Caroline）
梗　概	（ウェストミンスター、リージェンツ・パークにあるキャロライン・アシュリーの家の客間） ［第 1 幕］（午前の遅い時間） 　ある朝、キャロラインの夫の死亡が新聞で報じられると、やや遅れてロバートがやって来て、散々迷った挙句、義務感からキャロラインにいささか事務的なプロポーズをするが、キャロラインは「今までの素敵な愛を退屈で消耗する家庭生活に向けるなんてもったいない」と言って断ってしまう。二人ともキャロラインの夫の死を待ち望んでいたものの、いざそうなると結婚したい気持ちが萎えてしまったことが分かり、ほっとしてロバートは帰る。 ［第 2 幕］（午後 4 時） 　午後になり、キャロラインに恋しながらも振られるのが生きがいの青年レックスが訪ねて来て、キャロラインは「手の届かぬもの」でいる方がずっと魅力的だということを悟る。レックスが帰ったあとにロバートがやって来て、結婚しないと周りの連中が決して納得しないと言ってキャロラインを説得すると、結婚後の生活についての意見の相違で散々もめるが、結局のところ自分たちは結婚するしかないという結論に達して、ロバートは結婚指輪を買いに出掛ける。 ［第 3 幕］（少し後） 　「手の届かぬもの」でいる方がずっと魅力的だと悟ったキャロラインは、ロバートとの愛を続けていくためにはほかの誰かと結婚した方がいいと思い、訪ねて来た主治医でロバートの友人でもあるコーニッシュとの結婚を決める。友達がみんな集まり、ロバートも戻って来て、いざ結婚を発表する段になると、コーニッシュは唐突に「キャロラインの夫は生きている」と言い残して帰ってしまう。キャロランは機転を利かせて話を合わせ、みんなが帰ったあと、ロバートに「わたしたちの幸せのためにはあの人が必要なのよ」と言って、幕になる。
執　筆	1915 年（41 歳）
上演歴	1916 年 2 月 8 日～（New Theatre, London）（141 回） 1916 年 9 月 20 日～10 月 1 日（Empire Theatre, New York）（45 回） 1926 年 6 月 12 日～（revived by Frank Cuzon） （Playhouse, London）（152 回） 1949 年 3 月 22 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors） （Arts Theatre, London）（32 回）

初　版	Heinamann, London（1923 年）
翻訳書	『手の届かぬもの』 （2014 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№18 ②	お　え　ら　方 （3 幕・喜劇）
原　題	Our Betters
梗　概	［第 1 幕］（メイフェアにあるジョージ・グレイストン夫人の家の客間） ［第 2 幕］（サフォーク州、グレイストン・タワーズの午前用の居間） ［第 3 幕］（サフォーク州、グレイストン・タワーズの午前用の居間） 　アメリカからイギリスにやって来て今やロンドン社交界きっての有名夫人になっているグレイストン卿夫人パールは、夫とは別々の生活を営んでいて、金持ちの爺さんフェンウィックをパトロンにもっている。彼女の妹ベシーは、姉の華やかな生活に憧れて婚約を解消し、最近アメリカからやって来たばかりだ。そこへ、元婚約者フレミングが彼女を追いかけてアメリカから訪ねて来る。ベシーはイギリスの貧乏貴族ハリーから求婚される。ベシーはハリーのことを愛してはいないが、爵位を持っている彼と結婚すれば姉と同じように華やかな人生が送れると思っている。ベシーはハリーから、最初はベシーが金持ちだから結婚したいと思っていたが、今は金のことは問題でなく心から愛していると言われ、結婚を承諾する。 　パールの友人で、同じように金持ちのアメリカ人ドゥ・スウランヌ公爵夫人ミニーは息子のような美青年トニーを追いかけ回している。そのトニーをパールが盗んで浮気をする。それも恋愛だの何だのではなくて、「人の持ち物にはちょっかいを出してみたい」癖があるからにすぎない。この浮気が一同の面前で暴露されると、パールはトニーに「馬鹿よ、あんた。危ないって言ったでしょ」と冷然と言い放つ。パールは、パトロンであるフェンウィックの方はしおらしいお芝居を演じるだけで丸め込めるが、ミニーのためには、ロンドンへ電話をして文部省にトニーの地位を見つけ、一方急遽ロンドンへ車を送って高級高価なダンス教師を無理やりに引っ張ってくるという離れ技を演じなければならなくなる。パールは、呆れるしかないほどしゃあしゃあと、そして文句を挿む余地のないほど花々しく手腕を発揮する。 　フレミングはベシーに、そろそろアメリカに帰ろうと思っていることを告げる。パールの一連の振る舞いがベシーにとっては目に余るものだったので、ベシーはこのままハリーと結婚することに不安を感じ、婚約を解消してアメリカに帰る決意をする。 　その一方で、ミニーはトニーとの結婚を決め、パールと和解の抱擁をする。
執　筆	1915 年（41 歳）
上演歴	1917 年 3 月 8 日～（Nixon Theatre, Atlantic City, New Jersey） 1917 年 3 月 12 日～6 月 1 日（Hudson Theatre, New York）（112 回） 1923 年 9 月 12 日～（Globe Theatre, London）（548 回） 1928 年 2 月 20 日～6 月 9 日（Henry Miller's Theatre, New York）（128 回）

	1938 年 4 月 18 日～6 月 1 日（Playhouse Theatre, New York）（72 回） 1946 年 10 月 3 日～（revived by Ivor Novello）（Playhouse, London）（59 回） 1989 年 11 月 14 日～（Preview：8 回）、20 日～1990 年 5 月 20 日（Ambassador Theatre, New York）（208 回） 2013 年 4 月 3 日～10 月 27 日（Royal George Theatre, Niagara-on-the-Lake, Ontario, Canada） 2015 年 3 月 11 日～4 月 19 日（Asolo Rep Theatre, Sarasota, Florida, USA）
初　版	Heinemann, London（1923 年）
翻訳書	『おえら方』（1956 年、新潮社、木下順二訳、『サマセット・モーム全集 21 戯曲集 I ひとめぐり・おえら方』所収） 『おえら方』（2019 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№19	ビーミッシュ夫人 （3 幕・喜劇）
原　題	Mrs. Beamish
梗　概	地位のある中年カップルが、実は結婚しておらず、従ってその道徳家ぶった息子が私生児だという不都合な事実を明らかにせざるを得なくなる。
執　筆	1917 年（43 歳）
上演歴	Unproduced
初　版	Unpublished（原稿がワシントンの議会図書館に所蔵されている。）

№20	こ ん な 事 情 で （3 幕・喜劇）
原　題	Under the Circumstances
上演歴	Unproduced
初　版	Unpublished

№21	片　田　舎　で　の　恋 （4 幕・喜劇）
原　題	Love in a Cottage
梗　概	［第 1 幕］（コモ湖湖畔の「ホテル・スプレンディド」） 　コモ湖湖畔ヴァレンナの春の午後、「ホテル・スプレンディド」の宿泊客たちが昼食の後、テラスガーデンで陽の光を楽しんでいる。客の中に、イギリス人聖職者アーチボルド・パーマー師、その妻、一風変わったオールドミスが二人（エリナーとコンスタンス・ドーソン）、四十がらみの細身のいい男ピーター・エリンガム卿がいる。彼らは相客の百万長者オーエン・バターフィールド、その病身の妻、（ピーターの秘書のように振る舞っている）彼女の甥マーチン・アロル、彼女の看護師シビル・ブルースのことを話し合っている。一座の婦人たちは、シビルが仕事の割には美人過ぎると思い、結婚しているのかどうかと考えあぐねている。その質問がホテルの医師ベルに投げかけられると、医師は他人のことは構わない方がいいということをそれとなく言う。 　シビル・ブルースがクッションを持って入って来る。エリンガムとベル医師は彼女が患者のためにそのクッションを置くのを手伝う。医師は彼女が疲れた様子なのに気づき、バターフィールド夫人のせいで一晩ほとんど寝かせてもらえなかったことを白状させる。甥の腕にすがりながら、患者本人が登場する。彼女は気で病む人間で、自分が座っている椅子をほかの場所へ動かせと言い張ったり、手紙を探しにシビルを行かせたり等々――あらゆる人に可能な限りの面倒を掛ける。医師は彼女にシビルを働かせ過ぎだと警告するが、彼女には医師がシビルに恋しているとしか思えない。彼女がシビルに炎天下のボートに連れ出してくれと言うと、医師は断固として自分の部屋に行かせて休ませる。医師はシビルを長椅子に気持ちよく落ち着かせる。二人はうちとけた話をする。その間にシビルは、不幸な結婚をしてしまったこと、金持ちで競馬気違いの夫アランデル・ブルースと別居していることを話す。彼女は生活費を稼ぐことにうんざりしており、まだ若いうちに人生を楽しむために金と贅沢にあこがれている。 　バターフィールド氏が昼食を食べ損ねてホテルに戻って来ると、二人の会話は中断する。彼は背の高い痩せた老人で厳しい冷笑的な表情をしているが、ベル医師とシビルを気に入っている。医師は（バターフィールドの方が妻よりもずっと病気が重いが、彼の病気はかえって幸いなんだとあらかじめシビルに言ってあるのだが）彼に、あなたは失敗者だ――金を貯める以外何もやってこなかったし、そのことで孤独と絶望がもたらされただけだと話す。医師自身は預金残高がゼロであるにもかかわらず「人生の達人」であって、それは自分の能力を最大限効果的に使い切って、社会と仲間を最大限に利用する術を知っているからだ。彼の望みはイギリスの田舎で開業することである。「わたしはスイカズラにおおわれた小屋に住んで、わたしの財産は――多分、

わたしの財産は愛ということになるだろう。」

一通の手紙がシビルにもたらされる。彼女はその手紙をさっと見た後、動揺して夫が自殺した言いながらバターフィールドに渡す。百万長者は手紙を読み通すと、彼女がブルースの大きな財産からの収入を相続して今や金持ちであることを知らせる。今や自分の望みを叶えられるということが彼女にも段々と分かり始める。「わたしは自由になって、世界はわたしの足下にあるんだわ！」

［第 2 幕］（コモ湖湖畔の「ホテル・スプレンディド」）

一週間が経ち、バターフィールド夫妻がマーチン・アロルと一緒にテラスに座っている。シビルは室内にいて、着いたばかりの看護師に教えている。バターフィールド夫人は甥にシビルと結婚したらどうかと言い、甥も下院議員になる野心を進めるのに彼女の金が役に立つだろうと認める。

制服から夏服に着替えて非常に美しく見えるシビルが入って来る。バターフィールド夫人はいまだに無礼でシビルのことをしゃべり立て、ドーソン姉妹も同様である。全くの親切心から、シビルは姉妹の一人の素人くさい水彩画ともう一人の刺繍を法外な値段で買う。バターフィールド夫妻が注意すると、シビルは「わたしは世界で最も素敵な喜びを買っているの――ほかの人を幸せにする喜びをね。」と言うだけである。妻と甥がいない時に、バターフィールドはとにもかくにもシビルが再婚すると金を失うという夫の遺言書の条項が財産目当ての求婚者から彼女を守ってくれるだろうと指摘する。彼は、彼に言わせると、自分が絶望の底に滑り込むことから救ってくれたシビルのことがかなり好きになっており、さよならを言う時にやさしくキスする。

ベル医師は、シビルが自分の幸せを分かち合える人がいないといって悲しそうにしているのに気づく。シビルは医師に、自分に親切にしてくれた人たちみんなに何かをしてあげたいと話し、彼としては何が欲しいかと尋ねる。だが、彼は欲しい物はすべて持っている――気持ちまで満ち足りている、と穏やかに答える。シビルは医師にアロルが自分に求婚するつもりなのははっきりしていると話し、冗談めかしてひょっとするとアロルを受け入れるかもしれないと言ったことに医師が異議を唱えないとがっかりした様子を見せる。

アロルが入って来ると、医師は彼らを二人だけにして出て行く。シビルは大喜びでプロポーズを受け入れると、夫の遺言書の条件を話す。アロルが伯父と伯母に自分が窮地に陥ったことを打ち明けるのに任せて、シビルはそっと出て行く。バターフィールド夫人は打ちのめされるが、夫の方は面白い冗談だと思う。既婚の秘書は嫌いだから、結婚式の日にアロルをクビにすると楽しそうに言う。

パーマー夫妻とエリンガム夫妻が入って来て、アロルに婚約のお祝いを言うが、アロルは即座に否定する。シビルが戻って来ると、みんなは気を利かせてアロルと二人だけにして出て行く。シビルの予想通り、アロルは何とか

婚約から逃れようと必死にあがき、シビルが「自分の愛情の強さを見誤っていた」から自由にしてほしいと言うと、安堵の気持ちを隠しきれない。

エリンガムが、妻を持ったことはあるが、もう別れたから「安心だ」と言って、シビルに友情を示す。続いて、ベル医師が――遺言書のすべてを知っているのだが――シビルに求婚する。シビルは医師のことを大好きなことは認めるが、新たに見つけた自由と富を楽しみたいから、すぐに諦めるのは我慢できないと言う。

［第 3 幕］（パリ、シビル・ブルースのマンションの控えの間）

シビルは今やパリにルイ 15 世風の美しい家を持っている。彼女自身はポンパドゥール夫人（ルイ 15 世の愛人）なのだが――客たちにふさわしい衣装を着させて、仮装舞踏会を開くところである。友達でコンパニオンのジェーン・レイモンドと一緒に、オーケストラの指揮者と最後の打ち合わせをしている。ポメラニアの前王が来ることになっていて、国歌で歓迎するのがふさわしいかどうか議論している。

まもなく、最初の客が到着する――バーチェスター卿夫妻である。夫人は、夫がいないちょっとのすきに、シビルに怖くて夫に言えないギャンブルの負けを払う金を貸してくれと頼む。シビルは 1 万フランの小切手を書く。

次に着くのはサン・オーム侯爵夫人である。それからピーター・エリンガム卿が来て、シビルにバーチェスター夫妻は友人から金を借りる癖がついていて、ギャンブルの話が最近のやり口であることを秘かに話す。シビルは、もうすでに人々が金持ちの女に使う汚い手はすべて分かっているが、随分情けない人たちだと思って、それでも金を与えると冷静に答える。エリンガムはシビルを愛していると告げる……。二人とも自由に結婚できる身ではないのだから、愛人になるのがどうしていけないのか？　シビルは今や上流婦人なのだから、何の害にもならない。シビルはエリンガムに、妻と離婚して自分と結婚したいくらい愛してくれているのかどうか尋ねる。しかし、エリンガムは、経済的に妻に頼っていて、シビルのためにも、貧乏に直面する訳にはいかないと白状する。

ほかの客たちが舞踏室から戻って来ると、ジェーン・レイモンドが電報を持って入って来る。ヴァレンナにいるベル医師からのもので、「善行を行いたければ、すぐに来られたし。さもないと、手遅れになる」と書いてある。シビルがエリンガムにイタリア行きの夜行列車の時間を尋ねると、半時間以内に乗れることが分かる。ポメラニアの前王を今か今かと待っているところだが、シビルはすぐに発つと言い放って客たちをびっくり仰天させる。メードを荷作りにやって自分とジェーンの外套を持って来させると、列車の中で着替えるから、バーチェスター夫人に女主人の役をやってくれと言う。この時、前王の車が玄関先に着いたことを従僕が告げる。これで決まりだ、とエリンガムが言う。シビルはもう行くことができない。

シビルは、自分が前王を玄関で迎えて部屋に連れて入るからと言って、客

たちに舞踏室の中に入るよう頼む。客たちが行ってしまうとすぐ、シビルがジェーンを窓まで引っ張り上げ、二人は庭に飛び下りる。ちょうどその時、楽団がポメラニア国歌を演奏し始める。

［第 4 幕］（コモ湖湖畔の「ホテル・スプレンディド」）

話はヴァレンナに戻り、第 1 幕の登場人物がほかの客たちと一緒にホテルのテラスで湖畔のイタリアのセレナードの演奏を聞きながら食事をしている。彼らは、なぜシビルが来たのか、財産のせいで彼女の性格がダメになったのだろうかと思いながら、彼女が来たことが予想外だったことを話し合っている。バターフィールドは、彼らの中傷的な言い分に苛立って、立ち上がると出て行く。

シビルは親しげな様子でみんなに挨拶するが、彼女がベル医師を見る時の喜びと個人的に話したがっている気持ちがはっきり表われているので、ほかの連中は段々と出て行き、彼らは二人だけで残される。

シビルが電報の理由を尋ねると、ベル医師は、オーエン・バターフィールドの命を救えるのはシビルだけだと言う。彼が死にかかっているのは、人類社会との仲間意識をすっかり失ってしまったからで、シビルならその愛情で生きる望みをよみがえらせられるかもしれないのだ。

百万長者が入って来ると、シビルは暗黙の了解でベル医師を追い出して温かく迎える。バターフィールドは一生懸命働いているうちに人生の素晴らしいものをすべて取り逃してしまったと感じながら、若さと快活さに腹が立つことを認める。妻と甥は彼を狂人として監禁しようとしている。とは言え、彼はまたシビルに会えて喜んでいる。「すぐ来てくれていなかったら、間に合わなかっただろう」と彼は言う。シビルが助けてあげましょうと言うのに対して、もう誰も助けることはできないと答える。「もうおしまいだ。」

二人の会話がシビルに金をたかりに来たパーマー師とドーソン姉妹によって中断されると、バターフィールドは出て行く。シビルはもうこの手の申し出のあしらい方を知っているので、丁重に、しかし断固として断る。シビルがドーソン姉妹に話している間に銃声が聞こえる。ほかの者はイタリア人の百姓が銃で遊んでいるのだと思うが、シビルはびくっとする。ベル医師からすぐ来てくれとメッセージが届く。シビルは深い悲しみのうちに戻って来る――バターフィールドが銃で自殺したのだ。彼の妻とアロルはその知らせを冷静に受け止める。二人はホテルの中に入り、シビルがテラスで泣いているところをベル医師が見つける。

百万長者の死はシビルに金があっても無意味なことを示したのだ。彼女は今や、夫の遺産は自分に対する復讐だったのだと思う――1 年も経たないうちに友人たちに幻滅を感じて疑い深くなった。「独りぼっちの金持ちの女。」……彼女が欲しいのは金で買えないものばかりだ――愛情に家庭と子供。彼女はベル医師に、世界中の何よりも愛していると告白する。ベル医師はシビルにすべてを手放すことになることを忘れないように注意するが、シビルは

	「灰を手放して、天の宝を手に入れるの」と答えるだけである。ベル医師はシビルを両腕に抱く。
執　筆	1917 年（43 歳）
上演歴	1918 年 1 月 26 日～（Globe Theatre, London）（127 回）
初　版	Unpublished

№22 ③	シ ー ザ ー の 妻 （3 幕・喜劇）
原　題	Caesar's Wife （初期名：The Keys to Heaven、米上演名：Infatuation）
梗　概	（芝居はカイロにあるイギリス総領事公邸で進行する。） ［第 1 幕］（午前用の居間） 　アーサー・リトル卿は、イギリスの外交官としてエジプト統治の全権を握っているが、40 歳を過ぎるまで独身で押し通し、妹クリスティーナに家事を任せ、アンという女性とプラトニックな関係を続けてきた。ところが、たまたまイギリスに帰省し、ある晩餐会の席上で 20 余り年下のヴァイオレットという美人に恋し、彼女と結婚してエジプトに帰って来る。アンの弟でアーサー卿のよき秘書であり片腕であるロナルドとヴァイオレットの間にはいつしか恋が芽生えるが、お互いにそれを明かさないでいる。ところが、突然ロナルドがパリに転任を命じられると、別れがたい気持ちが高揚して、二人はお互いの気持ちを打ち明ける。 ［第 2 幕］（庭） 　ところが、エジプト総督の秘書に欠員が生じたため、ロナルドが最適任者だと考えたアーサーは、ロナルドのパリ転任を取り消して彼を後任に充てるようイギリス本国に申請する。アーサーの妹クリスティーナにはヘンリーという息子がおり、盲目的な母性愛から彼を秘書の後釜に据えようとアーサーに頼むが、その拒絶に会うと、ヴァイオレットにロナルドとの恋を暴露するぞと脅し、ロナルドとアーサーにはロナルドを元通りパリに転勤させるよう頼む。ヴァイオレットはロナルドに転勤するよう頼むが、彼女のそばにいられるという喜びに浸っているロナルドの耳には入らない。ヴァイオレットはアーサーに、自分とロナルドとの恋を明かし、それがいかに危険な状態にあるかを打ち明ける。しかし、意外にも、アーサーは二人の恋を知っていた。アーサーはヴァイオレットに、個人的感情は国家の利害の前には犠牲にしなければならないことを説き、自分は始めロナルドのパリ転勤を個人的利害から喜んだが、ロナルドが総督の秘書として最も適任であるという国家的見地から彼をエジプトに置くのだから、お前も十分自制してほしいと頼み込む。 ［第 3 幕］（ベランダ） 　さて、ロナルドはエジプトに留任することになったが、ヴァイオレットは彼に会わないようにし、彼からの手紙に返事も書かない。これは、彼女がロナルドの愛情を信じ、自分がどんな仕打ちをしても彼は自分を愛してくれるという信念から出たものだが、ロナルドが最近彼女に面影の似たペンダー嬢というアメリカ女と付き合っているらしいと聞いてその信念が動揺する。ヴァイオレットの信念は破れ、そのためにかえって彼女が自暴自棄に陥って、ロナルドと不義に陥る危機が迫るが、彼女はロナルドに、自分はもうあなたを愛していないときっぱりと言い放ち、夫の胸に寂しく戻る。

執　筆	1917 年（43 歳）“The Keys to Heaven” 1918 年（44 歳）“Caesar's Wife”
上演歴	1919 年 3 月 27 日～（Royalty Theatre, London）（241 回） 1919 年 11 月 24 日～1920 年 2 月（Liberty Theatre, New York）（81 回）
初　版	Heinemann, London（1922 年）
翻訳書	『シーザーの妻』（2015 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№23 ②	家　庭　と　美　人 （3 幕・笑劇）
原　題	Home and Beauty （米上演名：Too Many Husbands）
梗　概	（芝居はウェストミンスターにあるヴィクトリアの家で進行する。） ［第 1 幕］（寝室） ［第 2 幕］（客間） ［第 3 幕］（台所） 　ビルとフレッドはいずれも陸軍少佐であり、親友の間柄であったが、ビルはわがままだがかわいいヴィクトリアを妻とし、第一次世界大戦に出征して、戦死者 30 万余を出した激戦地イープルで戦死したことにされている。そこで、フレッドはヴィクトリアとその息子を引き取って結婚し、さらに一児をもうけたある日のこと、ビルが突然帰って来て、色々な騒動が起きる。実は、ビルは重傷を負って、ドイツ軍の捕虜となっていたのだ。やむなく、フレッドはヴィクトリアと結婚したことを告げるが、ビルが気づいてみると、自分の一張羅はフレッドが着ており、かつてヴィクトリアが自分にくれたネクタイピンもカフスボタンも、結婚の贈り物のシガレットケースも、すべて今はフレッドに贈られていることが分かる。ビルは潔く立ち去ろうとするが、フレッドの方でも自分が譲ると言って聞かないので、フレッドの申し出により、二人はクジを引くことになるが、フレッドがいずれにしても自分が空クジを引くように仕組んでおいたのがバレて収拾がつかない。しかし、ついに二人共に自己犠牲を発揮すべき時が来る。ヴィクトリアに言い寄るペイトンという金持ちの造船業者がいて、戦争が済んで必要なものは愛国心よりも金だということから、ヴィクトリアをペイトンに譲ることになり、フレッドとビルはヴィクトリアの第三の夫のために、また自分たちの自由のために祝杯をあげる。
執　筆	1919 年（45 歳）
上演歴	1919 年 8 月 4 日～（Globe Theatre, Atlantic City） 1919 年 10 月 8 日～1920 年 1 月 1 日（Booth Theatre, New York）（102 回） 1919 年 8 月 30 日～（Playhouse, London）（235 回） 1942 年 11 月 12 日～（revived by Lee Ephraim and B. A. Meyer in association with Tom Arnold）（Playhouse, London）（12 回） 1950 年 8 月 31 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors）（Arts Theatre, London）（22 回） 1950 年 9 月 27 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors）（St. Martin's Theatre, London）（180 回） その後 Wyndham's Theatre, London でも上演 2013 年 7 月 6 日～13 日（Chesil Theatre, Winchester, UK）

	2015 年 6 月 25 日～10 月 15 日 （Pitlochry Festival Theatre, Perthshire, Scotland） 2015 年 10 月 20 日～24 日 （Guildford's Yvonne Arnaud Theatre, Surrey, UK） ”Viktoria”（Theater in der Josefstadt, ウィーン） 1926 年 11 月 27 日～ “Imádok férjhezmenni”（ミュージカル） 1964 年 5 月 22 日（József Attila Színház、ハンガリー） "Moda căsătoriilor (Care-i soțul meu?)" （Teatrul Regina Maria、ルーマニア） 1986 年 12 月 23 日～ “Imádok férjhez menni”（ミュージカル） （diószegi Hahota színjátszó csoport、ハンガリー） 2018 年 2 月 17 日（diószegi Inovatech színpadán） 2018 年 4 月 15 日（pozsonyeperjesi kultúrházban） 2018 年 10 月 27 日（Csabacsűd） 2018 年 11 月 18 日（peredi kultúrházban） 2019 年 3 月 31 日（királyrévi kultúrházban） 2019 年 5 月 12 日（gútori kultúrházban） 2019 年 5 月 19 日（nádszegi kultúrházban） 2019 年 10 月 27 日（zsérei kultúrházban） 2019 年 11 月 24 日（gellei kultúrházban） 2020 年 2 月 9 日（alsóbodoki kultúrházban）
初　版	Heinemann, London（1923 年）
翻訳書	『夫が多すぎて』 （2001 年、岩波文庫、海保眞夫訳）
日 本 上演歴	2010 年『2 人の夫とわたしの事情』（シス・カンパニー、徐賀世子訳、 ケラリーノ・サンドロヴィッチ上演台本・演出、松たか子主演） ［2010 年 7 月 23 日(金)23:00 より NHK 教育テレビ「劇場への招待」で OA］ 2014 年『夫が多すぎて』 （東宝、長谷川真実翻訳協力、板垣恭一上演台本・演出、大地真央主演） 2016 年『HOME AND BEAUTY』 （Faber & Ludens、寺本晃輔翻訳・演出、瀬戸ゆりか主演） 2017 年『ダーリン×ダーリン×ダーリン』 （劇団 40CARAT、花山ら楽脚本・演出、かとうずんこ主演） 2021 年『夫が多すぎて』 （劇団俳優座演劇研究所 32 期生修了公演、監修・指導・脚色：田中壮太郎）

№24	今夜はよそう、ジョセフィーヌ！ （笑劇）
原　題	Not To-Night, Josephine!
執　筆	1919 年（45 歳）
上演歴	Unproduced
初　版	Unpublished

№25 ③	知 ら れ ざ る も の （3 幕）
原　題	The Unknown
梗　概	（芝居はケント州、スタウァ、荘園領主の邸宅で進行する。） ［第 1 幕］（月曜日の午後） ［第 2 幕］（水曜日の午後） ［第 3 幕］（1 週間後） 　ジョンは、戦争で重傷を負って帰省したが、婚約して 7 年になるシルヴィアと結婚して再び戦場に戻るつもりだ。ジョンは戦争で起こった様々な惨状を見て以来、神に対する信仰を失って、宗教は魂の渇望というよりむしろ死の恐怖から生まれるものであり、人生は自分の好きなように組み合わせるジグソーパズルのようなものだと考えている。ところが、婚約者のシルヴィアは信心深い女であり、ジョンの心に信仰を呼び覚まそうと努める。ちょうどその時、ジョンの父ウォートン大佐が死んで、シルヴィアがそのことをジョンに知らせるよう命じられると、彼女は偽って大佐がまだ死んでいないことにし、死におびえている大佐に安らぎを与えるため、ジョンに聖餐を受けるように勧める。ジョンはやむなく彼女の勧めに従うが、自分の良心に反するため、信仰の念が起きないだけでなく、魂の奥底までも汚されたと感じる。家に帰ると、父はすでに死んだあとであり、シルヴィアの偽りが暴露されると、シルヴィアに対するジョンの愛は冷める。シルヴィアも、自分の偽りから恋人を失ったことはむしろ神の摂理だと感じ、神の愛にのみ生きることを決心する。
執　筆	1920 年（46 歳）
上演歴	1920 年 8 月 9 日～（Aldwych Theatre, London） 1920 年 9 月 20 日～（Lyric Theatre, London）（累計 77 回）
初　版	Heinemann, London（1920 年）
翻訳書	『知られざるもの』 （2016 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳）

№26	上　り　坂　の　道 （3 幕）
原　題	The Road Uphill
梗　概	［第 1 幕］（1919 年 5 月、シカゴのシェリダン夫人の家） 客間で、コーネリア・シェリダン夫人が、パリから訪ねて来て着いたばかりの兄ブロデリック・マドンと雑談している。彼はダンディーな男で、ルイ 15 世風のマンション、犬のチンと着る物を何よりも大事にしている。（彼は 25 年間独りで服を着たことがなく、着方が分からないからという理由で、自分の身の回りの世話をする従者を泊めることができない友人からの週末の招待を断わる。）1918 年の休戦から 6 か月経っているが、コーネリアは戦時中に仕上がらなかったカーキ色のスカーフをまだ編んでいる。 若い女が二人訪ねて来る――シェリダン夫人の息子ジョーの婚約者ルース・ラティマーとジョーの弟フォードに惹かれているマーガレット・デイトン（ペギー）である。息子たちは二人とも戦争を無傷で切り抜けてきており、ジョーは航空兵としてずば抜けた記録を持っている。しかしながら、コーネリアは冒険のせいで息子たちが落ち着きを失っていると言って気をもんでいる。戦争から戻って以来、フォードは芝居を書いているが、ジョーは 4 か月間何もせずにだらけていて、いくつかあった優良企業の仕事も断ってしまった。母親と婚約者は、過酷な戦争の後の反動として彼が怠惰なのをよしとしているが、もう気持ちを切り替える時だということで一致している。コーネリアはルースに、ジョーが機関車会社の社長からの仕事のオファーを受け入れるように促すよう頼む。 ジョーが健康そのもので実にご機嫌な様子で入って来る。彼はいつものことだが、クラブで――寝ていたのではなく「考えていた」のだ。ペギーが飛行機に乗せてほしいと頼むと、彼はもう二度と飛びたくないと言って、にべもなく断る。 ほかの連中がブロデリックがパリから持って来たプレゼントを見に出て行くと、ルースはジョーをしっかりと捕まえて、母親が彼が怠惰なことをひどく気に病んでいると話す。共通の友人ハワード・グリーンは帰郷して 1 週間と経たない内に仕事に行った――2 年経ったら百万長者になるかもしれない。彼女は彼に今度のオファーを受け入れるように勧めるが、彼は世界にはもう十分機関車があるから、これ以上作る気はないと答える。彼には少ないながら生活に困らないだけの収入があり、戦争が終わったので取り戻した人生を最大限に活用することを望んでいる。 ルースは彼に、叔父のブロデリックのような軽薄な人間にはならないよう注意するが、彼はその心配はないと言う。ブロデリックは金の亡者だったアメリカ開拓者の二世――金を相続したが、自由な時間の使い方を知らない浪費家――である。やる価値のあることが決まったらそれをやるとジョーは約

	束する。 　室内装飾家チャールズ・スチュアート・ウィロビーの来訪が告げられる。彼は快適だが旧式の部屋を見て嫌悪感を示し、シェリダン夫人が客たちと戻って来た時に、サンフランシスコ火災で燃えてしまうべきだったと言う。その代わりに、壁を紫にして、床をモザイク模様にし、「至る所にクッションを置いた」ペルシャ風の部屋をデザインすると言う。ジョーはその部屋が 30 年間変わっていないことを指摘する――子供の頃からどの絨毯も家具も覚えていて手放そうとしない。彼はウィロビーをからかい、ウィロビーは怒って出て行く。 　その後すぐに、フォード・シェリダンがハワード・グリーンと入って来て、ブロデリックにいずれは億万長者なる人間だと紹介する。フォード自身は、ハワードの成功を目の当たりにした感動で心を動かされて、作家を諦めて証券業に飛び込むことを決めている。母親とペギーは喜ぶが、ジョーはコメントを避ける。 　ジョーは自分の決意を発表する。2 年間パリに行って絵を勉強すると言う。彼はルースがすぐに自分と結婚して一緒に行くことを望むが、ルースは病身の母を置いて行くことはできない。ジョーを待つと約束する。 ［第 2 幕］（2 年後、パリのブロデリック・マドン（シェリダン夫人の兄）のマンション） 　ブロデリック・マドンはシェリダン家からの訪問を待っている。彼は大公妃アンナ・アレクサンドロブナから電話をもらって喜び、自分の家系はポコホンタス王妃から引き継がれており、血管には王室の血が流れていると（真実ではないが）請け合う。 　彼が靴下の片っ方が裏返しなのを見つけて一波乱が始まる。彼は召使のフランソワをひどく怒鳴りつけ、かっとなって解雇通告をし、すぐに出て行けと言うものの、気持ちでは許していて、結局言いなりになる。 　玄関のベルが鳴り、コーネリアがフォード、ペギー（今はフォードの妻）、ルースと一緒に入って来る。少し遅れてジョーが加わる。ブロデリックはコーネリアに上品なパーティーを用意してあると言うが、コーネリアは多分もうすぐロワール川の城への旅に出ることになるだろうと言う――コーネリアたちと一緒の船でやって来たハワード・グリーンが自分のロールスロイスで連れて行ってくれると言うのだ。 　しばらく経つと、ハワードが訪ねて来て、みんなを競馬に連れて行こうと誘うが、みんなでジョーのアトリエに行って彼の絵を見ようと決めていたので、コーネリアは返事をしぶる。その間、ブロデリックはみんなにルイ 15 世風ですべて（電話機も含めて）揃えられているマンションを見せる。（「もしルイ 15 世が電話機を持っていたら、そういう電話機だったであろう。」） 　ジョーは母親と親しげにおしゃべりをするが、母親はハワードがルースを注目していることに不安を感じていると漏らす。しかしながら、ジョーはル

	ースのことを信じて疑わない。ルースとハワードが戻って来ると、ジョーはみんなに、キャンパスは燃やしてしまったし、絵の道具も捨ててしまったと話す――自分の作品について専門家の意見を求めたところ、上手な素人にしかなれないと言われたのだ。 ハワードはすでに百万長者になっており、これを聞いてジョンに勇気が欠けていると思うが、ルースは2年を無駄に費やしたことに驚く。しばらくの間、ハワードとルースが二人だけになると、ハワードは、ジョーは決して結婚するのにふさわしくならないだろうから、婚約を解消した方がいいと言って、ルースに求婚する。 ルースはハワードが好きなことと、母の死後してくれた親切に感謝していることを認めるが、この状況でジョーのことを諦める訳にはいかないと言う。ハワードは出て行き、ジョーが戻って来る。 ルースは、時間を無駄にするのをやめなければいけない、夢から現実の世界に戻って仕事に就くべきだと言ってジョーを非難する。ジョーは自分の収入で我慢できる程度に暮らせると提案するが、ルースはそれでは金持ちの友達みんなと付き合うのに不利なことになるだろうと指摘する。ジョーは働きたくないのだとあからさまにルースは言う。ジョーの弟フォードがペギーへの愛のために作家になる野心を捨てて「ひとかどの仕事」に落ち着いたのだから、どうしてジョーが自分への愛のために同じことができないのか？　ジョーははっきりと、たとえ破滅しようとも、心に浮かんだことに従って「未知の魂の国」を探さなければならないと言う。これでは手に負えず、ルースは婚約指輪を返すと、ホテルにいるハワードに電話して会いに行く。 コーネリアは息子が深く悲しんでいるのを見て慰める。 ［第3幕］（3年後、イリノイ州レイクフォレストのシェリダン夫人の実家） ポーチに、コーネリアがルース、ペギーと一緒に座っている。コーネリアは、しばらく会っていないジョーが来るものと待っている。ジョーとルース――今や、ハワード・グリーンの妻で1歳になる息子の母親である――がパリで別れて以来、初めて顔を合わせるのである。 ジョーは到着すると、上機嫌で、今や小さな娘がいるのにまだ乙女らしい様子を留めているかわいらしい義理の妹をからかう。彼女は、友達が飛行機を預けてくれたので、ハワードが仕事から戻ったら乗せて飛んでくれると言う。ハワードは今や億万長者で、ルースと新しい家を建て、ウィロビーに装飾してもらうことになっている。 そうこうする内に、フォードが驚くようなニュースを持って戻って来る。大学の心理学の教授であるドリスコルがジョーの本について、校正刷りを見たが、この数年来読んだ中で一番出来がいいと熱く語ったのだ。ジョーの家族がこの本のことを耳にするのは初めてだった――ジョーは驚かそうと思って内緒にしていのだ。フォードとルースは心からお祝いを言う。 チャールズ・スチュアート・ウィロビーが、シェリダン夫人の家族の「潜

	在的な個性」に影響を及ぼすような、庭を根底から変えるプランを持って登場する。夫人は庭を見るために彼を連れ出す。 妻と二人だけ残された機会をとらえて、フォードは妻にハワード・グリーンについて奇妙な噂が広まっていると話す。世間の噂では、彼が経済的にひどく困っているというのだ。彼は妻や新しい家に惜しげもなく金を使っているのだからと言って、ペギーは信じようとしない。 ルースが戻って来ると、二人は急に話しをやめて自分たちの子供を見に行き、残されたジョーは最初の本をルースに上げる。ルースが幸せに結婚していることにジョーは喜ぶ。彼はまだ彼女を熱愛しているし、これからもずっとそうだが、もし誰かを本当に愛するなら、その人がその人なりのやり方で幸せであることを望むべきだということをすでに悟っているのだ。彼は彼女に本のことについて話す。彼がこうありたいと望むものは、常に見たままに真実を語っても差し支えない完全に自由な批評家なのだ。彼はウィロビーのような山師に依存することからアメリカの魂を目覚めさせて、世界がかつて知っていた最も偉大な芸術作品を作るよう同国人を説得したいのだ。ルースはとにかく彼を信じていると言う。 ここで、ハワードが真っ青な心配そうな顔をして登場し、皮肉っぽくジョーに挨拶する。ペギーが彼に飛行のことを思い出させ、彼はすぐに乗せて飛ぶことを約束する。それから、彼は落ち着いて妻に話す。投機が失敗して彼は破産したというのだ。ルースが助力と同情の気持ちを伝えると、彼は彼女が自分と結婚したのは金のためで、今や自分は無一文なのだから、別れた方がいいと言って断る。そして、彼が着替えのために出て行き、ジョーがウィロビーと一緒に入って来ると、ルースは涙を浮かべてそっと立ち去る。 （庭で一輪の赤いゼラニウムを見てうっとりしていた）このインテリアデザイナーが巧妙なペテン師だと確信しているジョーは、すっかり彼のことを大笑いする気になっていた。しかし、ウィロビーが本当に自らを信じていると気づくと、嫌悪感を催し、撃つぞと脅して家から追い出す。 ハワードがえらく不機嫌な様子で戻って来たので、ジョーは何かまずいことがあったのだと思い、抱えている問題を白状させる。ハワードは自分の金を失っただけでなく、他人の金まで投機につぎ込んでいたので、数年間監獄行きになるのは間違いないというのだ。ルースのために、ジョーは自分の金を残らずやろうと申し出るが、ハワードはそんなのは焼け石に水だと言い切る。彼はジョーに、ルースはまだジョーを愛していて、それが原因で自分たちの結婚がうまくいかなかったのだと憤慨して言う。彼はジョーを憎んでいるが、やむを得ず頼みごとをする。息子の面倒を見て、父親がつまらない泥棒だったことを教えないでくれというのだ。 ペギーが飛行機に乗る準備をして入って来ると、ジョーが懇願するにもかかわらず、ハワードは飛行機のエンジンを起動しに出て行く。ジョーはペギーにハワードが飛行できる状態ではないことを話し、飛ばないように頼むが、

	彼女は聞き入れようとしない。彼女はスカーフを取りに出て行く。そうこうする間に、みんなはエンジンが始動するのを聞き、とたんにジョーはハワードが離陸したことを知る。みんなは彼がテスト飛行をしているのだと思うが、彼はどんどん上昇してからエンジンを切ってきりもみ降下する。その間、ペギーは叫び声を上げ、ジョーは気絶するルースの上に身をかがめる。
執　筆	1920 年（46 歳）（now lost）
上演歴	Unproduced
初　版	Unpublished

№27 ②	ひ　と　め　ぐ　り （3 幕・喜劇）
原　題	The Circle
梗　概	（ドーセット州にあるアーノルド・チャンピオン＝チェニーの家の客間） ［第 1 幕］（朝） ［第 2 幕］（2 日後、午後） ［第 3 幕］（同じ日、夕方） 　エリザベスは、有能で裕福なイギリス国会議員の夫アーノルドと結婚して 3 年、何不自由ない生活をしているが、選挙と趣味の室内装飾に夢中の夫に不満を覚えている。アーノルドの母キティは、30 年前に幼い息子と夫を捨てて、夫の先輩で前途有望だった若い国会議員ポーティアス卿と駆け落ちし、今はイタリアで暮らしている。エリザベスはその義母の不倫をロマンチックなものとして日頃から憧れている。その義母が相手と共に久しぶりに帰国するという。エリザベスは夫の反対を押し切って、自分たちの屋敷に招待する。屋敷の近くには、アーノルドの父クライヴが独りで住んでいる。 　エリザベスが、義母が駆け落ちしてから 30 年経った今どうしているかに多大な関心を寄せるのは、屋敷に来ているテディという青年と愛し合っているからだ。テディはマレー半島でゴム園を経営する因習に囚われない人間で、近いうちに現地に戻らなければならない。 　いよいよキティとポーティアス卿が到着し、さらにクライヴまで突然現れる。ポーティアス卿はかつて誰からも好かれる魅力に富んだ青年だったが、今では不機嫌で、入れ歯が合わないなどと愚痴っぽくなっている。一方、キティを見てエリザベスは驚愕する。イギリス社交界で清楚な美女として知られていた彼女が、今は太り気味の体型、厚化粧、染めた髪、派手すぎる衣装などで、昔の面影がすっかり消えている。その上、立ち居振る舞いががさつで、夫と喧嘩ばかりしている。 　エリザベスはアーノルドにテディとの愛を告白し、離婚してほしいと頼むが、アーノルドは絶対に離婚する気がない。そういう状況の中で、キティとポーティアス卿の現実の姿を目の当たりにして、テディとの愛を貫こうというエリザベスの意欲が揺らいでくる。そこへ、アーノルドから、自分から離婚する気はないが、彼女の方から離婚できるようにすると寛大なことを言われ、自分の行為は身勝手すぎるのかもしれないとエリザベスは反省する。しかし、テディから、愛のない結婚なんて無意味だ、人生で大事なのは愛だと説得される。こうして、夢がいずれ破れるのを予感しつつも、エリザベスはテディと駆け落ちする。アーノルドが寛大になったのは、エリザベスを思い留まらせるためにクライヴが入れ知恵したからだったのだが、結果は裏目に出たのだ。

執　筆	1919 年（45 歳）
上演歴	1921 年 3 月 3 日～（Haymarket Theatre, London）（181 回） 1921 年 9 月 12 日～1922 年 1 月 7 日（Selwyn Theatre, New York） 1922 年 1 月 9 日～2 月（Fulton Theatre, New York）（累計 175 回） 1931 年 3 月 2 日～（revived by J. and R. Gatti） （Vaudeville Theatre, London）（86 回） 1938 年 4 月 18 日～6 月 18 日（Playhouse Theatre, New York）（72 回） 1944 年 10 月 11 日～（revived by Tennent Plays Ltd.） （Haymarket Theatre, London）（110 回） 1970 年 5 月（Bolton Little Theatre, Bolton） 1974 年 3 月 26 日～6 月 16 日（Roundabout Stage II, New York）（96 回） 1986 年 2 月 20 日～3 月 23 日 （Theatre at St. Peter's Church, New York）（33 回） 1989 年 11 月 14 日～（Preview：8 回）、20 日～1990 年 5 月 20 日 （Ambassador Theatre）（208 回） 2007 年 5 月 10 日～11 月 11 日 （Royal George Theatre, Niagara-on-the Lake, Ontario, Canada） 2014 年（Peterborough Players）（Peterborough, New Hampshire） 2015 年 11 月 28 日～12 月 5 日 （Lewes Little Theatre, East Sussex, UK）（8 回） 2016 年 5 月 15 日（Staged Reading） （Kitchener-Waterloo Little Theatre, Waterloo, Ontario, Canada） 2016 年 8 月 26 日～28 日（35below and Reuter Center on UNCA’s campus, Asheville, North Carolina, USA） 2023 年 4 月 29 日～6 月 17 日 （Orange Tree Theatre, Richmond, Surrey, UK）（57 回）
初　版	Heinemann, London（1921 年）
翻訳書	『ひとめぐり』（1956 年、新潮社、木下順二訳、 『サマセット・モーム全集 21 戯曲集 I ひとめぐり・おえら方』所収） 『ひとめぐり』（2020 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳）

№28 ③	ス　エ　ズ　の　東 （7 場）
原　題	East of Suez
梗　概	（芝居は第 1 次大戦後、列強の中国介入が進む北京で進行する。） ＜第 1 場＞（夕暮れ時、北京の通り） ＜第 2 場＞（同じ日の同じ頃、ブリティッシュ・アメリカン・タバコ会社の建物の二階の小さなベランダ） ＜第 3 場＞（1 年後、午後、忠誠と高潔な雰囲気が漂う寺院） ＜第 4 場＞（数日後、夜、寺院の中にあるアンダーソン（ハリー）夫妻のマンションの居間） ＜第 5 場＞（数週間後、午後遅く、寺院の中庭） ＜第 6 場＞（数週間後、午後、中国人の家の部屋） ＜第 7 場＞（翌日、夕方、アンダーソン（ハリー）夫妻のマンション） 　北京にあるタバコ会社の社員ハリーは、欧亜混血児のデイジーと婚約しているが、友達のジョージは、自分の苦い経験を語って、ハリーに考え直すよう促す。ジョージも昔、重慶の副領事だった頃、ある欧亜混血児と恋に落ち、もう少しで職を失いそうになり、転勤して事なきを得たのだ。ちょうどその時、デイジーが訪ねて来て、見ると、彼女こそ昔ジョージが付き合っていた女だった。デイジーは、ジョージと別れてから苦境に陥り、やむなくリーという中国人に身売りをしたが、その後アメリカ人の妻となってシンガポールに行くなど、数奇な運命を辿ってきたのだ。この巡り合いでデイジーが昔の気持ちを燃え上がらせ、やがてハリーと結婚したあと、夫を亡きものにしてジョージと一緒になりたいと思うようになる。彼女は一人の苦力を使って夫を刺そうとするが、行き違いがあってジョージに重傷を負わせてしまう。 　デイジーがジョージを献身的に看病しているうちに、生死の境にあるジョージがうわ言でハリーに嫉妬しデイジーを愛していると漏らすのを聞いて、ジョージが回復すると彼女は執拗に彼を口説く。しかし、ジョージが昔も今も二人の恋が忌まわしい癌みたいなものであることを説いて彼女から去ろうとすると彼女が失神し、介抱しているうちに二人は抱き合ってキスし離れられない仲になってしまう。ちょうどその時、ジョージと付き合いのあったシルヴィアという若い女が北京に来ると、デイジーが二人の関係を疑って嫉妬し、10 年前にジョージから来たラブレターを夫のハリーに送ったため、ジョージは面目が立たず自殺してしまう。ジョージの手紙を握りしめ、詰問しようとやって来たハリーが、チャイナドレスを身に着け中国人風の化粧をしたデイジーの姿に圧倒され、ひざまずいて泣き出すと、彼女は冷たくひたすら鏡に映る自分の姿に見入っている。
執　筆	1922 年（48 歳）

上演歴	1922 年 9 月 2 日～（His Majesty's Theatre, London）（209 回） 1922 年 9 月 21 日～12 月 1 日 （Eltinge 42nd Street Theatre, New York）（100 回）
初　版	Heinemann, London（1922 年）
翻訳書	『スエズの東』（2016 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№29	雨 （3 幕）
原　題	Rain（初期名：Miss Thompson） （J.Colton と C.Randolph による同名短編小説の翻案）
梗　概	（芝居は南太平洋パゴパゴ島にあるジョン・ホーンのホテル兼店舗の共同居間で進行する。） ［第 1 幕］ 　ある朝、港にサンフランシスコからの汽船が到着し、帆船に乗り継いでエイピアに行く一等船客の牧師の妻デイヴィッドソン夫人、マクフェイル医師とその妻がホーンの店にやって来る。やや遅れて、二等船客のミス・サディー・トンプソンが派手な格好でやって来る。外では雨が降り始め、島の総督に会いに行っていたデイヴィッドソン牧師がやって来て、エイピア行きの帆船の船員の一人がコレラにかかっていることが判明したので、少なくとも 10 日は足止めされることを告げる。ホーンの店以外に泊まれるところもなく、デイヴィッドソン夫妻とマクフェイル夫妻は二階に、ミス・トンプソンは元倉庫だった部屋に泊まることになる。やがてミス・トンプソンが部屋で水兵たちとどんちゃん騒ぎを始めると、デイヴィッドソンはミス・トンプソンがホノルルの売春街の女だと気づき、どんちゃん騒ぎをやめさせようと部屋に入って行くが、オハラ軍曹と取っ組み合いになり、つまみ出されてしまう。 ［第 2 幕］（2 日後、午後遅く） 　まだ外では雨が降り続いている。ホーンとマクフェイルの会話から、デイヴィッドソンがミス・トンプソンを本国に送還するよう説得するために総督のところへ足しげく通っていることが判明する。戻って来たデイヴィッドソンはミス・トンプソンに、悔い改めないとエイピアには行かせないと説教するが、ミス・トンプソンは拒絶する。ミス・トンプソンに会いに来たオハラがそれを聞き、エイピアに行けないなら自分と一緒にシドニーへ行こうと誘う。そこへ、総督からミス・トンプソンに宛てたサンフランシスコへの強制送還の通知が届く。ミス・トンプソンは総督にシドニーへ行かせてもらえるよう頼むために出て行く。総督に断られて戻って来たミス・トンプソンは、マクフェイルにデイヴィッドソンを説得してくれと頼み、マクフェイルはデイヴィッドソンに相談を持ちかけるが、断られてしまう。ミス・トンプソンに同情的なマクフェイルは、自分が総督にかけ合ってみようと言って出て行く。やがて、総督に断られたマクフェイルが戻って来ると、絶望的になったミス・トンプソンはデイヴィッドソンに許しを乞うが、デイヴィッドソンはミス・トンプソンが罪を犯して逃亡中であることを知っており、サンフランシスコに戻って刑に服すべきだと言って聞かない。デイヴィッドソンが立ち去ろうとすると、ミス・トンプソンは追いすがって、自分が悪かった、悔い改めると誓う。 ［第 3 幕］

	＜第 1 場＞（4 日後、夜） ミス・トンプソンがサンフランシスコ行きの船に乗る前日の夜中。相変わらず、外では雨が執拗に降り続いている。営倉から脱走して来たオハラは、ホーンから連日ミス・トンプソンの部屋でデイヴィッドソンが祈りを捧げていたと聞かされたあと、ミス・トンプソンと対面して寝起きのままのようなだらしない姿に驚く。オハラは、ミス・トンプソンがシドニーへ向かえるようジャンクを手配したから今すぐ発つようにと言うが、ミス・トンプソンは、自分は悔い改めてサンフランシスコに行くのだと言って断る。そこへ、デイヴィッドソンが原住民の結婚式の見物から一人だけ戻って来るが、今やミス・トンプソンがデイヴィッドソンを頼りにしているの見て、オハラは諦めて帰って行き、ミス・トンプソンも寝るために部屋に戻る。 皆が寝静まった頃、眠れないミス・トンプソンがデイヴィッドソンを呼ぶ。ミス・トンプソンの改悛の情が著しいのに深く感動したデイヴィッドソンは、ミス・トンプソンと一緒に祈りを捧げるため部屋に入る。 ＜第 2 場＞（翌朝） 雨は止んでいる。浜でデイヴィッドソンの自殺体が見つかる。ミス・トンプソンはまた以前の派手な姿に戻っている。デイヴィッドソンの自殺を聞いたミス・トンプソンは、一夜を共にした報いは自分が受けることになると思っていたのが、そうではなかったと知って安堵する。
上演歴	1922 年 10 月 9 日～（Garrick Theatre, Philadelphia）（40 回） 1922 年 11 月 7 日～1924 年 5 月 31 日 （Maxine Elliott Theatre, New York）（608 回） 1924 年 9 月 1 日～1924 年 11 月 29 日 （Gaiety Theatre, New York）（96 回） 1925 年 5 月 12 日～（Garrick Theatre, London）（150 回） その後“Pluie”（Théâtre de la Madeleine, Paris）上演 1926 年 10 月 11 日～23 日（Century Theatre, New York）（16 回） 1935 年 2 月 12 日～3 月（Music Box Theatre, New York）（47 回） 1942 年 6 月 24 日～（St. Martin's Theatre, London）（94 回） 1944 年 10 月 26 日～2 週間（Sam S. Shubert Theatre, Philadelphia（Musical “Sadie Thompson” by Howard Dietz & Rouben Mamoulian (playwright) & Vernon Duke (music) & Howard Dietz(lyrics)） 1944 年 11 月 16 日～1945 年 1 月 6 日（Alvin Theatre, New York） （同上 Musical “Sadie Thompson”）（60 回） 1972 年 3 月 23 日～28 日（Astor Place Theatre, New York）（7 回） 1997 年 11 月 20 日～（opera “Sadie Thompson” by Richard Owen(music and libretto)） 2003 年 2 月 20 日～（Alice Tully Hall, New York）（同上 opera “Rain”） 2015 年 7 月 10 日～12 日（musical）（Martel Theater, Poughkeepsie, USA）

	2016 年 3 月 24 日～5 月 1 日（musical by Sybille Pearson (playwright) & Michael John LaChiusa (music & lyrics)） （Old Globe Theater, San Diego, USA）
初　版	Boni and Liveright, New York（1923 年） Samuel French, UK（1948 年）
日 本 上演歴	1973 年『パンゴパンゴ』（劇団太陽、梅野郁夫による日本独自翻案） 1979 年『雨』（劇団民藝、里居正美訳、若杉光夫演出、奈良岡朋子主演） 1982 年『雨』（劇団表現劇場、夏川大二郎脚色・演出） 1988～9 年『雨』（劇団民藝、里居正美訳、若杉光夫演出、樫山文枝主演） 1989 年『雨』（劇団表現劇場、夏川大二郎脚色・演出） 2023 年『Rain』（ダンスプロジェクト） （Dance Base Yokohama、鈴木竜振付、大巻伸嗣美術、米沢唯主演）

№30	ラ ク ダ の 背 中 （3 幕・笑劇）
原　題	The Camel's Back
梗　概	［第 1 幕］（朝） ハムステッドのバレンタイン・ルフェーブルの家の客間で、彼の姪で被後見人のイーニッドが、6 週間の内にほかの男と結婚することになっているのにもかかわらず、若くてハンサムなデニス・アームストロングと熱烈なキスをしている。二人ともこのことが家族の論争を巻き起こすことを承知の上で、イーニットはこのまずい状況を伯母のハーマイオニから伯父に伝えることができたらいいのにと思っている。しかしながら、ハーマイオニはロンドンに出掛けていて、バレンタインが最初に入って来る。 バレンタインがデニスを認めていないのは、デニスがバレンタインに気安く「やあ君」と呼びかけ、陸軍を離れて以来、決まった仕事に腰を落ち着けたことがないからだ。デニスは、植民地に出て行って茶の栽培をする決心をしたと言う。必要な 4,000 ポンドを工面するために、彼は金目当ての結婚をするつもりである。この時、ハーマイオニが帰って来て、彼の計画を聞かされる。彼女はすぐに、彼が心に留めている花嫁がイーニッドではないかと疑う。イーニッドの婚約者ハワード・ディクソンから、イーニッドが婚約を破棄したことを聞かされたばかりだからだ。この知らせを聞いてバレンタインはショックを受け、イーニッドは義務を果たすべきだと言い張る。イーニッドがもうデニスと婚約したと聞くと、バレンタインはなおいっそう苛立つ。若者のデニスを悪党呼ばわり、ごろつき呼ばわりして、部屋から出て行けと命じる。ハーマイオニはバレンタインに、厳しい父親を演じないよう忠告し、デニスが 10,000 ポンドを目当てにイーニッドと結婚するつもりだとしても、彼としては実に分別のあるやり方だと主張する。バレンタインは、イーニッドの 35 歳の誕生日までは自分が彼女の金の管財人であることを指摘し、彼女が自分の意志に反して結婚するなら、一文たりとも渡すつもりがない。 二人の言い争いはバレンタインの母ルフェーブル夫人の到着で中断される。夫人は、イーニッドの結婚後、自分たちと一緒に住むように勧めるバレンタインからの手紙に応じて来たのだった。夫人はその提案をありがたく思うが、親類は離れていたる方が良いと考えている。夫人が未亡人になってからずっと、バレンタインは大目に見て、夫人がオックスフォード・ストリートのホテルに住めるようにしてきたが、もう終わりにすると脅す。ハーマイオニは自分だけの考えに従って生きたい気持ちから盛んに義母の肩を持つ。 これが夫婦の口論に発展し、その中でバレンタインはハーマイオニに関する不満を述べる。バレンタインはイーニッドとルフェーブル夫人に代わってハーマイオニが介入することに反対する。バレンタインはハーマイオニの服が年の割に若過ぎると思い、髪を染めたところだと知ってショックを受ける。

	ハーマイオニは、若いデニスが自分の愛人だったことをほのめかして報復する。ハーマイオニはバレンタインの猛烈な嫉妬と疑念をかきたたせてから、彼が「実につまらないことでこれ以上ないくらい訳も分からず騒ぎ立てる」とびっくりするようなことを言う。 ［第 2 幕］（昼食後） （バレンタインが食べ損ねた）昼食後、ハーマイオニはルフェーブル夫人に、夫のことでひどく悩んでいると打ち明ける。自分がデニスと関係を持ったという妄想に夫がとりつかれているので、電話で医者を呼んだというのだ。 長い散歩の後、疲れて空腹のバレンタインが戻って来ると、ハーマイオニは美味しかった昼食のことを一皿ごとに説明して苦しめる。突然、バレンタインはイーニッドが新しい婚約指輪をしているのに気づく。イーニッドは、金がなかったので、これを買うためにデニスが前の指輪を質に入れたと説明すると、伯父に質札を手渡し、前の指輪を買い戻して前の婚約者に返してほしいと頼む。 バレンタインは妻と二人だけで話すことを求める。彼はひどく勿体ぶっていて、妻が彼のために持って来たビスケットもパテも欲しくないふりをする。妻は自分が食べることで彼をじらす。彼が不貞のことで妻を責めると、妻は極端な驚きを示して、そんなことは言ったことがないと断言する。彼が離婚するぞと脅すのに対して、妻は彼が何の証拠も持っていないこと――妻に反論するのは彼の言葉だけで、彼の話を信じる裁判官はいないこと――を指摘して反論する。 バレンタインは、元気よく入って来たデニスを「親友」として迎えながら決着をつけようとする。彼もビスケットとパテを自分で取って食べる。上流社会の人間の態度を取りながら、バレンタインはデニスが人妻……そう、ハーマイオニの歳の人妻と関係を持ったことがあるかと尋ねる。本当のところ、一時的にしろちょっとはハーマイオニに恋したのか？　若者は明らかに困惑するが、ハーマイオニは「すごくよくしてくれる」とだけ言う。バレンタインがそれ以上解明する前に、医者の到着が告げられる。 ハーマイオニの急な連絡にもかかわらず、家の全員が健康なのでディッキンソン医師は驚く。バレンタインが妻を探しに出て行くと、妻は手を揉み搾りながら花瓶に浸けたハンカチを持って入って来て、医者の同情が期待できないことは分かっていたと言いながら、両腕に身を投げる。医者が彼女にキスしていると、バレンタインが戻って来て二人を見つける。いささか困惑して、医者はハーマイオニとちょっと個人的なおしゃべりをしていたのだと言い、バレンタインは嫌味を言ってまた出て行く。ハーマイオニは医者に、バレンタインの態度が変じゃなかったかと尋ねると、続けて彼の勘違いの話をし、食べ物を拒絶することを付け加える。 医者は内緒でバレンタインを検査しようと決める。医者は本当の精神医学のやり方で実行し、彼が「錯乱状態」であるという結論に達する。ハーマイ

	オニの不貞の話を、医者は「エディプスコンプレックス（子が異性の親に対しては性的思慕を、同性の親に対しては反発を無意識的にいだく心的傾向）の見事な例」と見なし、彼はロブ・ロイ（ロビン・フッド）のキルト（スコットランド高地人・軍人が着用する格子縞で縦ひだの短い巻きスカート）を着たかったのに、フォーントルロイ卿（バーネット作『小公子』の主人公）みたいに黒のビロードを着せていたバレンタインの母親が原因だとした。この時、バレンタインは医者を馬鹿者呼ばわりし、ハーマイオニと離婚すると表明する。ハーマイオニが入って来る時にこれを聞き、医者から判定を下すために「友人」のコートニー・ピックル卿を連れて来るつもりだと告げられる。 　ハーマイオニはほかの家族に、バレンタインは正気を失っているのだから、みんなで調子を合わせなければいけないと話す。それに応じて、家族はみんなバレンタインの世話をやき、ソファーに座らせて休ませる。ハーマイオニがバレンタインのために歌おうと提案すると、彼は元気に跳ね起きる。「何が欲しいの？」とハーマイオニが尋ねる。「知ったことか」とバレンタインは答える。「ヒツジの骨付き肉が欲しい。」 ［第 3 幕］（お茶の時間） 　同じ日のお茶の時間。ハーマイオニはほかの者たちに、決してバレンタインの言うことに反論してはいけないと話す。バレンタインは家族が随分従順になったことに気づいて驚く。イーニッドは、バレンタインが最善のことを知っているのは確かだと言って、以前の婚約を破棄したことについて許しを乞う。ハーマイオニは新しい服に対するバレンタインの非難に賛同し、二度と着ないと約束する。母親は一緒に住もうというバレンタインの提案にもはや反対しない。疑念が深まったバレンタインは、（6 月だというのに！）雪が降るぞと予言したり、部屋中にケーキを投げ散らかしたりして家族の反応を試す。誰もちっとも驚かず、バレンタインがやったことに注意を促しても、ハーマイオニは「あまりおいしいケーキじゃなかった。使い切るのはむしろいい方法だわ。」と言うだけである。デニスはバレンタインの行動は全くもって当然に思えるとお世辞を言う。 　バレンタインが引き続きヒツジの骨付き肉を欲していると、ついに若くて豊満なコックのサラがふたをした料理の皿を持って入って来る。バレンタインががっかりしたことに、オートミールのお粥一膳だけで、サラはまるで彼が小さな子供ででもあるかのように話しかけながら、スプーンで食べさせてあげると言ってきかない。 　突然、バレンタインはサラが赤ん坊扱いすることを「ピックル」という名前と結びつける。紳士録でコートニー・ピックル卿を調べ、精神病の専門医――白痴者と痴愚者のためのいろいろな療養所の所長――であることをつきとめる。今や策略の全貌がバレンタインに明らかになり、彼は妻に逆ねじを食わせようと決意する。

	サラがちょっと外している時に入って来たルフェーブル夫人に問いただすことで、バレンタインはこの状況は服装が若すぎると言われたことに対するハーマイオニの仕返しだと判断する。ハーマイオニはバレンタインがデニスに関する彼女の話は本当ではないと確信していると言うが、バレンタインはハーマイオニが自分の口から否定するのを聞きたいと思う。 サラが戻って来ると、バレンタインはサラといちゃつき始めて――サラは大喜びする。あなたには「性的な魅力」があるとサラに言われて、バレンタインはソファーに座って両腕をサラの腰に回す気になる。バレンタインはパリ旅行を提案して、すぐに荷作りするようサラに言う。 バレンタインの次の行動は、ハーマイオニがイーニッド、デニスと一緒に入って来た時、正気に戻ったふりをすることである。バレンタインはどうして自分が膝掛けにくるまれて肘掛け椅子に座っているのか知りたいと言い、朝からのことは何も覚えていないと言う。そして、家族が望むすべてのことに同意する。母親にはホテルに滞在したままでいいと言い、デニスにはイーニッドとの婚約について心からお祝いを言って、植民地へ行くという彼の計画に賛成し、ハーマイオニには新しい髪の色合いがどんなによく似合っていることか、フロックがちょっと「老け」過ぎだと言う。ハーマイオニは喜んで、バレンタインをクラリッジのディナーに連れて行こうと提案するが、バレンタインは先約があるふりをする。サラが外出着を着て旅行鞄を持ち再登場すると、バレンタインは彼女をパリに連れて行くと平然と告げる。 これに対するハーマイオニの反応は昔ながらのものである――バレンタインからサラの給料の金額を借りると床に投げつけて即座に解雇する。サラはむっとして去り、バレンタインは妻が悪態をつく間ににこやかにディナーの招待を受け入れる。ハーマイオニはひと悶着起こす覚悟を決めて、人生の一番いい時期をバレンタインに捧げてしまったと主張する。16 年の間、「愛して、献身的で、貞節で、忠実で……。」「本当か？」とバレンタインが尋ねる。ハーマイオニは断固として再びそうだと断言する。「それが正に知りたかったことだ。」と夫は言う。突然、ハーマイオニはバレンタインの意図を悟り、怒ったふりをやめて、一緒にパリに行くことに同意する。 バレンタインが船の予約を取るために電話している間に、デニスが入って来て婚約への道を容易にしてくれたことでハーマイオニに感謝する。感謝の気持ちから、デニスはハーマイオニを「かわいい人」と呼んで唇にキスする――ちょうどその時に夫が戻って来る。バレンタインはもはや妻の貞節が信じられない。二人の和解のキスの間に幕が下りると、観客は「バレンタインは今の真実がどこにあるのか決して知ることはないだろう、そして、ハーマイオニはずっと疑心暗鬼にさせ続けるだろう」と実感する。
執　筆	1923 年（49 歳）

上演歴	1923 年 10 月 29 日～（Worcester Theatre, Worcester, Massachusetts） 1923 年 11 月 13 日～30 日（Vanderbilt Theatre, New York）（15 回） 1924 年 1 月 31 日～（Playhouse, London）（76 回）
初　版	Unpublished

№31	月 と 六 ペ ン ス （6 場）
原　題	The Moon and Sixpence （Edith Ellis による同名長編小説の翻案）
梗　概	＜第 1 場＞（数年前、ロンドン、ストリックランドの家の客間の片隅、秋の午後） エイミー・ストリックランドがこぎれいだがありきたりの客間で客たちをもてなしている。彼女は文学に通じた人たちに特化して、二人の女性作家、ローズ・ウォーターフォードとシャーロット・ジェイ、3 人の男性、リチャード・トワイニング、ジョージ・ロードとレスター・ファラデイを集めていた。彼らはお互いの本について議論し、ストリックランド夫人は礼儀として会話が進むのに任せているが、明らかに心ここにあらずで、まるで今まで泣いていたかのように見える。彼女は義理の兄マック・アンドルー大佐から電話がかかってくるのを待っている。電話がかかってくると、彼女は電話を取るために出て行き、客たちは彼女の夫で呆れるほど退屈だと思っている――典型的な中年の株屋チャールズ･ストリックランドのことについて語り合う。彼女が戻るやいなや、彼らは帰る用意をするが、彼女はファラデイに残ってくれと頼む。 彼女は夫が自分を棄てたこと、自分は夫が女と一緒にパリにいると疑っていることを彼に打ち明ける。ファラデイがパリに行く予定なので、彼女は彼がストリックランドを見つけて連れ戻してくれることを望む。たとえ何があろうとも、彼女は夫と離婚するつもりはない。 マック・アンドルー大佐が到着して、ストリックランドが女と一緒ではないことを断言する。彼は絵を描くために独りでパリに行ったのだ。これを聞いて妻は激怒する。愛人のために棄てられたのだったら、許して連れ戻しただろうが､ほんの思いつきのために置き去りにされるのは許しがたい屈辱だ。夫が餓死したって構わない――それどころか、喜ぶだろう。 ＜第 2 場＞（パリ、モンマルトル、屋根裏部屋） 冬、ストリックランドが病気で寒々として明かりのない屋根裏部屋で寝ている。仲間の画家でオランダ人のダーク・ストルーヴがファラデイと一緒に入って来る。二人がろうそくに火を灯すと、キャンバスは壁に向けられていて、アトリエが乱雑に散らかっているのに気づく。ストリックランドはストルーヴにとっとと失せろと言い、ファラデイの姿を見つけるとここで何をしているのかと尋ねる。ストリックランドは明らかに餓死しかかっており、ストルーヴは牛乳と食べ物を取りに出て行く。 その間に、ファラデイは 5 ポンド貸そうと提案し、ストリックランドの妻や子供たちのことを話しかける。ストリックランドとしては、妻が自分から首尾よく逃れたと思っており、自分は悪党らしく振る舞ったのだと公然と話す。画家は妻や子供たちがどうなろうとも一向に構わない――きっと「あの

	馬鹿な老いぼれのマック・アンドルー」が面倒を見るだろうと言い返す。ストリックランド自身は妻や子供たちを養うために 17 年間懸命に働いたのだから、自分の分は尽くしたと思っている。彼はどうにかこうにかベッドから出てファラデイに絵を何枚か見せるが、客にはひどい形で色遣いが乱暴に思える。 　ダーク・ストルーヴが美しい妻ブランシュと一緒に戻って来る。彼はストリックランドが 2 階下の自分たちのアトリエに移るように主張し、ファラデイがそこまで連れて行く。この取り決めはブランシュにとっては不快なことであり、彼女はストリックランドには耐えられないから自分の家に入れるつもりはないと言い張る。ストルーヴはひたすら、二人がローマで出会った時に彼女が「問題を抱えた」家庭教師で解雇宣告を受けていたことを思い出させることで彼女の抵抗に打ち勝つ……。あの時は彼が助けたのだから、今度は彼女がその恩を返すべきだ。不承不承、彼女は同意する。 ＜第 3 場＞（ダーク・ストルーヴのアトリエ） 　ストリックランドがストルーヴ夫妻の居心地のよいアトリエに来てから 3 か月が経っており、かかっていた肺炎から治りかかっている。彼は絵を描いており、一方ブランシュは座って縫い物をしていると、ニコルズ船長が訪ねて来る。ストリックランドの求めに応じて船長に飲み物を持って来てから、ブランシュは彼らを二人だけにする。 　ニコルズは冬の間ずっと尾羽打ち枯らしていたが、マルセイユでやれる港湾労働の仕事があるのをちょうど聞いたところだった。ニコルズはストリックランドに、一緒に働きながら南太平洋に行こうと提案する。ニコルズは時期がきたら知らせると約束して出て行く。 　夕食の食べ物を持って戻って来ると、ストルーヴはストリックランドに今が自分のアトリエに戻る時だとほのめかす――ストリックランドはこの部屋ではほかの誰とも一緒には絵を描かないし、ストルーヴ自身はここで仕事をしたいのだ。ストリックランドはストルーヴの絵のまずさについてひどく無礼なことを言ってから、荷物をまとめるために箱を持って来るようブランシュに呼びかける。ブランシュがストリックランドと一緒に行くつもりだ――そうせずにはいられないと宣言すると、ストルーヴはすっかり意気消沈してしまう。優しいストルーヴはブランシュの前にひざまずいて、いてくれと頼む。ストルーヴはブランシュに彼女が耐えることになるあらゆる苦難のことを警告するのだが……無駄に終わる。結局、うまくいかなければ、ストルーヴはいつでもブランシュを連れ戻す用意があることを請け合う。 　二人の男が議論を続けている間に、ブランシュは寝室に入って行く。ストリックランドは、ストルーヴが嫉妬からくる想像にすぎず時が経てば元に戻ることを望みながらも、ブランシュとの関係を疑っていたことを無理やり白状させる。「どうしてそんなことをしたのだ？」とストルーヴは叫ぶ。「裸を描きたかったのだ」とあっさり返される。

	ストルーヴは妻を愛しているあまり、妻がストリックランドの不潔な屋根裏部屋にいると思うと耐えられない。ストルーヴは二人が一緒に彼自身のアトリエを所有するようにしようと決意し、ポケットの中の金を半分テーブルの上に置く。ストルーヴが出て行く前に、ストリックランドはブランシュの裸の絵を見せる。最初は衝動的な怒りから、ストルーヴはその絵を壊したくなる。しかし、絵の美しさに打ちのめされ、絵を譲ろうというストリックランドの提案を受け入れる。疲れ果てて、妻によろしくと言いながら、ストルーヴは出て行く。 ストルーヴの寛大な行為を聞いて、最初はブランシュも良心の呵責にさいなまれるが、金は拒絶しない。ブランシュはストリックランドと一緒の居心地のよいきちんとした生活に取りかかって落ち着くつもりであるが、彼が南太平洋に向けて発つ計画であることを知り、自分が先々「彼の重荷」になると情け容赦なく言われると、彼女の幻想は木端微塵になる。ストリックランドが自分を愛していないことを悟ると、ブランシュは寝室に入って行き、銃で自殺する。 ＜第 4 場＞（パペーテ、オテル・ド・ラ・フルールの厨房） 17 歳の美しい原住民の娘アタが昼食のためにテーブルを整えながら、太った女将ティアレ・ジョンソンと話している。中国人のコック、サンがレンジに向かっている。ティアレは酔っ払って寝過ごしているニコルズ船長を起こしにアタを行かせる。 クトラ医師が入って来て、パイナップル・カクテルを注文する。医師はティアレに今は波止場ゴロでぶらぶらと歩き回っては絵を描いている――原住民には「おとなしい人」で通っている――ストリックランドのことを話す。アタは熱心に聞き入って、ティアレに「あの人が好き」なことを打ち明ける。 汚れた白いスーツに腰帯をしてぼろぼろになった原住民の麦藁帽を被ったストリックランドが入って来る。真っ赤な花のついた小枝を何本かもっており、楽しそうで人なつっこく見える。ティアレは彼のために見つけた色々な仕事を次から次に放り投げてしまったと言って非難する。彼は画材を買えるようになるまで働いて――そうなったらやめるのだと説明する。 ニコルズ船長が入って来る。彼は二日酔いで、コーヒーのブラックを注文する。彼はストリックランドを見つけて驚く。別々の船に乗ってマルセイユを経ってから、お互いに会っていなかったからだ。ストリックランドは船長から 20 フラン借りようとするが、不首尾に終わる。 ティアレは船長にストリックランドのことを詰問し、過去の経歴を聞く。ティアレは船長に 4 週間分の賄い代の貸しがあることを思い出させ、1 週間以内に払わなければ追い出すと脅す。船長はおとなしく出て行く。それから、ストリックランドが 20 フラン欲しがっていたことを耳にしていたティアレは、「原住民と同じ生活をする」ことについて説教し、結核かハンセン病にかかることになるかもしれないと警告して――自らその金を与える。ティアレ

	は、彼にとって一番いいのは、果物と魚が食べられてコプラで金を稼げる小さな農園を持っているアタと結婚することだとほのめかす。彼は最初の内、すでにイギリスに妻があるから重婚罪を犯す訳にはいかないことを挙げてその考えを良しとしない。しかし、ティアレは、原住民の結婚式を挙げればアタが満足することを改めて保証する。簡素な晴れ着を身にまとったアタがどんなに美しいかを知り、どんないいモデルになるかを悟って、ストリックランドはようやく同意し、ティアレは二人両方にシャンパンをごちそうする。 ＜第 5 場＞（タラヴァオに近いアタの農園） 　アタとストリックランドが豊富な花々と美しい山の風景の真ん中にあるアタの草ぶき屋根の小屋に住み始めてからもう 4 年経っている。アタが料理鍋にかがみ込んでいる時に、彼らの子供がアタの足の回りで遊んでいる。アタの様子は不安に満ちている。 　クトラ医師が暑さの中を長いこと上って来て、息を切らしながら喉をカラカラにして入って来る。アタは原住民の若者にココナツを取りに行かせ、医師はむさぼるように飲む。医師はなぜアタが自分を呼んだのか探ろうとするが、アタは説明したがらない。やっとのことで、アタはストリックランドが病気であることを認める。アタがストリックランドは寝ずに絵を描いていると言うと、医師は怒る。「絵が描けるくらい元気なら、タラヴァオまで下りて来て、わたしが丘をこんなにとんでもなく歩いて上らなくてもいいようにするだけの元気があるはずだ」と医師は言う。だが、ストリックランドを見た時、医師は何の病気か悟る――顔と両腕の茶色い斑点はハンセン病の最初の兆候なのだ。 　ストリックランドは妻と子供と周りの美しさに大満足している。彼は、最近までたくさんの原住民をモデルにしたが、どういうわけか彼らは彼のところに訪ねて来なくなってしまったと言う。医師がストリックランドが何の病気にかかっているのかを話すと、彼は大いにショックを受けるが、アタは身を震わせてすすり泣く――アタはその兆候を認識していて、独断で医師を迎えにやったのだ。アタの心配はストリックランドがハンセン病患者の収容所にやられてしまうのではないかということである。医師が自発的な隔離も可能だと言うと、ストリックランドは独りだけで山奥に入ることを提案する。しかし、アタはこれを許そうとしない。ストリックランドは今いる所にいるべきだし、自分は最期まで彼と一緒に残ると言ってきかない。 　ストリックランドは、自分が描いた絵を餞別だと言って医師のところに持って来る。彼はアタに、自分が死んだら、壁に描くつもりであるすべての絵もろとも家を焼くこと、そして、子供を原住民流に育てることを約束させる。続いてアタが神に祈りの言葉を捧げると、ストリックランドは言う。「わたしのために言ってくれないか……わたしの言う通りにすると……そう言ってくれれば、わたしは神に感謝する。」 ＜第 6 場＞（数年後。ロンドン、ストリックランド夫人の家の客間の片隅）

	第 1 次世界大戦中の 12 年後、有名なアメリカの美術評論家ヴァン・ブッシュ・テイラー氏のために、ストリックランド夫人が晩餐会を開いている。彼女は今や白髪になっているが、まだ粋で魅力的である。彼女の旧友たち、ジェイ夫人、リチャード・トワイニング、ローズ・ウォーターフォードも出席しているが、それぞれが寄る年波で様々に変わっている。 評論家はチャールズ・ストリックランドの伝記のために材料を集めているところで、タヒチから戻ったばかりのレスター・ファラデイに会いたがっている。ストリックランド夫人は夫を激励したことと称して、最初に結婚した時に、よく自分が夫に絵を描くように励ましたものだと言う。 ファラデイが到着すると、ストリックランドの絵の複製画集を見せられる。彼はマドンナと子供のモデルがアタとその子供であることを明かすが、その二人と画家の関係は漏らさない。彼はストリックランドが生涯最後の 2 年間に小屋の中に描いた絵――幻想的なアダムとイブのいるエデンの園の絵をアタが言われた通りなきものにしてしまったことを話す。「ストリックランドはこれが傑作であることを知っていたのでしょう。彼の望んでいたものが達成されたのです。彼の一生は完成されました。一つの世界を創り出し、それが優れていることを知りました。それから、誇りと軽蔑のあまり、それを破壊してしまったのです。」 ストリックランド夫人は最後の言葉を述べて、自分の美術と文学への共感こそが夫の成長の決め手となる要素だったのだと主張する。絵を描くこと以外では、夫はほかのみんなと全く同じ――完全に普通の人間だったと夫人は断言する。
上演歴	1925 年 9 月 24 日～（New Theatre, London）（75 回） ［1957 年（Royal Opera House, London） オペラ（Patrick Terry 脚本、John Gardner 音楽）上演］ ［2016 年 9 月 21 日～25 日 中国で『月亮和六便士（月と六ペンス）』上演（Majestic Theatre, Shanghai, China）］ ［2018 年中国のテレビで演劇版『月亮和六便士（月と六ペンス）』放送］ ［2018 年 12 月 28 日～2019 年 1 月 1 日 中国でミュージカル版『月亮和六便士（月と六ペンス）』上演］上演］
初　版	Unpublished

№32 ②	**コンスタント・ワイフ** **（3 幕・喜劇）**
原　題	The Constant Wife
梗　概	（芝居はロンドンで一流の医師が開業している.ハーレー街にあるジョン・ミドルトンの家で進行する。） ［第 1 幕］（午後、コンスタンスの客間） ［第 2 幕］（2 週間後） ［第 3 幕］（1 年後） 　コンスタンスは、外科医のジョンと結婚して 15 年、いわゆる倦怠期に入って、ジョンがモーティマー・ダーラムの妻で自分の親友マリー・ルイズと道ならぬ恋に陥っているのを知りながら、見て見ぬ振りをして済ませている。コンスタンスによれば、経済的自立なくして、夫の不品行に抗議する権利はないからだ。ところが、夫とマリー・ルイズとの関係がマリー・ルイズの夫モーティマーに知れ、彼が証拠のシガレットケースを持って来ると、コンスタンスは、それは自分がマリー・ルイズの部屋に置き忘れたものだと言って、その場を取り繕ってしまう。しかし、これは単なる犠牲的精神から出たものではなく、経済的に自立していないことからくる諦めであったから、その後室内装飾家として経済的自立が確保されると、15 年間も自分に恋し続けてきたバーナードとイタリアへ 6 週間ほど旅に出ようとする。コンスタンスによれば、夫の不貞が許され、妻の不貞が罰せられるのは、経済的理由によるのだ。経済的関係が五分五分であれば、性的関係も五分五分であるべきであり、その場合、スキャンダルが広まることと、家庭が崩壊するというリスクはあるが、夫が紳士であり、相手の男も紳士であれば、事を荒立てずに済むし、再び家庭へ帰ってくれば、家庭が崩壊する心配もない。コンスタンスはそれを実践しようとしているのだ。
執　筆	1926 年（52 歳）
上演歴	1926 年 11 月 1 日～（Ohio Theatre, Cleveland, Ohio） 1926 年 11 月 29 日～1927 年 8 月 13 日 （Maxine Elliott's Theatre, New York）（296 回） 1927 年 4 月 6 日～（Strand Theatre, London）（70 回） 1937 年 5 月 19 日～（revived by H. M. Tennent Ltd.） （Globe Theatre, London）（36 回） 1946 年 9 月 10 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors） （Arts Theatre, London）（26 回） 1946 年 10 月 9 日～20 日 （"Finden Sie, dass Constance sich richtig verhaelt?"） （Barbizon-Plaza Theatre, New York）（8 回）

	1951 年 12 月 8 日～1952 年 4 月 5 日（National Theatre, New York） （138 回） 1973 年 9 月（Albery Theatre） 1975 年 4 月 10 日～（Preview：4 回）、14 日～5 月 10 日 （Shubert Theatre, New York）（32 回） ［1973 年 9 月からここまで、主演：Ingrid Bergman］ 1994 年（directed by Peter James）（Richmond Theatre 他） 2002 年 4 月 11 日～6 月 29 日（Apollo Theatre, London） 2002 年 7 月 2 日～10 月 12 日（Lyric Theatre, London） 2002 年 11 月（revived by Everyman Theatre Company） （Everyman Palace Theatre, Cork, Ireland） 2005 年 5 月 6 日～10 月 9 日 （Royal George Theatre, Niagara-on-the-Lake, Ontario, Canada） 2005 年 5 月 27 日～（Preview：23 回）、6 月 16 日～8 月 21 日 （American Airlines Theatre, New York）（77 回） 2005 年（Minneapolis） ［2006 年トニー賞リバイバル作品賞・主演女優賞ノミネート：Lynn Redgrave］ 2006 年 6 月 6 日～9 月 9 日（Gate Theatre, Dublin, Ireland） 2007 年 5 月 24 日～6 月 10 日（Gate Theatre, Dublin, Ireland） 2007 年 12 月 7 日～2008 年 3 月 12 日 （Asolo Repertory Theatre, Sarasota, Florida） 2007 年（Square One Theatre Company） 2007 年（Charleston, SC） 2010 年 4 月 14 日～（Skirball Cultural Center, Los Angeles）（radio theatre） 2015 年 6 月 4 日（adaptation as Simantini） （Ranga Shankara, Bangalore, India） 2016 年（Gate Theatre, Dublin）［主演：Tara Blaise］ 2016 年 2 月 23 日～3 月 5 日（Archway Theatre, Horly, UK） 2016 年 3 月 9 日～12 日（Kenton Theatre, Oxfordshire, UK） 2016 年 4 月 21 日～30 日（Performing Arts Center － Snowflake Campus, Northland Pioneer College, Arizona, USA） 2016 年 6 月 21 日～10 月 3 日（Gate Theatre, Dublin, Ireland） 2016 年 8 月 26 日～27 日、9 月 1 日～3 日 （Growl Theatre, Windsor, Brisbane, Queensland, Australia）（5 回） 2016 年 9 月 30 日～10 月 16 日 （Theatrikos Theatre Company, Flagstaff, Arizona, USA） 2017 年 2 月 17 日～26 日（Theatre Macon, Georgia, USA） 2018 年 1 月 19 日～2 月 11 日（Irish Classical Theatre Company）

	（The Andrews Theatre, Buffalo, New York, USA） 2018 年 2 月 20 日～24 日（Belltable, Limerick, Ireland） 2018 年 6 月 23 日（翻案"Simantini"） （Kengal Hanumanthaih Kala Soudha, Bangalore, India） 2018 年 9 月 21 日～2018 年 10 月 21 日（DCPA Theatre Company） （Space Theatre, Denver, Colorado, USA） 2019 年 4 月 26～28 日（A Concert-Style Reading） （Asheville Community Theatre, Asheville, North Carolina, USA）
初　版	George H. Doran Company, New York（1926 年） Heinemann, London（1927 年）
翻訳書	『コンスタント・ワイフ―良妻に徹すれば―』 （2016 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳）
日　本 上演歴	1990 年『コンスタント・ワイフ』 （劇団俳優座、志賀佳世子・アルベリィ信子訳、増見利清演出） 2008 年『コンスタント・ワイフ』 （劇団俳優座、志賀佳世子・アルベリィ信子訳、高岸未朝演出）

№33	手　　紙 （3 幕）
原　題	The Letter （モームによる同名短編小説の戯曲化）
梗　概	［上演版］ （芝居はマレー半島にある農園とシンガポールで進行する。） ［第 1 幕］（クロスビーのバンガローの客間） 　マレー半島にあるゴム農園主クロスビーの妻レズリーは、夫がシンガポールへ出掛けて留守の晩、自宅でハモンドという男をピストルで射殺する。 （3 時間の経過を示すために 1 分間幕が下りる） 　レズリーは、夜遅く訪ねて来たハモンドが自分をレイプしようとしたので撃ち殺したと主張する。レズリーは一応殺人罪の容疑で未決囚として拘留されるが、独身のハモンドには女性関係でとかくの噂もあるので、近々開かれる裁判で無罪になる見通しだ。 ［第 2 幕］（シンガポールの拘置所の部屋） 　クロスビーの友人でレズリーの弁護士ジョイスは、中国人助手のオンから、事件の当日にレズリーからハモンドに宛てた、ヒステリックにハモンドの来訪を求める手紙が存在していると知らされる。 　ジョイスはレズリーに真偽を尋ねる。最初は否定していたレズリーも、その手紙が法廷に満ち出されたら死刑になる可能性があると聞かされると、手紙を書いたことを認め、自分のためではなく夫のためにその手紙を買収してくれと頼む。 　手紙の買収は法に触れる行為だとして、ジョイスも一旦は断るが、レズリーが有罪になれば、彼女を溺愛しかつ信じている友人クロスビーが立ち直れないほどのショックを受けるのは明らかなので、結局はクロスビーに詳しい説明はせずに金を出すことを承諾させる。 ［第 3 幕］ ＜第 1 場＞（シンガポールの中華街の部屋） 　ジョイスは手紙の買収に動き、オンの仲介でハモンドと同棲していた中国女から手紙を買い取る。 ＜第 2 場＞（クロスビーのバンガローの客間） 　裁判でレズリーは無罪放免になる。クロスビーは、レズリーのためにスマトラに農園を買って移住するつもりだと語る。ジョイスは、手紙の買収にクロスビーが調達できる限界の 1 万ドルかかったこと、手紙を買収しなければレズリーが死刑になる可能性があったことを告げる。クロスビーは問題の手紙を読む。 （舞台が暗くなり、また明るくなって） 　ハモンドは長年レズリーの愛人であり、事件当夜はレズリーが手紙でハモンドを呼び寄せ、別れ話を持ち出されて射殺した経緯が再現される。

	（舞台が再び暗くなり、また明るくなって） 　クロスビーはショックを受けて部屋を出て行く。レズリーはジョイスに、夫を愛してはいないが、もう一度チャンスをくれるなら、どのようなことをしてでも償うつもりだと語る。ジョイスは、愛していない人間と一緒に暮らして行くことは容易ではないが、それがレズリーの天罰だろうと言う。すると、レズリーは、夫はとても優しくて親切だし、夫への償いも自分が進んでやろうとしているのだから決して天罰ではない。自分にとっての天罰はもっと大きなもので、それは、自分が殺した男を今も心の底から愛していることだと言う。
執　筆	1926 年（52 歳）
上演歴	1927 年 2 月 24 日～（Playhouse, London）（338 回） 1927 年 9 月 26 日～12 月 1 日（Morosco Theatre, New York）（104 回） 1929 年 3 月（Théâtre de Athénée, Paris） 1995 年（Lyric Theatre, London） 2000 年 5 月 10 日～21 日（Red Room, New York） 　（Clark Gesner 翻案によるミュージカル “The Bloomers”） 2007 年（Wyndham's Theatre, London） 2009 年 7 月 25 日～8 月 18 日（The Santa Fe Opera） 　（Paul Moravec 音楽、Terry Teachout 台本によるオペラ “The Letter”）
初　版	Heinamann, London（1927 年）
翻訳書	『手紙』（2016 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳）
日 本 上演歴	2020 年『手紙』（劇団キンダースペース、原田一樹翻案・演出） ※原田一樹による上演台本は総合演劇雑誌『テアトロ』2020 年 11 月号（カモミール社）に掲載されている。

№34 ③	聖　　火 （3 幕）
原　題	The Sacred Flame
梗　概	（芝居はロンドン近郊のタブレット夫人の住まいであるガトリ邸で進行する。） ［第 1 幕］（夜） ［第 2 幕］（翌日） ［第 3 幕］（1 時間後） 　モーリスは、新型航空機の試乗中の事故で下半身麻痺になって寝たきりだが、妻ステラ、母タブレット夫人、女看護師に世話されながら、辛い運命に耐え、表面は明るく振る舞っている。そこへ、南米で農園を営む弟コリンが一時帰国する。モーリスは美しい妻を愛し、常にほがらかに振る舞って、彼女には綺麗な姿を見せてくれることだけを期待し、正常な夫婦生活が営めないことを申し訳なく感じながらも、妻の愛情だけを頼りに生きている。 　そんなある朝、モーリスが夜の間に死亡したのが分かり、大騒ぎになる。医師は心臓麻痺による自然死だとして死亡証明書に署名しようとする。ところが、モーリスを愛する看護師が抗議し、病人は殺害されたと言い出す。 　モーリスのベッド脇に睡眠薬を溶かしたコップがあったことから、死因は睡眠薬の過剰摂取だろうと推察される。人生に絶望したモーリスが自殺したという見解が出されるが、筋力のないモーリスが睡眠薬の入った瓶を取るのは不可能だ。では、誰が取って飲ませたのか。家族の中に動機を持った者はいそうにない。 　ところが、看護師が、ステラが妊娠していると言い出す。夫の子ではあり得ないわけで、ステラとコリンが深い間柄であることが発覚する。夫に知られるのを恐れて、ステラが殺害したのでは、と看護師が言う。 　ステラは否定するが、裁判になればスキャンダルになるし、医師も警察に通報せざるを得ない。この時突然、タブレット夫人は自分が犯人だと告白する。モーリスに生きるのが辛くなったら命を絶つ手段をあげると約束していたのだ。夫人はステラとコリンの関係に気づき、モーリスがそれを知ったら苦しむだろうと判断してあの世に送ったのだと告白する。 　この告白を聞いて、看護師も医師も表沙汰にしないことに協力する。夫人は、ステラとコリンの関係に理解を示し、夫婦として南米に戻ることを勧める。看護師には、共に愛したモーリスとの思い出に生きようと提案する。
執　筆	1928 年（54 歳）
上演歴	1928 年 11 月 12 日～（Belasco Theatre, Washington） 1928 年 11 月 19 日～12 月 10 日 （Henry Miller’s Theatre, New York）（24 回）

	1929 年 2 月 8 日～（Playhouse, London）（209 回） 1945 年 11 月 22 日（revived by Jack De Leon） （St. Martin's Theatre, London）（matinées） 1946 年 3 月 4 日～（revived by Jack De Leon） （Westminster Theatre, London）（evenings）（181 回） 1952 年 10 月 6 日～25 日（President Theatre, New York）（24 回） 1966 年（West End Theatre, London） 2012 年（English Touring Theatre, UK tour） 9 月 13 日～22 日（Rose Theatre Kingston） 9 月 26 日～29 日（Northern Stage） 10 月 2 日～6 日（Oxford Playhouse） 10 月 9 日～13 日（New Wolsey Ipswich） 10 月 16 日～20 日（Liverpool Playhouse） 10 月 23 日～27 日（Yvonne Arnaud Guildford） 10 月 30 日～11 月 3 日（Theatre Royal Brighton） 11 月 13 日～17 日（Nuffield Theatre Southampton） 11 月 20 日～24 日（Cambridge Arts Theatre） 2017 年 10 月 27 日～29 日（翻案"The Flame"） （adapted in Bengali by Tirthankar Chanda, translated in English by Debleena Roy） （JAGRITI, Bengaluru, India）（4 回） 2018 年 9 月 8 日（翻案"The Flame"） （adapted in Bengali by Tirthankar Chanda, translated in English by Debleena Roy） （Alliance Française, Vasanthnagar, Bangalore, India）（1 回）
初　版	Doubleday, Doran & Co, New York（1928 年） Heinemann, London（1929 年）
翻訳書	『聖火』 （1954 年、白水社、菅原卓訳、『現代世界戯曲選集　V　イギリス篇』所収） 『聖なる炎』（2015 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳） 『聖火』（2017 年、講談社文芸文庫、行方昭夫訳）
日　本 上演歴	1975 年『聖火』（劇団民藝、菅原卓訳、宇野重吉演出） 1985 年～1986 年『聖火』 （俳優座劇場プロデュース、喜志哲雄訳、末木利文演出） 1989 年『聖火』（劇団くるみ座、喜志哲雄訳、人見嘉久彦演出） 2000 年『聖火』（名古屋放送芸能家協議会、木崎裕次演出） 2012 年『聖愚者の約束 −The sacred flame−』（芝居三昧、野崎美子演出） 2018 年『神聖な焔』 （京都西陣創造集団アノニム、喜志哲雄訳、菊川徳之助演出）

	2023 年『聖なる炎』 （俳優座劇場プロデュース、小田島創志訳、小笠原響演出） ［翻案］1982 年『愛のともしび』（YTV、関功脚本、階堂昌和演出、岩下志麻主演）

№35	自　然　界　の　力 （3 幕）
原　題	The Force of Nature
執　筆	1928 年（54 歳）
上演歴	Unproduced
初　版	Unpublished

№36 ②	働　　き　　手 （3 場・喜劇）
原　題	The Breadwinner
梗　概	（芝居はロンドン郊外ゴールダーズ・グリーンにあるバトル家の客間で切れ目なく進行する。） 株式仲買人チャールズ・バトルは、第一次世界大戦に参加して生死の境をさまよったあと、地下鉄でビジネス街シティーに通うこと 12 年、ようやく一家の財を成し、おかげで家族の者は裕福な生活を送っている。まず妻のマージェリーは芸術と男に憂き身をやつし、息子のパトリックや娘のジュディーはテニスに熱中しており、パトリックが自分の車がほしいと言えば、ジュディーは服がほしいと言い、パトリックが 30 歳になるまでは毎年 500 ポンドの仕送りがほしいと言えば、ジュディーはさんざんやりたい放題やって 29 歳で死にたいと言っている。また、戦中派の人間を退屈でユーモアのセンスに欠けていると軽蔑し、人間は 40 歳で引退すべきもの、引退したら両親には年金 250 ポンドを仕送りするなどと言っている。 突然、この幸福な家庭に暗雲が襲いかかる。チャールズの得意先トミー・エイボンが自殺し、その影響で、彼の店も取引停止の危機に瀕する。もちろん、チャールズは八方手を尽くし、取引銀行の頭取アーサー・レターから多額の融資を受け、その小切手を午後 3 時までに取引所に渡せば危機を逃れるはずだ。しかし、チャールズには全く新しい世界が開かれる。つまり、彼には、自分の本来の生活を忘れ過去 12 年間世間体に囚われてこつこつ働いてきたことがばかばかしく思われ、ここで潔く破産して自由な生活に入ろうとする。彼のこの気持ちは家族や友人に理解されるはずがない。ある者は彼の気が触れたのだと思い、ある者は女がいるのだろうと疑い、何か精神的な動機があるのだろうと考える者もいる。 家族や友人たちが、あらゆる手段を使って、彼の心を翻そうと企てるが無駄になる。彼はもはや自分の家族に愛情を持っていないのだ。彼らの生活態度に根本的な不満を持ち、それが彼を退屈させていた。しかし、彼は家族を枯渇させてもいいとは思わない。それで、残された 2 万ポンドの内、まっとうに働けば生活できるように 1 万 5 千ポンドを家族に与え、自分は 5 千ポンドを持って、行商人になるべく家を出て行く。
執　筆	1930 年（56 歳）
上演歴	1930 年 9 月 30 日～（Vaudeville Theatre, London）（158 回） 1931 年 9 月 22 日～11 月 7 日（Booth Theatre, New York）（55 回） 1944 年 10 月 19 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors）（Arts Theatre, London）（30 回） 1953 年 1 月 28 日～（revived by the Arts Theatre Group of Actors）

	（Arts Theatre, London）（31 回） 2013 年 4 月 17 日～5 月 18 日 （Orange Tree Theatre, Richmond, Surrey, UK）
初　版	Heinemann, London（1930 年）
翻訳書	『生計をいとなむもの』 （1985 年、英宝社、久保田重芳訳、『スミス／生計をいとなむもの』所収） 『わが家の稼ぎ手』 （2016 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、宮川誠訳） 『働き手』 （2018 年、講談社文芸文庫、行方昭夫訳、『報いられたもの／働き手』所収）
日　本 上演歴	1988 年『THE BREADWINNER』（劇団東演、久保田重芳訳、原孝演出）

№37	五 彩 の ヴ ェ ー ル （3 幕）
原　題	The Painted Veil （Bartlett Cormack による同名長編小説の翻案）
梗　概	［第 1 幕］（香港のフェイン夫妻の家） 幕が開くと、一見舞台には誰もおらず、香港のキティー・フェインの居間を表しており、暑さを遮断するために鎧戸が閉められている。後方にほとんど衝立の陰に隠れて寝椅子がある。突然、ぎょっという叫び声が上がり、衝立の陰からチャールズ・タウンゼンドとキティーが現れる。二人は誰かがドアを開けようとしたのでびっくりしたのだが、今は鎧戸の 1 つのハンドルが回るのを見ている。タウンゼンドはキティーに、あれは中国人の召使だったに違いないと言って安心させるが、キティーは直観的にあれは夫だったと思う。キティーが服を着に行っている間、タウンゼンドは細菌研究所に電話してウォルター・フェインが勤務中かどうか尋ね、彼が外出中であることを知る。 愛人に飲み物を注ぎながら、キティーは二人とも自由の身であった場合の結婚の可能性について彼の考えを探る。彼はその問いをはぐらかすと、すぐに立ち去る。キティーの母ガースティン夫人がベランダで見つけた本を持って入って来る。キティーが召使に尋ねると、本を置いたのは夫であり、夫は午後本当に家にいたと聞かされる。母親は、タウンゼンドの親切さのせいで人目につくようになっているから、彼とはあまり会わない方がいいと提案するが、キティーはその問題を軽く扱うふうを装う。 フェインが入って来ると、キティーは彼の表情から彼がすべてを知っていることを悟る。彼は二者択一を迫る。彼は梅譚府での仕事を提案されたのだが、そこではコレラが猛威をふるっている――彼と一緒にそこへ行くか、それともタウンゼンドを共同被告人として彼の方から彼女と離婚するか。彼女の方から彼と離婚するのをよしとする条件は一つだけ――タウンゼンドが自由になったら彼女と結婚することをあらかじめ約束するという条件だ。彼は（キティーの名前で）タウンゼンドを呼びにやっておいたので、あとはタウンゼンド次第だと二人は思う。 最初キティーはその時がきたことでほぼ安堵している。しかし、タウンゼンドがスキャンダルに立ち向かう気が少しもなく、コレラが横行する町で彼女が命を危険にさらすことでスキャンダルを避けられるという提案にとびつこうとすることに気づくと、彼に愛想が尽きる。悲嘆に暮れ、きっと死ぬことになるだろうと思いながら、彼女は夫と一緒に行くことに同意する。 ［第 2 幕］ ＜第 1 場＞（梅譚府の宣教師の家） 約 3 週間後、フェイン夫妻は梅譚府の最近死んだ宣教師（コレラの犠牲者）のバンガローに落ち着いている。キティーは副長官ウォディントンの訪問を

受ける。彼は大酒飲みの皮肉屋だが、近所の修道院の修道女たちと仲の良い友達である。修道院長と一人の修道女も訪ねて来る。彼女たちがキティーに中国人の孤児たちの中での仕事について話すと、キティーが恐怖を感じていて不幸であることに気づいているウォディントンは、彼女が修道院に行って手助けすれば気が晴れるかもしれないと提案する。
この場の終わりでは、キティーと夫が座って中国人のボーイが出したサラダを食べている。「こんな状況だから、生の食べ物を食べたら死んでも不思議じゃないね」とウォルターが言う。「それでいいと思ったわ」とキティーが言い返す。
＜第 2 場＞（修道院）
　キティーが修道院で中国人の子供たちと遊んでいると、ウォディントンが訪ねて来る。夜の間に満州人の愛人が死んでしまったのだが、皮肉屋らしく冷静で、自分の無頓着は――死んだ女から「道」だと教わった――中国の宗教の一つである「タオ」にあると言う。「それをアヘンに求める者もいれば、髪に求める者もいるし、ウイスキーに求める者も、愛に求める者もいる。どれも同じ「道」だが、どこへも繋がっていない」
　キティーは突然気を失って自分も死ぬのかと思うが、修道女たちが安心させる……コレラではなく、妊娠の最初の兆候である。夫が呼ばれ、「わたしが父親か？」と尋ねると、彼女は「分からない」と答えざるを得ない。夫は彼女を香港に送り返そうと提案する。こまごまと話す中で、彼女は、夫が彼女をたてまつっていたからといって、彼女が夫の理想に添えなかったという理由だけで責める権利はないと言う。
　フェインが患者のために呼び出されると、思いがけなくチャールズ・タウンゼンドが現れる……。彼は梅譚府の白人居住者の護送を手当てするために派遣されたのだった。彼の熱烈な求愛がキティーの最初の抵抗に打ち勝つが、ウォディントンが突然その場に入って来てちょうど間に合う。
［第 3 幕］
＜第 1 場＞（梅譚府の宣教師の家）
　ウォディントンが来て、キティーに夫が病気になったことを告げ、すぐ後にフェインがストレッチャーにのせられて運ばれて来る。彼女は夫に許しを乞うが、夫はかなり弱っているらしく反応がない。ふと、彼女は夫が死んでいることに気づく。副長官は彼の言う中国の哲学で彼女を慰め、修道院長が来て彼女に香港に戻る旅支度をするよう忠告する。今や夫が死んだのだから、これ以上危険な場所に留まる理由はないし、生まれてくる子供のためにも自分の身に気をつけなければならないというのだ。しかしながら、修道女たち自身は梅譚府に残り、運にまかせてやってみると言ってきかない。
＜第 2 場＞（香港ホテルの居室）
　香港に戻り、キティーはタウンゼンドの家に身を寄せている。ドロシー・タウンゼンド――見た目の素晴らしい中年女――は、キティーの英雄的な行

	為に称賛の気持ちを表して、彼女のことを見栄っ張りで軽薄だと思っていたことを詫びる。 　その後、タウンゼンドが入って来て、またキティーを口説くが、今度は頑なに拒絶される。彼女は彼に、彼の振る舞いは憶病で卑劣だったこと、今でもすべてのことをおいても彼を愛しているが故に自分を軽蔑していることを告げる。何があろうとも、ひょっとしたら彼のものかもしれない子供には関係を持たせないつもりである。 　彼女はウォディントンにイギリス行きの船を調べてくれと頼んであったが、彼は訪ねて来ると反対する……。二人とも自由だし、来た道は違えども、人生を台なしにしてしまったのだから、どうして結婚して「一緒に事態を収拾」しようとしてはいけないのか？　彼女は「名字しか知らない男と婚約するなんて随分おかしな話だけど」と言いながら同意する。彼が名前は「クラレンス」だよとすまなそうに告白して幕が下りる。
上演歴	1931 年 9 月 19 日～（Playhouse, London）（129 回）
初　版	Unpublished

№38 ③	**報いられたもの** **（3 幕）**
原　題	For Services Rendered
梗　概	（芝居は小さな田舎町ランブルストンのアーズリー家で進行する。） ［第 1 幕］（秋の午後、庭） ［第 2 幕］（数日後の昼下がり、食事室） ［第 3 幕］（翌日、客間） 　田舎の弁護士アーズリー夫妻には一男三女があり、長男シドニーは第一次世界大戦に従軍して盲目となっている。長女のイーヴァも大戦のため婚約者を失い、39 歳のオールドミスになっている。次女エセルは戦時中羽振りのよかった将校ハワードと結婚したが、終戦後の彼は本来の農業にかえり、酒と女に気をまぎらせながら、うだつのあがらぬ生活を送っている。末娘のロイスは姉たちの生活を見て、戦後派的な現実主義の考えを持ち、妻のある年配の戦争成金ウィルフレッドから贈物を受けている。イーヴァはもと海軍軍人のコリーという男に好意を寄せているが、彼は事業に失敗し、軍人上がりで法律に暗いため、刑法上の犯罪になることに気づかなかったが、海軍士官の位階を剥奪されることを知って、絶望のあまりピストル自殺をとげる。イーヴァは、父をはじめ一族が彼を援助しなかったための悲劇だと信じこみ、ついに発狂してしまう。アーズリー夫人は命取りの病気にかかって余命いくばくもない。ロイスはついにウィルフレッドの誘惑に屈し、家族のとめるのをふり切って、出て行こうとしている。何も知らぬアーズリーは、「自分のうちの暖炉のそばで、家族にかこまれてお茶を飲むのは、実にいいものだ」と、わが身の幸せを祝福する。その言葉が終わるか終らないかのうちに、発狂したイーヴァがイギリス国歌を歌いだすと、ほかの者は化石のようになり、恐怖に打たれた驚きでイーヴァを凝視する。彼女が歌い終わると、ロイスは小さな叫び声をあげ、急いで部屋から出て行く。
執　筆	1932 年（58 歳）
上演歴	1932 年 11 月 1 日～12 月 17 日（Globe Theatre, London） 1933 年 1 月 2 日～（Queen’s Theatre, London）（78 回） 1933 年 4 月 12 日～29 日（Booth Theatre, New York）（21 回） 1946 年 7 月 2 日～（revived by Peter Cotes） （New Lindsey Theatre, London）（40 回） 1959 年 2 月 18 日 “A királyért…”（Petőfi Színház, Hungary） 1974 年（Northcott Theatre, Exeter, Devon, UK） 1979 年（Royal National Theatre, London） 1993 年（Old Vic Theatre, London） 1993 年（Salisbury Playhouse, Salisbury, Wiltshire, UK）

	2007 年 3 月 7 日～4 月 14 日 （Watermill Theatre, Bagnor, Newbury, Berkshire, UK） 2011 年（Union Theatre, London） 2014 年 10 月 6 日～11 日（Lace Market Theatre, Nottingham, UK） 2015 年 5 月 8 日～10 日 （adaptation as Khub Kacher (Very Close) in Bengali） （Jagriti Theatre, Whitefield, Bangalore, India） 2015 年 7 月 31 日～9 月 5 日（Chichester Festival Theatre） （Minerva Theatre, Chichester, UK） 2017 年 6 月 30 日～7 月 1 日 （The Headgate Theatre, Colchester, Essex, UK） 2018 年 9 月 15 日、17 日～22 日（Chesil Theatre, Winchester） 2018 年 11 月 2 日～4 日、6 日～10 日（Playhouse Theatre, London）（8 回） 2019 年 1 月 22 日～26 日（Next Stage Theatre Company） （Mission Theatre, Bath, Somerset, UK）（6 回） 2019 年 4 月 19 日～27 日（The Norwich Players） （Maddermarket Theatre, Norwich, Norfolk, UK） 2019 年 5 月 19 日～7 月 6 日（Griffin Theatre Company） （Den Theatre, Chicago）（Previews 5 回, Regular Run 24 回） 2019 年 9 月 4 日～10 月 5 日（Jermyn Street Theatre, London）（37 回）
初　版	Heinemann, London（1932 年）
翻訳書	『むくいられたもの』（1955 年、新潮社、木下順二訳、 『サマセット・モーム全集 22 戯曲集Ⅱシェピー』所収） 『報いられたもの』（2018 年、講談社文芸文庫、行方昭夫訳、 『報いられたもの／働き手』所収）
日　本 上演歴	1966 年『報いられたもの』（劇団民藝、木下順二訳、宇野重吉演出） 2000 年『アーズリー家の三姉妹』（劇団俳優座、木下順二訳、原田一樹演出） 2023 年『報われし者のために』 （劇団キンダースペース、原田一樹翻訳・翻案・演出）

№39	仮　面　と　素　顔 （3 幕）
原　題	The Mask and the Face （ルイージ・キアレッリ『仮面と素顔』の翻訳）
梗　概	［ルイージ・キアレッリによる原作の梗概］ ［第 1 幕］（コモ湖湖畔のグラツィエ邸の部屋・夜） 　コモ湖を見下ろす邸で、パオロ・グラツィア伯爵と魅力的な妻サビーナが友人たちを夜会に招いてもてなしている。その中には以下の面々がいる。皮肉屋で哲学に通じた初老の銀行家シリーロ・ザノッティ。彼の若い妻エリサが彫刻家ジョルジオ・アラマーリといちゃついている。独身の弁護士ルチアーノ・スピーナはマルタ・セッタと婚約しているが、露骨にサビーナに視線を注いでいる。地方判事のマルコ・ミリオッティ。ピエロ・プッチはザノッティの若い姪ワンダ・セレーニに惚れている。 　駆け落ちしているアメリカ人のカップルが湖で歌っているのが聞こえると、グラツィア伯爵は女のお人好しな夫に対して軽蔑を示す。不貞を許す男はバカを見ることになり、自殺する以外に開かれている道はないと伯爵は言い放つ。自分がそういう状況だったら、躊躇なく妻を殺すだろう。グラッツィアがポーカーをやるメンバーを集めている間、ルチアーノはサビーナに、バルコニーのドアを開けたままにしてあるかどうかをそっと尋ねる。サビーナは「開けてあるわ」と言うが、気をつけてくれと頼む。 　マルタはどうにかルチアーノが独りのところを捕まえて、結婚式の日取りを遅らせたことを責める。ルチアーノは遅くなったが近所の友人を訪問しなければならないという理由で出掛けるが、自宅でマルタに会うのに間に合うように戻って来ることを約束する。サビーナもまた、眠くなったふりをして、客たちにお休みを言う。二人が通じ合っていることを疑って、マルタはサビーナに自分の部屋に来て話そうと誘うが、断固として断られる。 　一方、ジョルジオとエリサの戯れをザノッティが偶然耳にする。ザノッティが眠いふりをしている時に、妻のエリサは常に優しいだけの男と結婚するのは何と退屈なことか……グラツィア伯爵みたいな嫉妬深い夫にびくびくする方がいいと不満を言う。ポーカーのメンバーに若い人が二人入ると、伯爵がザノッティに話をしに来るが、ザノッティは結婚と女についての哲学を語る。 　突然、マルタがテラスから興奮して入って来る。マルタは何が問題なのか全く言おうとしないが、グラツィアは疑念を激化させ、妻の部屋に突進して鍵のかかったドアを叩く。ほかの男たちは止めようとするが、グラツィアが乱入すると、部屋には誰もいない。グラツィアはかんかんに怒って戻って来ると、サビーナに逃げる時間を与えてしまったと言って他の連中を非難するが、嘲笑を一身に集めているように感じて、ぜひとも独りにしてくれと言う。 　みんなが行ってしまうと、サビーナが静かに入って来て立ち止まり、グラ

ツィアを見る。グラツィアはサビーナの首を絞めて殺そうとするが、遂げることができない。すると、サビーナはミリオッティがグラツィアから取り上げたばかりのピストルを手渡すが、またしてもグラツィアにはそれを使う決断ができない。サビーナはもう自分が安全だと分かって、グラツィアに今までの仮面を脱いで立派な言葉遣いや態度に縛られるのをやめ、自分に正直になるよう話す。恐らくそうすれば、まだ二人の結婚生活はうまくやっていけるのだ。しかしながら、グラツィアはまだ嘲笑されることに対する恐怖に支配されている。グラツィアはサビーナが外国に行って名前を替え、二度と戻って来るなと言ってきかない。

サビーナが自室に行くと、ルチアーノが戻って来て、何気ないふうを装い、みんなが行ってしまったことに驚いたふりをする。伯爵はルチアーノに、妻が男と寝室にいるのを見つけたから、湖に落として溺れさせたと話す。ルチアーノはショックを受けるが、伯爵が自分を疑っていないことに気づいて多少安心する。ルチアーノはサビーナの振る舞いが破廉恥であることに同感し、殺人事件の裁判ではグラツィアを弁護することを承諾する。二人が行ってしまうと、サビーナがこっそり戻って来て、悲しげに言う。「わたしが死んでから 1 時間しか経っていないのに、もう恋人はわたしのことを破廉恥だと言う。」

［第 2 幕］（6 か月後）

数か月後、グラツィアの召使たちが無罪放免で意気揚々と帰って来る彼を歓迎するために集まっている。部屋は花とお祝いのメッセージでいっぱいであり、遠くで町の楽団が演奏しているのが聞こえる。

伯爵は大騒ぎにいささかばつの悪い思いである。伯爵は、元婚約者のピエロに全面的に承諾を得て、今やワンダと結婚しているマルコに温かく迎えられる。ザノッティと妻も伯爵が戻ったのを見て喜んでいる――エリサは実際、伯爵に艶めかしく言い寄るが、きっぱりとはねつけられる。ピエロはグラツィアに、市長が公式に伯爵を歓迎し、敬意を表して宴会を催すつもりだと話す。伯爵は怒り狂うが、ザノッティはこれは名声があることの欠点のうちで小さい方だとあっさり言う。これを避ける唯一の方法は出て行ってしまうことだ。さらに、ザノッティは、グラツィアが嘲笑されることを恐れた時に弱点を見せたと言う。グラツィアは独りだけの時に妻の不貞を見つけたのか、妻を殺していないのは確かだ。

今は結婚しているルチアーノとマルタが入って来る。若い弁護士ルチアーノは弁護の報酬を受け取るのを拒むが、グラツィアはもう借りがあるのは望まないと言う。グラツィアは正義からではなく同情から無罪放免にしてくれたのかと怒る。

突然、外で騒ぎが起きる。みんながテラスに行って外を見る。つまるところ、召使のアンドレアが猟師が湖でサビーナの死体……というか、とにかく識別はできないがきっとサビーナに違いない女の死体を見つけたと言いに来

る。みんなは死体を邸に運び込んでサビーナのものだった部屋に横たえる。伯爵は死体を見に行って戻ると、死体は自分の妻だと断言する。

伯爵が独りでいると、ベールを掛けた女が静かにそっと部屋に入って来る。それがサビーナだと分かると、伯爵は激怒する。伯爵はサビーナに何をしているのかと尋ね、お前の死体は隣の部屋にあるんだ――暗くなったらすぐ出て行けと言う。そうこうするうちに、死体を見て圧倒されたルチアーノが入って来たとたん、伯爵はサビーナを隠す。ルチアーノはあの晩サビーナの部屋にいたのでこの悲劇に責任を感じていると告白する。グラツィアはルチアーノを非難する言葉で打ちのめして追い払う。すべてを耳にして、サビーナは夫がまだ自分を愛しており、出て行かせるつもりがないことを確信して戻って来る。

［第 3 幕］（翌日の午後遅い時間）

主要な人物がほかの客たちと一緒に葬式のために集まっている。深く悲しんでいる中、グラツィアが明るい色のスーツを着て極めて元気そうに入って来ると、みんなはショックを受ける。しかし、みんなは悲しみのせいでグラツィアが放心状態なのだという理由で許す。

ザノッティと、愛人のジョルジオに捨てられたザノッティの妻の関係が説明される。二人は許して忘れること、良い友達のままでいることに同意する。

みんなが出て行ってしまうと、サビーナが実に洗練された明るい色の衣装を着て登場し、囚人の生活にはうんざりだと言う。サビーナはグラツィアに、友人たちの意見が本当にそれほど重要なのかどうか尋ねる。グラツィアは友人たちをあまり好きではないのだから、どうして自分と妻の幸せを犠牲にして友人たちに捧げなければならないのか？　グラツィアはまだサビーナを愛していることを認めるが、当分の間、隠れているようにと言う。そうこうしているうちに、ルチアーノが葬式に行くためにグラツィアを呼びに来ると、サビーナが足音を夫の足音と間違えて話をしに出て来る。幽霊だと思い、ルチアーノは最初びっくりする。サビーナは紙を拾い上げて、ルチアーノが弁論で自分を守るためにサビーナについて言ったひどいことを全部軽蔑しながら読み上げる。サビーナはどっと笑い出して背を向ける。ルチアーノはうろたえたままあわてて走って出て行く。

ほかの連中が戻って来てサビーナがいることに気づく。みんなはグラツィアに説明を求めて食ってかかる。ザノッティが最初に気を取り直す。ほかの連中が相変わらず混乱し憤慨している間に、ザノッティはどっと笑い出す。ミリオッティは伯爵に、実在しない犯罪を自白したという理由で法律違反になるぞと脅す。「何だと？」とグラツィアは叫ぶ。「わたしがサビーナを殺すと無罪放免で……。殺さないと監獄行きだなんて！　意味が分からん。」

間の悪いことに、地方判事は、葬式は中止しなければならず、死体について新たに検死の審問を開かなければいけなくなることを予見する。しかしながら、みんなは葬儀を中断せずに最後まで執り行うことを決め、ザノッティ

	は、スキャンダルが忘れ去られるまで、グラツィアはサビーナを外国に連れて行った方がいいと提案する。グラツィアとサビーナが抱き合う中、葬式の行進曲が遠ざかって行き次第に静かになる。
執　筆	1933 年（59 歳）
上演歴	1933 年 5 月 1 日～（Colonial Theatre, Boston, Massachusetts） 1933 年 5 月 8 日～6 月 10 日（Guild Theatre, New York）（40 回）
初　版	Unpublished

№40 ③	シ　ェ　ピ　ー （3 幕）
原　題	Sheppey
梗　概	［第 1 幕］（ロンドン西部、ジャーミン街にあるブラッドレイ理髪店） 理髪師シェピーは客や店のスタッフに、午前中窃盗犯クーパーを捕まえて裁判所に行っていたこと、貧困が理由で起きる犯罪が多いことを話す。シェピーが宝くじで 8,500 ポンドの賞金を当てたことが知らされる。客が帰ると、お祝いのため、シェピーは行きつけのパブにシャンパンを買いに行き、そこで知り合っていた売春婦ベシーを連れて戻る。みんなで乾杯してスタッフは帰り、シェピーとベシーだけが残る。突然、シェピーは気分が悪くなって倒れてしまい、ベシーが送って帰ることになる。 ［第 2 幕］（1 週間後、キャンバウェルにあるシェピーの家の居間） シェピーが倒れた原因は脳溢血であり、この 1 週間シェピーは仕事を休み、聖書を読んでは頻繁に出掛け、理髪店主ブラッドレイに退職の意向を伝えてある。ブラッドレイが見舞いに来て、シェピーに共同経営者になってもらいたいと提案するが、シェピーは断ってしまう。この話を聞いた妻、娘、娘の婚約者は、シェピーを翻意させようとするが、シェピーは聖書の言葉「汝の持てる物をことごとく売りて、貧しき者に分ち与えよ」に従って賞金を「貧民救済」に使うと言い出す。行き場のないベシーとクーパーがシェピーの誘いに応じて訪ねて来ると、シェピーは二人に食事を与えて泊めてやるのだと家族に言う。 ［第 3 幕］（数日後、キャンバウェルにあるシェピーの家の居間） 主治医ジャーヴィスの所で精神科医と面談させられていたシェピーが帰って来ると、クーパーとベシーは以前の生活に戻りたいと言って出て行く。ジャーヴィスが訪ねて来て、シェピーは心臓が弱っていると言って、療養所に行くことを勧めるが、シェピーは拒絶する。シェピーが席を外している間に、ジャーヴィスは精神科医の診断を受けて、正気な人間は貧乏人から金を取り上げるものだ、シェピーは精神病だから精神病院に監禁するべきだと家族に言う。シェピーがもらう賞金を当てにしている娘と婚約者は喜ぶが、若い頃読んだ聖書を覚えている妻はシェピーの考えに共鳴する。妻は夕食のためにシェピーの好物を買いに出掛け、シェピーは昼寝する。（2 時間の経過を示すため舞台は暗くなり、再び明るくなると夜になっている）ベシーの姿をした死神が現れ、シェピーは逝ってしまう。
執　筆	1933 年（59 歳）
上演歴	1933 年 9 月 14 日～（Wyndham’s Theatre, London）（83 回） 1944 年 4 月 18 日～5 月 6 日（Playhouse Theatre, New York）（23 回） 2016 年 11 月 24 日～2017 年 1 月 7 日

	（Orange Tree Theatre, Richmond, Surrey, UK） 2018 年 4 月 20 日～29 日（翻案"Treasures in Heaven"） （Morning Star Theater, Milwaukee, Wisconsin, USA）
初　版	Heinemann, London（1933 年）
翻訳書	『シェピー』（1955 年、新潮社、瀬口城一郎訳、 『サマセット・モーム全集 22 戯曲集Ⅱ シェピー』所収）

№41	ア　シ　ェ　ン　デ　ン
原　題	Ashenden （Gerge Cambell Dixon による同名短編集の翻案）
執　筆	1933 年
上演歴	Unproduced
初　版	Unpublished

№42	劇　　場 （3 幕・喜劇）
原　題	Theatre（英上演名：Larger than Life） （Guy Bolton による同名長編小説の翻案）
梗　概	（アメリカ上演版） ［第 1 幕］ ＜第 1 場＞（6 月の午後、ハムステッドにあるジューリアの家の居間） 　ハムステッドにある自宅の素敵な居間で、イギリス第一線の女優ジューリア・ランバート――40 歳だが、魅力的である――が、新聞カメラマンのパーキス氏のためにポーズをとっている。夫で一流の男マイケル・ゴスリンが一団をなして優雅に運動着を着て庭から入って来る。今度の芝居は『ローラ・モンテス』をやるのかというパーキスの質問に対して、マイケルはきっぱりと「違う！」と答える。カメラマンが行ってしまうと、これが原因で激しい言い争いになる――マイケルはジューリアには二人の男を魅了して決闘させるような 19 歳の娘は演じられっこないと言い張り、ジューリアは絶対演じられると断言する。 　彼らの 17 歳の息子ロジャーは、カメラマンを巧みにかわしていたのだが、父親の車を借りるために入って来る。ジューリアはみんなに息子は 14 歳だと話しているのだが、突然息子が痛ましくも大人っぽく見えることに気づく。 　若い会計士トム・フェネルが仕事のことでマイケルを訪ねて来ていて、初めてプライベートの姿を見るジューリアに挨拶する。ジューリアはトムから彼が未婚でかつてシェリダンが住んでいた家に住んでいることを引き出す。するとすぐに、彼女は喜んでそこにお邪魔するわと言う。この会話を面白く思ったマイケルは、これを彼女には 19 歳の妖婦は演じられっこないと言った彼の挑戦的な言葉に対する抵抗だと解釈する。 　次なる訪問者はドリー・ド・ヴリーズである――投資的な意味で彼らの芝居に興味を持っている金持ちの女である。彼女は彼らが『ローラ・モンテス』を上演することを熱望しており、マイケルの反対を無視する。マイケルがトムと経理の打ち合わせをするために出て行くと、ジューリアは、マイケルがほかの女に毛皮のコートを買ってやったためにドリーが嫉妬していることに気づく。ドリーには、ジューリアが夫の浮気をどうしてそんなに冷静に受け止められるのか不思議でならない。ジューリアは、マイケルがもはや夫ではないという驚くべき情報を自分から提供する。離婚して 2 年になるが、イギリス国民のために、いまだに「仲のよい夫婦」という作り話を続けているのだ。 　上品な中年の友人チャールズ・テンパリー卿が、ジューリアからの手紙に応じて立ち寄る。ジューリアは『ローラ・モンテス』の問題について彼の助言を求めているのだ。彼は、ジューリアがその役には老け過ぎだとか、性的魅力が足りないなどと言うのはばかげていると請け合う。

	ジューリアは、自分の車を持っているドリーにマイケルを代役リハーサルの場所で降ろすように提案し、何とかドリーを外させている間に、ドリーがマイケルを恋していることをマイケルに告げる。昼寝をするから静かにしてほしいというふりをしながら、ジューリアは二人を行かせると、メードのイーヴィをトム・フェネルの迎えに行かせる。ジューリアはトムに『北極光』で演じたラブシーンを覚えているか尋ねると、その場面をやり始める。トムがきっかけとなるセリフを実にうまく始め、キスするのと同時に舞台の照明が消える。 ＜第 2 場＞（7 月初旬の夜、同じくハムステッドにあるジューリアの家の居間） 両親が劇場から戻って来るのを待っている間、ロジャーが執事のジェボンズとおしゃべりしながら、ゴルフの腕を上げるのを手伝ってくれるトム・フェネルのことが好きだと話す。マイケルが入って来ると、すぐ後にドリー・ド・ヴリーズが『ローラ・モンテス』の改訂版を持って来て、ジューリアのフェネルとの関係が噂になっていると話す。これを聞いても、自分の魅力がそこなわれていないというジューリアの側の気持ちの表われにすぎないといまだに思っているマイケルの気持ちは動じない。ちょっといちゃついてから、ドリーは何年もの間マイケルを愛していたことを告白する。マイケルがドリーの告白をあっさりと率直に受け止めて仲良く一緒に座っていると、ジューリアが突然現れる。ジューリアがトムを連れて戻って来たので、ロジャーはトムを捕まえてゴルフの話をする。ジューリアがトムとジルバを踊りに行くことを決めると、マイケルはうんざりする。 最初の内、ジューリアは新しい台本に興味を示そうとしないが、導入部が書き換えられてヒロインの歳が 25 歳に上げられているのを知ると再び興味を示す。マイケルとドリーが夕食を食べに出掛けている間、ジューリアはトムといちゃつき始めるが、ロジャーが邪魔をする。興ざめしてしまい、また二人だけになると、トムはジューリアがいろいろとデートの提案をするのを断わり、とうとうジューリアの見せかけの感情は何の役にも立たないことをずけずけと言ってしまう。ジューリアは本心だと誓い、その証拠に、本読みをやめて一緒に出掛けようと持ちかける。二人はそっと出て行き、ドリーのタクシーに乗る。ジューリアが台本を持ったまま出掛けてしまったことに気づくと、マイケルは憤慨する。しかし、ドリーが、マイケルはもはやジューリアと結婚していないのだから、腹を立てる権利はないのだと指摘する。 ［第 2 幕］（8 月、日曜日の夜、夕食後、同じくハムステッドにあるジューリアの家の居間） イーヴィがトム・フェネルのアパートに電話でメッセージを伝えるのをマイケルが立ち聞きする。マイケルが怒り冷めやらぬ中、ドリーが入って来てジューリアの浮気について話し合う。マイケルはジューリアが「薄っぺらな事務員に食い物にされている」のを知って怒り狂う。ドリーはマイケルを慰

	める。とその時、玄関のベルが鳴るのが聞こえて、トムが下に来ているのが分かり、二人は書斎へ入って行く。 　トムは、美しい若手の女優エイヴィス・クライトンをジューリアに紹介するために連れて来たのだ。二人を案内するジェボンズに、トムはエイヴィスのことを「将来のスター」だと言う。純真さに欠けるエイヴィスはトムに、ジューリア・ランバートには自分のことをそんなふうに言わないよう、そして、望んでいる役を手に入れるまではジューリアとの情の関係を断たないよう忠告する。二人が抱き合っていると、ロジャーが部屋に入って来る。トムはロジャーに母親には言わないよう約束させる。 　ジューリアがイブニングドレスを着てチャールズ・テンパリー卿と一緒に入って来ると、トムはエイヴィスのことを、田舎の別々の知り合いと週末を過ごした後、車に乗せてロンドンまで戻って来た友人として紹介する。トムはジューリアにエイヴィスに新しい芝居の純情娘の役を考えてもらえないかと尋ねる。いささか驚いて、ジューリアは、キャスティングをするのは夫だからと言って、マイケルを見つけに二人を行かせる。 　一方、ジューリアとチャールズ卿はこの新たな展開について話し合う。チャールズ卿はトムが週末のことで嘘をついていると指摘する――トムが泊まっていたと言うデモラント家の人たちは、ライチョウ狩りをするためにスコットランドにいるのは間違いないというのだ。内線電話で、ジューリアは執事にトム・フェネルのゴルフクラブのことでデラモント家に電話でメッセージを伝えるよう指示する。二人が回答を待っている間、チャールズ卿はジューリアにゴシップになるからその青年に会うのを控えるよう忠告する。ジェボンズがメッセージを持って来て、デモラント卿がスコットランドにいることが確かになる。トムが（エイヴィスをマイケルのところに置いて）戻って来ると、ジューリアはトムが嘘をついたことを非難し、トムと例の娘は二人とも本当は同じ家で週末を過ごしていたことを認めさせる。トムはジューリアに非難されるいわれはないと言い返す――トムは、ジューリアが彼に対して単に魅了する力を発揮しているだけだということを、ジューリアの夫を通じてすっかり知っていたのだ。 　マイケルが入って来ると、ジューリアはマイケルが『ローラ・モンテス』の純情娘の役を例の娘と契約するように自ら提案する。マイケルは危険だと警告する――エイヴィスの演技スタイルはジューリアのコピーであり、若々しく、溌剌として、すこぶる美しいからだ。この言葉に苛立って、ジューリアはエイヴィスがその役をやるべきだと言い張る――マイケルはそれをトムのジューリアに対する影響力のせいだと思う。これが新たな論争を巻き起こして、マイケルはトムのことをジューリアの「男妾」とみなし、ジューリアもまたマイケルに、もう結婚していないのだから、わたしを所有する権利はないと言う。ドリーがマイケルは自分と結婚して劇場を去るつもりだという知らせを持って間に入る。二人はヨットのクルーズに出掛け、『ローラ・モン

テス』の上演をジューリア独りに任せようと決心する。これがジューリアのヒステリーの大場面のきっかけとなり、ジューリアはマイケルに、共に分かち合ってきたことをすっかり思い出してわたしをがっかりさせないでと懇願する。感動することなく、マイケルはジューリアに「劇団員になって巡業するのはやめておけ」と言って出て行く。

ロジャーは母親が泣きぬれているのを見つけ、初めて両親が離婚していること、マイケルが自分たちを置いて行ったことを知る。彼の反応は、子供の頃から生活してきた見せかけと演技の環境に対する不快感である。ジューリアが気を取り直して『ローラ・モンテス』をどう演じるかイーヴィと議論を始めている間に、ロジャーは冷ややかにお休みの挨拶をして出て行く。

［第 3 幕］

＜第 1 場＞（9 月の夕方、シドンズ劇場のジューリアの楽屋）

『ローラ・モンテス』のリハーサルの間に、ジューリアに預金残高を見せて、かなり借り越していると警告するために、トムが楽屋に来ている。しかし、舞台主任がジューリアは忙しいから邪魔しないでくれと言う。イーヴィがトムは最近自分たちの生活から随分離れてしまったと言うと、トムはエイヴィスを楽屋に訪ねるために出て行く。

警備部長（守衛）がイーヴィに、マイケル・ゴスリンがもう自宅には住んでいないというニュースを伝える新聞を持って来る。

大道具係と電気係が出す騒音でリハーサルができずに気持ちの乱れたジューリアが入って来る。ジューリアは警備部長を楽屋から追い出し、時間が超過すると費用が大きくかさむと舞台主任が警告するのを聞き入れない。ジューリアはイーヴィに、自分を苦境から救い出すため、チャールズ卿にマイケルを連れ出すように頼んだことを打ち明ける。

トムはジューリアに当座借越に必要な種類にサインさせるが、ジューリアの楽屋にいるところを今や両親の別居の直接の原因としてトムを嫌っているロジャーに見つかってしまう。若いロジャーは、あらゆるゴシップにうんざりだから、ケンブリッジを退学したいと言う。

チャールズとドリーが悪い知らせを持って来る。マイケルは劇場に立ち寄るのを拒否したのだった。ドリーはジューリアの策略をまたマイケルを取り戻すための企てだと解釈していたのだ。ジューリアは、夫としてのマイケルに興味があるのではなく、芝居をまとめるために必要なだけだと答える。もう一度、チャールズがマイケルと話をしに行く。

独り取り残されて、ジューリアはわっと泣き出す。ロジャーが戻って来て、ジューリアが本当に取り乱しているのを初めて目の当たりにすると、明らかに手に負えない芝居は放り出して夕食に出ようと言う。ジューリアが奥の間で身支度をしている間に、警備部長がイーヴィのためにギネスビールを持って来る。母親は芝居を諦めたとロジャーが言うと、警備部長は聞こえよがしに声を大にして言う。「いや、そんなはずはない、彼女は決して辞めないだろ

う。辞められっこない……。彼女は本当のスターなのだから。」彼女には「ガッツ」があると警備部長は公然と言う。ヘンリー・アービングやほかの大俳優たちのように、彼女は死ぬまで続けるだろうというのだ。

＜第 2 場＞（2 週間後、同じくシドンズ劇場のジューリアの楽屋）

『ローラ・モンテス』の初日の夜。芝居がどうなっているか聞く言い訳として、警備部長はジューリアの楽屋に花を持って来続ける。警備部長とイーヴィは「退場する時の歓声」を聞いて成功のようだと判断し、ジューリアも舞台から戻って来ると、浮き浮きしている。

ジューリアは、主役を食おうとした罰として、まんまとエイヴィス・クライトンの演技を食ってしまったところだった。かんかんに怒ったエイヴィスが、説明を求めにジューリアの楽屋に飛び込んで来ると、ジューリアはエイヴィスがただで好き勝手に彼氏を自分のものにする訳にはいかないということを簡潔ながらも含蓄を込めて言う。「でも、わたしと観客の間には絶対に来ようとしないで。それについては、わたしはいくらでも意地悪になれるのよ。」

ジューリアが舞台に戻ってしまうと、マイケルがクチナシの花を持って現れ、イーヴィに話しかける。マイケルは初日の夜の「取り残されたような」気分が好きではないのだ。第 2 幕の幕が予想以上に早く下りて、見られたくないマイケルが、逃げることもできず、奥の間に隠れたとたんジューリアが戻って来る。マイケルは、ジューリアがイーヴィにマイケルの代役のブルース・コルマールに舞台への呼び戻しの声が送られているのをマイケルが聞くことができたらいいのにと言うのを聞く。「そうすればマイケルも少しは自惚れることがなくなるでしょうに。」

トムがジューリアにお祝いを言いに来る。トムはエイヴィスの下手糞な演技を見てから彼女に対する興味を失ってしまい、またジューリアに言い寄ろうとし始めると、ジューリアは第 3 幕のために呼ばれる。

ジューリアは出て行きかける時にマイケルを見る。ジューリアは大喜びするが、マイケルが花を置いてさよならを言うために来ただけだと言うと、ジューリアがいかにも本当らしく気絶して見せるので、マイケルもイーヴィも騙される。二人は幕を開けるのを待つように伝言するが、ジューリアはタイミングよく回復すると、舞台の袖にいて「自信をつけてくれる」ようマイケルに頼んで舞台への登場を間に合わせる。

＜第 3 場＞（シドンズ劇場の舞台）

大成功だった初日の夜の終わりに、パーキス氏（第 1 幕のカメラマン）が楽屋にいるジューリアの写真を撮りに来る。パーキス氏は知り合いであることも忘れてマイケルを不用意に脇にどかせる。カメラマンが行ってしまうと、マイケルはジューリアに、芝居は彼にとって「不治の病」だと告白する。逃げ出そうとしたが、芝居なしにはやっていけないというのだ。マイケルはジューリアを夕食に連れ出して改めてもう一度プロポーズしようと提案する。

イーヴィが楽屋口にサインを求める人たちが殺到していると注意するの

	で、ジューリアは劇場の正面から出て行こうと決める。最後のセリフは、ジューリアが劇場の通路を歩きながらみんなに陽気に言うお休みなさいである。
上演歴	1941 年 4 月 12 日～（Playhouse, Wilmington, Delaware） 1941 年 11 月 12 日～1942 年 1 月 10 日 （Hudson Theatre, New York）（69 回） 1950 年 1 月 23 日～（Theatre Royal, Brighton） 1950 年 2 月 7 日～（Duke of York's Theatre, London）（118 回） 2022 年 4 月 29～30 日、5 月 20～21 日 （Musical"Vairāk par dzīvi / TEĀTRIS", Liepājas Teātris, Latvijas）（4 回）
初　版	Samuel French, New York（1942 年） Samuel French, London（1951 年）
翻訳書	『劇場』 （2019 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳、イギリス上演版）
日 本 上演歴	『劇場－汝の名は女優－』 （2016 年、NLT/劇団〈ま〉、池田政之翻案・演出、旺なつき主演） ※池田政之による上演台本は総合演劇雑誌『テアトロ』2016 年 11 月号（カモミール社）に掲載されている。

№43	ジ　ェ　イ　ン （3 幕）
原　題	Jane （S. N. Behrman による同名短編小説の翻案）
梗　概	（芝居はミリセント・タワーのロンドンの家で進行する。） ［第 1 幕］（春の午後遅く） ハイドパーク通りにあるタワー夫人の客間で、夫人の若い娘アンがピーター・シェイと話している。「もしあなたがまだ結婚していなかったら、わたしと結婚してくださるかしら？」とアンがピーターに尋ねる。ピーターは異議を唱える……僕と結婚するのは、あまり賢いとはいえないと思う。しかしながら、ピーターの妻――イギリスのパスポートを与えるためにピーターが騎士道精神から結婚したが、結局逃げ損ねて、今は強制収容所にいるチェコの亡命者――という邪魔な存在があるにもかかわらず、二人はお互いに愛し合っていることを認める。 タワー夫人の元夫ウィリアム・タワーが入って来る。ウィリアムはアメリカから戻ったばかりで、娘に会いに立ち寄っただけだから、ピーターに対して特に感情をむき出しにしている訳ではないが、ピーターはあわてて逃げ出す。タワー夫人（ミリー）は元夫をおざなりなキスで迎える。タワー夫人は義理の妹ジェイン・ファウラーが――明日だと思い込んでいるのだが――泊まりに来るという知らせのことで頭がいっぱいなのだ。「ジェインは母にとって苦労の種なの」と娘が説明する。ジェインはリバプールからやって来るのだが、未亡人であり、善良だが身なりの野暮ったい田舎者で、たまらなく親切で……ミリーより 20 歳は老けて見えるのだが、誰にでも二人は同い年だと言うのだ。 両親が自分の恋愛のことを話し合うのに任せて、アンは二階へ行く。タワーは青年に好印象を持ったが、ミリーは彼が「横柄で一文無しで無職」だからダメだと言い、元夫に「彼をへこませる」よう要求する。新聞王アラン・フロービシャーが娘との結婚を望むかもしれないとミリーがほのめかすと、タワーは彼を受け入れるよう忠告する。 突然、ジェイン・ファウラーの到着が告げられて、二人はびっくり仰天する。（ミリーは電報の日付を読み間違えていたのだ。）ジェインは流行遅れの奇妙な服を着た中年女だが、それにもかかわらず若くて率直で元気な印象を与える。 ミリーがタワーを紹介すると、ジェインは（彼と会う初めてなのだが）親しげに挨拶する。三人はお茶を飲み始める。フロービシャー卿が来ると聞いて、ジェインはミリーが彼をどれだけ熱狂的にほめそやしていたか思い出す。それから、ジェインは自分の大ニュースを持ち出す。再婚するもりであり、彼女の「若い彼氏」にここに会いに来るよう頼んだというのだ。 ジェインが二階で着替えをしている間、残った二人はこの驚くべき事の成

り行きについて話し合い、「若い彼氏」は恐らく巨体で頭の禿げた金持ちだと結論づける。そうこうするうちに、フロービシャー卿の来訪が告げられる。彼は絶好調であり、女性たちとの武勇伝を得意そうに話す。「誰だって一夫多妻なのだ――内緒でね。わたしの場合は――大っぴらなだけだ。」

ジェインが下りて来てフロービシャーに紹介されると、すぐに口論が始まる。ジェインは面と向かって彼を「年甲斐もなく青臭い人」と評してかんかんに怒らせ、タワーを喜ばせる。

ジェインの「若い彼氏」ギルバート・フロービシャーの到着によって、話が転換する。彼は実際若くて非常に魅力的である。如才なくちょっと立ち寄った間に、彼はみんなに好印象を与えるよう最善を尽くす。しかしながら、ミリーは怒り心頭で、時をおかずにジェインに、息子といってもおかしくない若い男と結婚するなんて気が狂っているに違いない、お金だけが目当てなのははっきりしていると言う。ジェインはギルバートに恋している訳ではないし、彼にもそう言ってあると言う……。未亡人でいるのに飽きたし、5 回もプロポーズされたからなのだ。彼の方はジェインが面白がらせてくれるから好きなのだ。

ミリーが涙に濡れて引き下がると、ギルバートが戻って来る。彼は自分たちが起こした騒ぎを楽しんでいる。二人は翌日結婚する予定なのだが、ジェインが彼に結婚をやめる最後のチャンスを与えても、彼は即座に拒絶する。ジェインは、もし将来二人のうちのどちらかが自由になりたいと思ったら、もう一方は邪魔をしないことを条件として要求する。ギルバートは彼女の条件を「ばかばかしい」と評する――彼はジェインに魅了されていて、残りの人生を彼女と一緒に過ごす用意がすっかりできているのだ。二人は一緒に庭を散歩しに出て行く。

この状況について話し合い、ウィリアムとミリーは見解の相違を認める。ウィリアムはこれが冗談だと思い、ミリーは、これは悲劇であり、この結婚はせいぜい 6 か月しか続かないだろうと決めつける。

［第 2 幕］（14 か月後）

6 か月後、ウィリアム・タワーはインドから戻って来たばかりである。彼は元妻が「興奮状態」であることに気づく――相変わらずピーター・シェイにぞっこんのアンのことと、パッとしない変なオバサンから進化して社交界で羽振りをきかせることに成功したジェインのことである。その上、フロービシャー卿が――ミリーは彼を自分の領分だと見なしているのだが――ジェインに関心を持っているのだ。ジェインはウイットに富んだ人として名声を勝ち取ったが、彼女の率直さは危険なのだ。つい最近、ミリーの有力な友人の一人、セント・アース夫人をひどく怒らせてしまった。このことが、偶然にも、ギルバートを悩ませることになったのだ。（彼が落ち込んで言うには）彼はセント・アース家の町の別邸の室内装飾をした手数料を期待していたからだ。

	ギルバートとタワーは一緒に一杯やりながらおしゃべりをする。若い方は、自分とジェインは一緒にいてとても幸せだと言う。彼はどうしてジェインがそんなに面白いのか明確に言えないが、タワーは彼女が本当のことを言うからだということをそれとなく言う。「我々の世界ではそれが珍しいから、世間の人はとんでもなくおかしいと思うのだ。」 ジェインが現れると、タワーは彼女の外見を見てびっくりする――夫がデザインした大胆で見事なイブニングドレスを着て何歳も若く見える。ギルバートは彼女にシリングハースト卿から来た週末パーティー招待の電報を手渡す。ギルバートはそれを受けるように説得する。これが 5 回目の招待で、彼は全部受けられたらいいのにと思っているだけである。その後、ジェインはタワーに、ギルバートのことが心配だと打ち明ける。今のところ、彼は社交界の生活にすっかり興奮しているが、じきにもっと満足なものを求めるだろう。だから、彼女はそれを与える用意をしなければならないのだ。 そして、ジェインはタワーに、ジェインに悩みを打ち明けていたアンとピーターについて話す。フロービシャー卿を通じて、ジェインは捕虜収容所にいるピーターの妻になんとか会って、彼女の将来のための「計画」（まだ彼には話さないが）を立てていたのだった。 ギルバートはジェインに自分たち二人の新居の図面を見せる。ギルバートが驚いたことに、ジェインはあまり気乗りしない――盛大なもてなしのために造られた階段を見ると、自分があまり若くないという気持ちになるのだった。「そんなバカな！」とギルバートは声高に言う。「君はロンドンの人気者なんだよ。」「どういうこと？」とジェインが尋ねる。「みんながあまりよく知らなかったり、これ以上知り合いになりたくなかったり、本当のところ、あまり関心のないような一連の人たちをやんわりと楽しませているということだよ。」ジェインは図面を拒絶する。「今日、君は二度も僕の頼みごとを無駄にした。」今にも二人が喧嘩になりそうな時に、ジェインからの電話の呼び出しに応じてフロービシャー卿が尋ねて来る。しばらくして、ピーター・シェイが到着する。 ジェインはピーターに仕事を見つけようとしているが、ピーターは攻撃的に左翼的な傾向を誇示し、自分が望むことで最もあり得ないのはフロービシャーのために働くことだとはっきり言う――フロービシャー卿はそれを巧妙な戦略とみなす。ピーターがアンを探しに行っている間、ジェインは腰を落ち着けてフロービシャーに話をし、彼の影響力を使ってピーターの妻を解放し、イギリスに連れて来るよう訴える――そうすれば、彼女は離婚してピーターを自由にすることができるのだ。 例によって、ジェインはフロービシャーを刺激して激昂させる。フロービシャーはジェインの望むものは与えないと断言し、ミリーが入って来ると、それまで彼女には分からないように用心していた話をすべて話す。ミリーは全員に対して非常に怒るが、ジェインに対してはアンが信頼していただけに

	尚更である。しかしながら、ジェインは、ミリーがギルバートを同伴してオペラの初日に行けるようチケットを提供することでミリーをなだめる。その間に、ジェインは「同世代の男性二人と一夜を過ごすなんて、今度ばかりは大した息抜きになることでしょうね。」と言いながら、タワー、フロービシャーと一緒に食事に出掛ける。 ［第 3 幕］（翌日） 　ジェインが出版されたばかりのピーターの詩集を読んでいるのをタワーが見つける。彼はジェインにこの無一文の青年と結婚する考えを諦めるよう娘を説得してもらいたいのだが、ジェインには前もって考えていた計画があった。ピーターの妻が解放されたら、養女にするつもりなのだ。ギルバートが困ることになるかもしれない、とタワーがそれとなく言う――ギルバートを失ってしまうことさえあるかもしれない。ジェインがその心づもりは十分できていると冷静に答えると、タワーは驚く――ジェインには二人の結婚が永遠には続かないことがずっと分かっていたのだ。 　ギルバートがジェインを棄てるだろうという情報を元夫が伝えると、ミリーは狂喜する。当の青年が現れると、タワーはやがて「彼の家族に加わる人間」について意地の悪い祝いの言葉を述べる。青年が完全にまごついてしまっている間、ミリーは断然ショックを受ける。「あの歳で！　決して助からないわ！」ギルバートはマルサス主義（人口増加は幾何級数的で、食糧増産は算術級数的であり、戦争・飢饉・疫病などが人口を抑制するとする）者であり――赤ん坊は無駄だと断言する。 　ちょっとした騒ぎを楽しんでから、タワーが、ジェインは自ら家族に加わる人間を供給するのではなく、養女を迎えるつもりであり、ジェインの娘になるのはピーターの妻だと説明する。ジェインが自分を笑い者にするつもりだと感じて、ギルバートはひどく怒る。しかし、ミリーのへつらうような同情と彼が望む手数料を全部もらえるように助けてやろうという提案にゴロゴロと喉を鳴らす。 　ジェインが入って来ると、喧嘩が始まる。ジェインはギルバートが自分勝手だと言って非難する。ギルバートが人間は皆自分勝手であり、それを否定する人間は皆嘘つきか偽善者だという皮肉な考え方をしているものだから、驚いたことに、ジェインはギルバートが「わたしには老け過ぎ」だと答える。ギルバートは、もしそうなら、ジェインが誰かもっと若いのと結婚してくれても全く結構だと言うと、ドアをバタンと閉めて出て行く。 　その後すぐ、フロービシャーが到着し、ギルバートがジェインを棄てたことを聞く。「そら見たことか」と彼は失礼極まりない言葉をはく。「なあ、ジェイン」とタワーが言う。「アランが随分無礼なことからすると、わたしが思うに、彼はあなたにひどく惹かれているに違いない。」「それが本当だといいわ」とジェインは言う。「実を言うと、わたしもアランにひどく惹かれているものだから。」タワーは自らがジェインに冗談半分の求婚をすることによっ

	て、求婚を渋る者を駆り立てる。そして、アランとジェインを二人だけにして去る。 　フロービシャーはジェインに、ピーターの妻を解放することに成功したと話す――彼女は数時間の内にクロイドン空港に着く予定なのだ。彼は断固としてジェインのためにそれをやったのではないと言うのだが、彼女の心からの偽りのない感謝の念を弱めることにはならない。ジェインは、今やギルバートに棄てられたのだから、タワーと結婚しても構わないのだということをほのめかして、巧みにフロービシャーの嫉妬心を掻き立てる。「でも、あの人はかなり複雑だわ。もしかすると、あなたみたいな――単純な人と結婚する方が無難かもしれないわ。」驚いたフロービシャーは、チベットまでタワーに同行してはどうかと言い出す。そして、「女の子に電話する」と言いながら、飛び出していく。 　そうこうしている内に、ピーターとアンが入って来て、良い知らせを聞く。二人は例の難民に会うため一緒に空港に出掛ける。 　タワーは「フロービシャーにショックを与えてパニック状態から救って」みてはどうかと言い出す。フロービシャーが戻って来るなりジェインを両腕に抱くと、ジェインは調子を合わせながら、彼のことを熱愛していると言う。二人の男が代わる代わるジェインに求婚する。ミリーが入って来ると、驚いたことに、ジェインとフロービシャーが愛のために――結婚する予定だと聞かされる。
上演歴	1946 年 12 月 30 日～（Grand Theatre, Blackpool） 1947 年 1 月 29 日～（Aldwych Theatre, London）（247 回） 1952 年 2 月 1 日～4 月 26 日（Coronet Theatre, New York）（100 回）
初　版	Random House, New York（illustrated edition）（1952 年） Samuel French, New York（acting edition）（1953 年）
翻訳書	『ジェイン』（2018 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№44	パーティーの前に （2 幕）
原　題	Before the Party （Rodney Ackland による同名短編小説の翻案）
梗　概	（芝居はサリー州にあるスキナー家のローラの部屋で進行する。） ［第 1 幕］（午後） 　ローラ・ウィッティンガム――夫が亡くなった西アフリカから最近戻った若い未亡人――は寝室で家族と一緒にケープタウン主教が主賓の園遊会に行く準備をしている。彼女はガウンを着ているが、求婚者のデイビッド・マーシャルが部屋に入ることを許さない。彼は、彼女が結婚を約束しておきながら、突然気が変わって家から逃げ出した理由を知りたがっている。 　ローラの未婚の姉のキャスリーン・スキナーは、デイビッドが妹の寝室にいるのをみつけてショックを受ける。彼女は捨てぜりふとともに出て行く。「いけないと思うわ――喪に服している時に、こんなことを続けるのは。」これを聞いたデイビッドは、ローラが躊躇しているのは、夫が亡くなってから少ししか時間が経っていないのが理由だと考える。デイビッドはローラに熱烈なキスをするが、ローラは抵抗しない。二人が将来の計画を立てていると、12 歳の妹に中断させられる。ローラは妹に後で来るようにと言う。ローラは、家族が嫌悪感を催すのを分かっていながら、かわいらしいピンクのワンピースをするっと着る。 　ローラの母、スキナー夫人は、実を言うと、ローラがワンピースしか着ようとしないのは当然だと思っている。彼女は（今は亡き義理の息子からのプレゼントである）飾り羽毛のついた園遊会用の帽子を自慢に思っている。キャスリーンが問題の処理に取りかかる――スーザンを着替えに行かせ、ローラがパーティーでピンクを着るつもりであることを母に告げる。キャスリーンは友人から、ローラの夫、ハロルドは（ローラが断言していたように）マラリアで死んだのではなく自殺だったと主教が言っていると聞いていたのだ。ローラは娘のジェレミーのためを思ってそう話したのだと説明する。今や真実が明かされたのだから、ローラは喪服を着なければいけない。さもないと、みんなが「変」に思うだろう、とスキナー夫人が意見を述べる。「みんな、デイビッドとわたしが結婚する予定だと聞いたら、恐らくその方がもっと変だと思うわ」とローラが言い返し、母親と姉はぞっとする。二人はローラにまだ父親には話さないように懇願する。父親は政治に関するスピーチの準備中で、心配させてはいけないからだ。 　デイビッドがやって来て、ローラの入れ知恵でさらに家族に気に入られようとする。スキナー氏がいらいらした気分でガウンを着て現れ、妻を台所に行かせて、昼寝から彼を目覚めさせた論争に決着をつける。車にガソリンが入っていないが、この焼けつくような暑い日に 3 マイルも歩いて園遊会に行くのは嫌だ、と彼は不平を言う。デイビッドが彼のために闇市のガソリン（こ

	の時期は第 2 次世界大戦が終わったばかりで、この芝居のユーモアの多くは、制約をかわしたり、欠乏を克服しようとする試みにある）で「何とかしよう」と申し出るが、スキナー氏は断固として拒絶する。ドアハンドルが外れると、彼の怒りは増す。 キャスリーンは父親にハロルドの死について話そうとするが、父親はハンドルと格闘することの方に一生懸命で、ヒステリーを起こしていたメードのミュリエルをコックが台所の戸棚に閉じ込めたが、今は辞めてやると言って脅しているという知らせを持ってスキナー夫人がやって来ると、キャスリーンの話はさらに後回しにされる。いい厄介払いになるとスキナー氏は言うが、妻はミュリエルの伯父が百姓で、彼を通じて特別に肉とバターを手に入れていることを指摘する。父親が最もふさわしくないと思う知り合いたちとスーザンが「ある」映画に行ったことが分かって新たな展開になる。スーザンは愛想をつかされて自分の部屋へ追いやられる。スキナー氏はコックに解雇予告をしに行く。 一方、スキナー夫人はローラのくずかごの中にずたずたに引き裂かれたハロルドの写真を見つける。このことから、ハロルドの自殺とローラが申し込まれたデイビッドとの結婚についての疑問が再燃する。ローラはパーティーの前にその問題について議論しないよう両親に忠告するが、両親はどうしても議論すると言い張る。キャスリーンは、ハロルドが酒飲みで、振顫譫妄（しんせんせんもう：アルコール中毒による震え・幻覚）の発作で自殺したという噂を繰り返す。「彼は酒飲みだったの？」とスキナー夫人は尋ねる。「大酒飲みだったわ！」とローラは驚くべき答えをする。今やローラは追い立てられて両親に真実を話す。ローラは決してハロルドを愛してはいなかったが、両親に「彼を捕まえ」させたのだ。彼女が本当に愛していた男と結婚するのを両親に妨げられてみじめだったからだ。ハロルドの方は、アフリカに戻った時に飲酒から遠ざけてくれる妻を見つけるためにイギリスに来ていた。子供が生まれて数週間彼を置いて行かなければならなくなるまで、最初と同じように万事がかなり順調に進んでいた。彼女が戻って彼がぐでんぐでんになっているのを見つけると、それ以降彼は周期的に発作を起こすようになった。決定的な瞬間が来たのは、1 週間の休暇の後、空になったボトルをそこら中に置いて彼が昏睡状態でいるのを彼女が見つけた時だった。「今日になっても、何か起きたのか、正確に言えないわ。彼が寝ていたベッドのそばの壁にナイフがあったんだけど……突然、彼の喉から血が噴き出して――喉に交差した大きな赤い切り傷があった。」「悪い女だ、それじゃ殺人だ！」と父親は声を上げる。 ぞっとしている一同の中に、ドアのところで聞いていたスーザンを引っ張って婆やが急に入って来る。子供はローラの脚にすがりついて我を忘れて泣きじゃくり、ローラは映画の一場面の話をしていただけだと母親が説明しても騙されない。チョコレートで慰めるのを断わって二階へ行く。

	婆やも（少し耳が遠いのだが）ドア越しに聞いていたのだろうか、召使たちにしゃべり歩くのではないだろうかと家族は気を揉む。ローラは、絶対見つかりっこないと冷静に言う。父親は、弁護士として、殺人を容赦しなければなせないという悩ましい立場にあることになる。 ガソリンが手に入ったというデイビッドの声で、一同は正気に戻る。気が動転しているので、みんなはパーティーに行かざるを得ないと感じる。行かなかったら、人々から何を言われるかが怖いからだ。スーザンは残りたいと頼むが、姉たちに断固として身なりをきちんとさせられて連れて行かれる。婆やは一同に、コックが夕食前に出て行くので、夕食は冷たい食事になるだろうと告げる。婆やは一同が楽しむように願って見送る。 ［第 2 幕］（3 時間後） 一家はどしゃ降りの雨の中を帰り着く。スキナー夫人の飾り羽毛の付いた帽子は見る影もなく、誰もが神経を苛立たせている。ローラは一緒ではない――彼女は（キャスリーンの推測では）デイビッドと喧嘩して、早くパーティーを外していたのだ。何よりもまずいことには、一家は主教とそのほかに二人の客を夕食に招待したのだが、コックがいないというのは災難である。スキナー夫人が、すべて誤解だったと言ってコックを呼び戻すと、コックはすでに車道に下りて行く途中だった。 スーザンは父親と二人だけで話したいと頼む。ローラのことについて気持ちをすっきりさせたいのだ。だが、スキナー氏はコックと話しに行きたくて、スーザンにはその問題はもう二度と口にしたり考えたりするなと言うだけである。スーザンが悪人に対する地獄の苦しみを心配して、聖書は本当かと尋ねても助けにならない。その問題を避けて、ガールスカートに入って健全なことで心を一杯にする方がよいと提案する。そして、台所へと下りて行く。 ローラが疲労困憊して入って来てアスピリンを求め、ベッドに横になる。母親は泣いているが、自ら慰めになる話を作り上げていた……。ローラの「一時的な記憶喪失」の間に、ハロルドに恨みを持った原住民の召使が入って来て殺したのだとしたらどうだろう？　母親のために、ローラはこの作り話に賛成する。スキナー夫人はキャスリーンと食べ物のことを話し合った後、姉妹を二人共置いてコックに会いに下りて行く。 二人の姉妹は率直に話し合うが、ローラは自分の恋愛関係をキャスリーンが嫉妬心から一貫して邪魔してきたことを非難する。一方、キャスリーンはローラはデイビッドとの関係を断つべきだとはっきり言う――あんなことをやったのだから、幸せになる権利はないと言うのだ。さらにやり返してから、キャスリーンは涙を浮かべて自分の部屋へと引き上げる。ちょうどその時、デイビッドが入って来る。ローラがハロルドの自殺の話を打ち明けていなかったので、デイビッドは傷付いてパーティーから早く抜け出していたのだ。二人はキスして仲直りするが、ローラはそれ以上の話をする勇気がない。デイビッドがスキナー氏にあげるためにウイスキーのボトルを 1 本持って来て

いて、二人とも一杯飲む。デイビッドが去ろうとすると、キャスリーンが出て来て妹を責めようとするが、デイビッドは聞く耳を持たない。

姉妹と両親の間で論争が続く。スキナー氏は、ローラがどうしてもデイビッドと結婚すると言い張るのなら、ローラの息子のために貸している金を取り返して家から追い出すぞと言って脅す。

ローラはデイビッドにすべてを話すと答える。デイビッドがそれでも彼女を望もうと望まなかろうと、すぐに出て行く、それも喜んでと。一同が行ってしまうと、スーザンが姉にとっての宗教上の心配事を持って来る。ローラはスーザンに、どんなに邪悪だった人でも、愛の神は永遠に罰することは望まないと請け合う。ローラは、ハロルドに恨みを持つ黒人召使が関わる母親の作り話を持ち出すが、スーザンは信用せず、慰められないまま出て行く。ローラは婆や――すべて聞いていたが、口を閉ざしている――と打ち解けた話をして、すべての真実を告げるデイビッド宛ての手紙を渡す。

パーティーでデイビッドが良い縁故を持っていると聞いて、スキナー夫妻が『紳士録』で調べると、驚いたことに、爵位の相続人であることを発見する。このことで夫妻の態度がすっかり変わる。今や、夫妻は今までこの結婚を止めようとしていたのと同じくらい熱心に進めたがる。

婆やがデイビッドにローラの告白の手紙を渡す。一家はその手紙をデイビッドに読ませないようにするが、彼は注意を払わず、一家はよく考えさせるために彼を独りにして去る。ローラが彼に別れを告げに来る。「どうしてあんなことをしたの？」と彼は尋ねる。「わたしはハロルドを愛していたのに、彼がわたしを裏切ったからよ。」ローラはデイビッドに、夫がどれだけ自分に頼るようになったか、最初は夫を憎んでいたけど、だんだんとどれだけ愛するようになったかを話す。その後、僅か数週間留守にした後、戻って来て夫が眠ることで酒に溺れるのを治すのを見つけた時の激しい嫌悪感を。

ローラは泣き崩れる。デイビッドはローラを両腕に抱いて、今でも愛していると言い、次の列車で一緒に出て行こうと決める。キャスリーンが二人のキスしているところを見つけるが、驚いたことに、心から二人を祝福する。デイビッドも一家の新たな愛想のよさに気づいていた。しかし、ローラは『紳士録』が開いているのを見て、その訳を悟り、一家の俗物根性にすっかり嫌気がさしている。スキナー夫妻は祝いに加わり、婚約したカップルの幸せに祝杯をあげる。

下に車の音が聞こえる――客たちが到着しつつある。ほかの者たちが客を出迎えに急いで出て行くと、ローラはスーザンが暖炉の側でおとなしく座っているのに気づく。ローラはさよならのキスをしようとするが、子供は抱かれるのを拒む。ローラとデイビッドはスーザンを婆やと共に残して静かにそっと出て行く。しかし、デイビッドがそっと戻って来てウイスキーのボトルをポケットに入れる。（芝居の間中ずっと、デイビッドが適量以上に酒を飲むことと、ローラの悲劇が繰り返されそうなことが暗示される。）スーザンは、

	大人は嫌いだ、大人の行動には何の理由も見出せないという言葉で、その夜のこれまでの出来事を要約する。「大人って、むかつく！」
上演歴	1949 年 10 月 26 日～（St. Martin's Theatre, London）（99 回） 2013 年 3 月 21 日～5 月 11 日（Almeida Theatre, London） 2015 年 9 月 2 日～12 日（Theatre Royal, Windsor, UK） 2015 年 9 月 14 日～19 日（Theatre Royal, Norwich, UK） 2015 年 9 月 21 日～26 日（New Victoria Theatre,Woking, UK） 2015 年 9 月 28 日～10 月 3 日（Festival Theatre, Malvern, UK） 2015 年 10 月 5 日～10 日（Everyman Theatre, Cheltenham, UK） 2015 年 10 月 12 日～17 日（Theatre Royal, Bath, UK） 2015 年 10 月 19 日～24 日 （Devonshire Park Theatre, Eastbourne, UK） 2017 年 5 月 4 日～27 日（Salisbury Playhouse, Salisbury, UK） 2018 年 7 月 19 日～10 月 11 日 （Pitlochry Festival Theatre, Port Na Craig, Pitlochry, Scotland）
初　版	Samuel French, London（1950 年）
翻訳書	『パーティーの前に』 （2019 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№45	**モ ー ム の 想 い 出** **（1 幕）**
原　題	Remembering Mr. Maugham （Garson Kanin による同名回想録の舞台化）
梗　概	Maugham 役と Kanin 役による対話形式の二人芝居で、30 ほどのエピソードが再現される。 エピソードごとに、まず Kanin が年代、場所、同席したメンバーなどを説明し、Maugham の発言や二人の会話が再現される。
上演歴	1966 年 11 月（Poetry Center） 1967 年 4 月（Players） 1969 年 3 月（Library of Congress） 1969 年 7 月 22 日（world premiere）～ （Mark Taper Forum, Los Angeles, California） 2010 年 3 月 4 日～13 日（Clurman Theatre, New York）（10 回）
初　版	Samuel French（2010 年）
翻訳書	『モームの想い出』 （2019 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№46	ランベスのライザ
原　題	“Liza of Lambeth” （梅野郁夫による同名長編小説の日本独自翻案）
日　本 上演歴	『ランベスのライザ』 （1972 年、劇団太陽、脚色：梅野郁夫、演出：住友清治） ［上演台本は神奈川県立青少年センター演劇資料室に所蔵されている］

№47	人　間　の　絆 （4 幕）
原　題	Of Human Bondage （Vern Thiessen による同名長編小説の翻案）
梗　概	この芝居の設定は 1890 年代末期のロンドンとなっているが、時代物ではない。舞台のセットは実用品を用いずに劇的効果を上げることが特に重要である。 ［第 1 幕］ セント・ルーク病院のティレル博士が医学生フィリップ・ケアリに、医者になるといろいろな人間模様を見ることになるだろうと告げる。ケアリと同じえび足の患者（少年）が診察を受けに来て、ケアリはみんなに自分の足を見せることになる。ケアリは医学生の友人ダンスフォードから、喫茶店のウエートレス（ミルドレッド）を口説くのを手伝ってほしいと言われる。二人が喫茶店に行くと、ミルドレッドはドイツ人（ミラー）と親しげに話していて、二人にはつっけんどんな態度を取る。ダンスフォードは早々に退散するが、ケアリはミルドレッドをスケッチし、それがきっかけで親しくなり、一緒に食事をしてミュージカルを観に行く約束を取り付ける。帰り際、ケアリは手が塞がっているミルドレッドのエプロンの尻ポケットにスケッチを入れるが、その瞬間、二人の間に何かが起きる。金のないケアリは裕福なダンスフォードに、船医になって世界中を旅行して、金が貯まったらまた絵を描くんだと夢を語る。ケアリとミルドレッドはミュージックホールで耳障りな歌を聞いている。ミルドレッドは楽しんでいるが、ケアリには耐えがたい。ケアリはミルドレッドを送って行き、次のデートの約束を取り付けるが、キスはさせてもらえない。かってケアリがパリで絵の勉強をしていた時に交流のあった画家ローソンと詩人クロンショーが来訪する。クロンショーはこの中に人生の意味があると言ってペルシャ絨毯を置いて行く。ケアリはミルドレッドとデートするが、まだキスさせてもらえない。ケアリの頭の中はミルドレッドのことで一杯で、ティレルの質問に答えられない。ケアリは芝居のチケットを持って喫茶店に行くが、ミルドレッドに一緒に行くのを断わられる。ケアリは試験で落第する。ケアリは久々に喫茶店に行き、ミルドレッドをデートに誘うが、おばが家で待っているし、着る物がないと言って断られる。着る物を買う金を与えることで誘い出すことに成功する。帰り道、二人はキスする。ケアリはミルドレッドに、パリに連れて行って彼女の絵を描きたいと誘うが、はぐらかされる。ケアリはまたもや試験で落第する。ケアリはミルドレッドにプロポーズするが、稼ぎの多いミラーと結婚するからと言って断られる。 ［第 2 幕］ ケアリは三文小説家ノラと親密な関係になる。ケアリを愛するノラは親身になってケアリの世話をし、ケアリはやっと試験に通る。ケアリが下宿に戻

	ると、ミルドレッドが来ている。既婚者のミラーに騙されていたミルドレッドは、妊娠して捨てられたのだ。それでもミルドレッドへの愛がさめないケアリは、ミルドレッドが出産を終えるまで面倒を見るし、その後一緒にパリに行こうと持ちかける。ケアリはノラに決別を告げる手紙を書く。ミルドレッドは出産のため、ケアリを残して田舎へ行く。決別の本当の理由を知らず、手紙に納得できないノラが、ケアリを訪ねて来て、復縁を迫る。ケアリがミルドレッドが戻って来たことを告げると、ノラは諦めて帰る。ミルドレッドが出産を終えて帰って来る。医学生の友人で女たらしのグリフィスが最終試験に合格し､ケアリはミルドレッドとの外食にグリフィスも誘う破目になる。ミルドレッドとグリフィスは意気投合する。グリフィスにのぼせ上ってしまったミルドレッドは、本当はケアリなんか大嫌いだ、一緒にパリには行かないと言う。出産の時に死んでしまえばよかったと泣き崩れるミルドレッドの姿を哀れに思ったケアリは、ミルドレッドにグリフィスと一緒にパリに行けと言って金まで渡す。そうはしたものの、ケアリは屈辱感に苛まれる。 ［第 3 幕］ 　グリフィスはすったもんだのあげくミルドレッドを捨てるが、それが病院の知るところとなり、病院を首になる。ケアリの研修医としての生活が始まると、グリフィスの自殺の知らせが届く。ケアリは患者のアセルニーと親しくなり、アセルニーの自宅に招待される。ケアリは偶然ノラと再会するが、ノラはすでに婚約している。アセルニー宅を訪ねたケアリは、アセルニーの長女サリーと互いに好感を抱く。ケアリはピカデリーで売春婦に身を落としたミルドレッドに出くわす。子供はすでに亡くなっており、金も持っていない。ケアリはミルドレッドに、自分の下宿で家事をやってもらう代わりに食事と居場所を提供することにする。自らも金に困っているケアリは、株式仲買人のマカリスターの儲け話につられてなけなしの金を預ける。ミルドレッドは今まで世話になった見返りのつもりでケアリとの関係を性的関係に持ち込もうとするが、ケアリはもううんざりだと言ってきっぱりと拒絶する。するとミルドレッドの方も、あんたこそうんざりだと言って、悪態をつきながら出て行く。 ［第 4 幕］ 　ケアリの所持金は底をつくが、ボーア戦争が始まってマカリスターに預けた投資金を取り戻すことはできず、また、就職もままならず、下宿を追い出されてしまう。それを知らずにケアリの下宿を訪ねたアセルニーは、ケアリが置いて行った私物の一部を引き取る。ケアリが久しぶりにアセルニー家を訪ねると、温かく迎えられ、アセルニーに勧められて一緒に住むことになる。ケアリはアセルニーが宣伝係をしているリン・アンド・セドリーの売場案内係として就職し、最初はきつい仕事に耐えているが、芸術的才能が評価されてデザイナーになり、給料も上がる。ケアリはサリーに結婚を申し込み、サリーはそれを受け入れる。ケアリはローソンに呼び出され、クロンショーの

	死を知らされる。クロンショーもマカリスターに投資金を預けていたが、マカリスターがその株を売って 2,000 ポンドになっていた。クロンショーには身寄りがなく、その金はケアリとローソンが受け取ることになる。研修医に復帰したケアリが貧民窟に往診に行くと、梅毒を患って瀕死の状態のミルドレッドに遭遇する。ミルドレッドは死に、ケアリはやっと重荷から解き放たれる。ケアリはティレル博士にえび足を手術してもらい、回復の時間を置くためにサリーと共にケントに行く。そこへアセルニーからペルシャ絨毯が届き、ケアリは人生の意味を悟る。ケアリとサリーは一緒に素晴らしい人生を紡いでいこうと誓い合う。
上演歴	2014 年 4 月 24 日～5 月 24 日、2015 年 5 月 2 日～6 月 27 日 2017 年 2 月 23 日～3 月 11 日（Soulpepper Theatre Company） （Marilyn and Charles Baillie Theatre(Young Centre), Toronto） 2017 年 7 月 1 日～26 日（Soulpepper Theatre Company） （Pershing Square Signature Center, New York）（14 回）
初　版	Playwrights Canada Press（2016 年）
翻訳書	『人間の絆』（2020 年、サマセット・モーム翻訳公開ブログ、田原創訳）

№48	ラ　ガ　ブ　ラ　ブ
原　題	Lagablab （Dan Hollanda による短編小説"The Unconquered"の翻案）
梗　概	物語の主人公は、ウニョというゲリラと婚約しているチャヨンという意志の強い女性。ウニョが日本軍との戦いに参加するために出発した夜、チャヨンは日本軍将校のヒロヒトにレイプされ、兄のカーディングは彼女をかばったために性器を切り取られてしまう。さらに、この夜の筆舌に尽くしがたい行為によって、チャヨンは望まぬ子供を産むはめになる。これを知ったヒロヒトは後悔の念に駆られ、チャヨンの家族を養い、結婚を申し込むことで自分の犯した罪を償おうと決意する。しかし、ウニョとカーディングが日本軍の手によって殺されたことを知り、チャヨンの心に大きな炎が燃え上がる。正義を求める怒りの炎、復讐のために燃え上がる炎、自ら言語に絶する行為をするウニョの魂を焼き尽くそうという炎である。
上演歴	2016 年 9 月 23 日～10 月 30 日（Artist Playground） （The Little Room Upstairs, Quezon City, Philippines）

№49	パ リ で の ラ ン チ
原　題	A Lunch in Paris （短編小説"The Luncheon"の翻案）
梗　概	パリに住む中流階級の作家と、彼に憧れる女性との物語。彼女は彼に会って昼食をとりたいと言う。彼はその提案を受け入れるが、彼女がずっと年上の女性で、高級なレストランを選んでいたのを見てショックを受ける。 しかも、1 か月の生活費はわずか数フランしかない。彼女は次々と高価な料理を注文し、彼は一文無しになってしまう。しかし、彼は最後に復讐を果たす。皮肉とユーモアが織り交ざった物語。
上演歴	2017 年 9 月 10 日～16 日 （Akshara Theatre, Baba Kharak Singh Marg, New Delhi, India） 2019 年 3 月 9 日 （Akshara Theatre, Baba Kharak Singh Marg, New Delhi, India）